

273

58

共愛女学校史



* 0050932000 *

0050932-000

273-58

共愛女学校史

共愛女学校・編

共愛女学校

昭和17

AHM

序にかへて

山崎武甫氏 寄贈本

私立學校が我が國の文化に多大の貢獻を爲して來た事は何人も之を認めるであらう、併しその經營の並大抵ならぬ事を眞に理解する人は割合尠い。そう苦心して迄も私立學校を經營するのは特色ある人材を輩出せしめ以て教育報國をしやうとの止むにやまれぬ愛國の熱情の迸りである。共愛女學校も一個の私立學校であつて種々の特異性がある。試みに其の著しい點を擧げると

一、明治二十一年創設されてから現今に至る迄（今後は勿論のこと）曾て外國から一錢たりとも補助を受けた事がない、従つて世人が稍もすれば之をミツシヨン、スクールと考へたのは全く誤認に依る。

二、創立者達は基督教信者で日本の家庭のために信念ある主婦を養成しやうとの念慮と熱望を有つてゐたが、教派宗派に虜はれてはゐなかつた。昭和の初め五人の理事は四つの教派に屬し教職員も亦様々の教派の信者であつた。

三、創立當時から當事者、教職員達の多くは薄給又は無給で働いた（須田幹事夫妻はその著しきもので）今日も尙その氣風があつて、名利を度外視した人でないと勤まらぬ。

目次

序

創立……………(一)

最初の十年間……………(五)

堀校長時代……………(九)

同窓會雜誌の誕生前後

共愛社

順調なる進展

川合校長時代……………(一〇)

就任

様々の改正と會の設立

共愛寮

擴張と増築と創立記念日

川合校長と須田幹事夫妻

青柳校長時代……………(三九)

青柳校長

斯く特色ある學校であるが世に知られることを求めず黙々として五十數年やつて來たのは創立者
 深澤利重の滅欲奉仕の精神が繼承された結果で、本書が編輯されたのも世に問ふ積りでは無く資料
 の散逸を恐れ後世に對する責任感から出發して居る。若し以上の諸點が明かにされ本校の緣故者、
 有志が一層その精神を會得し本校をしていよ／＼その使命を達成し上州女子教育の精神道場として
 その特色を發揮せしめたならば編者の勞が酬ひられたわけである。
 所懐を誌して編者の骨折りを謝し且讀者諸兄姉の健康の増進、皇國臣民の本分を完全に盡されん
 ことを念願するものである。

昭和十七年十二月

周再賜

校舎と宿寮と講堂と

財團法人共愛社

半田平次郎氏

生徒の徽章

宿寮の生活

二葉會と愛隣會

御大葬・校長辭職

柏木假校長時代

柏木義圓氏

バザーと活動寫眞會

柳田校長時代

就任

振興記念日

森村堯太氏の永眠

文部大臣指定

半田多加子刀自

周校長時代

周再賜氏

會の整理と共愛時報發行

詮衡方針發表と維持會

學校と其の卒業生

施行細則の制定

共愛館新築

共愛共濟會

女子青年會

自治會

그리스オールド獎學基金

教會と日曜學校

創立四十週年

御大典奉祝と記念事業

同窓生に懇へる

逆境裡の進展

深澤利重氏逝く

私立學校經營の悩み

昭和十年頃の寮生活

回顧十年

(七一)

(七九)

(九〇)

創立五十年記念事業
創立四十九週年記念日
創立五十週年
日支事變と本校
昭和十三年に於ける寄宿舎
二つの大損失
必要なものは與へられる
周、杉山兩氏謝恩會並に杉山氏の永眠
御盛儀と愛國農園と負債整理
昭和十七年に於ける宿寮

附 録

創立以來教職員
卒業生一覽
毎十年經費一覽
縣市補助金
敷地建物

共愛女學校史

創 立

明治二十年前後に於ける我が國一般の女子教育に對する考へは甚だ幼稚で、當時小學校以上の女子教育機關は日本全國としても猶十數個所に過ぎず、本縣に於ては唯一個所前橋市に設置せられてあつた縣立女學校すら入學志望者の少ない爲に閉鎖した程であつて、多くは女子に高等教育を施すが如きは全く無用の贅事と見られたのであつた。然うした中に在りて稀に東京、横濱等に遊學して歸つて來る様な婦人もあつたが、それらの人々は凡てが餘りに行き過ぎて居て地方の家庭にはびつたりしない感があつた。のみならず、それらは、女子教育無用論者をして其の持論を強化せしむる逆効果を生じたのであつた。

然うした時に當つて、郷土の先覺者新島襄其の他の感化影響に由つて早く基督教を信仰して、國家を想ひ、同胞を愛し、教育の急務を知つた數名の識者等は、當時に於て殊に閉却せられてゐた女子教育に着目した。之は正しい考へであつた。有ゆる人間は、女子に由つて生れ、女子に由つて育てられる。人間を作ることは、女子が現生に於ける最大最高の任務である。作られる人間の良否は多く母たる女子の人物のそれに懸る。偉大なる國民は、賢明なる母に由つて作られる。女子教育は、國民を作る仕事である。次代國民の素質の水準は、當代女子教育のそれに由つて定まる。そこに女子教育の重要性がある。

彼らの一人深澤利重氏は、九州人であつたが、青年時代に志を立て、故郷を出で、蠶絲業の研究の爲に、明治八年から同十三年迄算へ六ヶ年間、九州から中國、關東から奥州へと、各地に於て有ゆる種類の家庭、會社、工場等に、或は食客となり、或は従業員となり、或は監督となり、様々の境遇に處して人生の辛酸を嘗め盡し、最後に上州前橋に來つて定住したのであるが、其の間に彼の會得したことは『人生の幸不幸、禍福の別るゝ原因は、何れの階級の家庭にしても、主人たる男子の賢愚よりも、主婦たる女子の賢愚に依るものである』而して『世間往々事業に成功したる人を評するに、其の妻の内助の功與かつて力あり云々と、妻女を補助者の如く見做して評する人あるも、それは其の實質をよく見ないので、深く其の實際を研究して見れば、妻女の力に依て良人たる者の事業を成功せしめたものである。』といふ一事であつた。然うした次第で、彼は早く女子教育の忽緒に附すべからざるを知り、其の事を心懸けてゐたのである。

然うしたところに、明治十七年頃、加藤勇次郎といふ人が前橋に來て、基督教を布教する傍ら、二三の有志の協力を得て、前橋英學校を設けて青年等に英語其の他を教へられたが、後加藤氏が去らるゝに及んで竹越與三郎氏が來り事業を繼續せられ、更に擴張を計畫せられたが、時未だ到らず反つて經營困難に陥り所詮廢校の外なきに立ち至つた。此の間始終該校の爲に盡力せられたのは、多野郡の有力者高津仲次郎と前記の深澤利重兩氏であつた。それが明治二十年頃のこと、百計畫きて學校存續の見込が無くなつた時に、そこに十數名の女學生が在學してゐたが、當時同校に教鞭を執つてゐた不破清子（前橋教會牧師不破唯次郎夫人）村山雪子の兩人は、此の有爲の女學生等を廢學せしむるを遺憾となし、もし基督教主義の女學校を設立せられ、現在の女學生等を收容し、且

つ今後女子教育を専らにするといふ事にせらるゝならば、奉仕的に如何なる薄給にても働くからといふことを、深澤高津兩氏等の許に申出でられた。此の熱心なる申出により高津氏等の吐も定つたので、彌々有志者等は、學校の經營を引受けて、基督教主義の女學校を設立することとなり、其の讓渡の相談が明治二十一年二月二十九日夜横山町鍋屋旅館に於て行はれた。其の相談會に出席した人々は、高津仲次郎、深澤利重、關農夫雄等諸氏であつたが、前橋警察署は之に對して前年十二月發布せられた保安條例に違反する秘密集會の嫌疑をかけ、同夜同旅館に宿泊してゐた他の五人の政客等と共に、保安條例違反の名目の下に、同氏等を前橋監獄に收監した。之が所謂上毛八士入牢事件である。これ併しながら、何等犯罪となるべき事柄でもなかつたので、一夜の取調があつて後、翌日は釋放せられたが、本校は斯うした中から誕生したのである。

本校は最初前橋英和女學校と稱し、校舍は従前前橋英學校のものを其の儘使用した。本校創立に際して最も盡力せられたのは、前記深澤、關兩氏及び前橋教會牧師不破唯次郎氏であつた。松本荻江、松宮晴兩氏等も熱心に援助せられ、縣下各地を巡回して本校の爲に寄附金を募集せられた。

斯して、兎も角も出來上つた本校は、初代の校長に不破唯次郎氏を推し、教員としては同氏夫人清子、村山雪子、内田条太郎、深井よし子、青柳新米、中西弘造、ミス・シエツド諸氏が之に當る事となつた。就中、不破清子夫人は熱心に盡力せられたが、不幸にして明治二十二年一月九日永眠せられた。教師等は、孰れも献身的に盡瘁せられ、多くは無給で働かれ、中には其の上毎月一圓宛寄附を爲しつゝ手傳はれた人さへもあつた。生徒も當初は二十名許で誠に少數であつたが、皆仲好

くしてよく學業に勉勵した。

其の頃の生徒は何んなであつたかを知ることは興味ある事ではなくてはならない、之に就て、本校創業の六ヶ月目に入學して第一回の卒業生となつた安中の中村まつ子刀自は語る。

『初代の生徒の中に、ほんだ(丸鬚)を結うた既に人妻となつた知事閣下の御令嬢が英語の時間だけ狎をお供につれて登校せらるゝがあり、十五六歳の小娘から二十歳位の大娘もあり、時として三十歳以上の夫人等が三四人も來られた事もありました。頭髮は、日本髪が多く、しかし中には束髪のお嫁さんもありました。服装は、地味な色柄の筒袖の半纏を着ました。稀には絹物を着る様な人もありましたが、皆な質素でした。忘れもせぬ初めての冬の休暇の時に、各自が萬歳の様な薄花色の大きな風呂敷包を作り、驛迄二三丁計りの所を各々人力車に乗つて行きました。汽車が高崎驛の附近に行つた時、近くに乘つてゐた男の人が「あなた方は工場に行つて働いて今家に歸るのですか」と尋ねました。私は辛うじて一言「いゝゑ」と答へたばかりでした。それでは、此の娘たちは、一體何者だらうかといふことになる、全く判断に苦む様な風體でありました。

其の頃の學費は、授業料が五十錢、寄宿舎の賄費が二圓五十錢、小遣錢は五圓位、之が一ヶ月の費用でした。朝が早いのに、辨當箱が小さかつたので、いつも空腹で困りました。しかし、買食ひは誰もしませぬでした。共愛の生徒が買食ひしたと云はれてはいけませんから、決して買食ひはしませぬでした。在學中只一度、家への土産に蒸菓子を買つたことがあります、其の外には買つたことはありません。

生徒等は、寄宿舎では、大聲で笑つたり話をしたりするといふことはありませんでした。必要があつて話す時でも、ボソ／＼と小さい聲で話しました。

夜は、丸芯のランプで、暗いので、英語の字引を引くのに眼を悪くしました。それに、其のランプ掃除を毎日するのが一仕事でした。

私達は、先生をよく信頼してゐました。其の頃の主任が青柳新米先生、寄宿舎の舎監か村山雪子先生、此の二人の先生をお父さんとお母さんの様に信頼して、皆なが其の言ひつけをよく守りました。そして、何んな事があつても、お父さんとお母さんがゐるからと安心してゐました。

最初の十年間

創立の翌年、明治二十二年七月、校名を變更するの議が起り、上毛共愛女學校と改稱して、外觀を改善し内容を整備する事とした。斯くて同年九月には、當時碓氷郡松井田町に居られた須田明忠氏を招聘して本校の幹事となし、同氏夫人己喜子氏を迎へて寄宿舎の舎監とした。須田氏夫妻は、それから明治四十年十二月に辭任せらるゝ迄十八年間に亘り、學校を吾が家の如くに愛し、全身を打ち込んで盡された。

其の頃、上毛基督教婦人會にレブタ會といふのがあつた。其の會はもと須田己喜子夫人が「女といふ者は、家の事を切盛する間に節約をしようと思へば幾らでもできるものです、米を一握り節約してもよい、一日一厘づゝ位は誰にでも出来ることだから、一人一日一厘づゝ出す事にして一年で三十六錢、之を一口として一人で幾口持つてもよいことにしませう」といつた様な事を云はれたの

が、諸教會の婦人等の共鳴する所となり、レプタ會と稱して釀金してゐたのであつた。それは、慈善事業又は公益事業の爲に捧げる目的であつたが、恰も主唱者の須田夫人が本校に赴任されたのを機會に、同會は同年十一月二十日附を以て金壹百五拾圓を本校に寄贈した。學校では此の金子を、早速校舍新築敷地購入資金とした。

因に、婦人會のレプタは之を先例として年々本校に寄附せられ、上毛基督教婦人會と本校とは特殊の關係を有つことゝなつた。然るに如何なる事由であつたか、明治三十九年から大正十二年迄此のレプタ寄附が中絶した。之は心ある婦人等の氣に懸る事であつた。大正十二年十月高崎教會に於て婦人大會の開催せられた席上、折柄八十一歳の老軀に老病で出席しかねた原市の半田たか子刀自は、令孫半田かく子夫人に傳言して『共愛女學校の發展は、婦人會のレプタ其の他で小さな事から大きくなつたことは嬉しいが、それを忘れられてしまふのは残念であるから、たゞ然うした事があつたといふ報告だけでよいからして下さい。レプタを再興して下さいと願ふわけではないが、記憶だけはしておいて貰ひたい、私の死んだ後に之が消へてしまふのは惜しいから』といった様な事を言はしめられた。それが會場に反響して、松宮晴子夫人其の他が再興を主張し、全會員の賛成を得て再び行はれることゝなつた。當時の校長柳田秀男氏も大に喜ばれたが、最も喜ばれたのは半田たか子刀自で、其の翌年は安心して永眠せられ、レプタは其の後は中絶することなく勵行せられてゐる。此のレプタ寄附といふことは、金額の如何といふことは問題ではない、たゞ之に由つて兩毛の基督教婦人會が本校と特別な關係を有つてゐるといふことが貴いのである。

さて、本校では、敷地購入資金の寄附も受けたので、諸所に其の地を物色してゐたところ、教員

内田桑太郎氏嚴父精一郎氏が岩神村の所有地一反歩を格安に提供せられ、且つ其の隣接地買収の勞を執られたので、初めて合計九百五十六坪九合四勺五才の土地を入手することができた。此の經費は、丁度レプタ會から寄附された百五十圓で間に合つた。斯して、土地が出来たので、彌々明治二十三年四月校舍の建築に着手し、同年十月落成した。經費は五百三圓九十五錢八厘であつたが、寄附金が五百三圓四十四錢九厘あつたから收支は償つた。そこで十一月新校舍に移轉した。新校舍といへば如何にも立派なやうであるが、此の新校舍は誠に粗末な板葺の二階建、二十坪餘の一棟だけで、教室と寄宿舎と炊事場とを兼ねてゐたので、今日から想像すると随分貧相なものであつた。が、初めて自分達のもので出来たので、喜んで元氣づいてゐた。

そればかりでない、新校舍に移ると同時に、その同じ十一月に、文部省から教育勅語の謄本を下賜せられたので、全校の歡喜は更に一倍したのであつた。

是より先 アメリカン・ボードは、前橋市を宣教師の駐錫地に選定し、男女各一名を定住せしめたのであるが、彼等は其の邸宅の敷地を本校の隣接地に購入して、洋館を建築した。爾來、其處に居住する宣教師等は、義侠的に英語、音楽、聖書等の教授を擔當して、本校を援助した。但し本校は、未だ曾て彼等から經營費の援助を受けたことはなかつた。此の事は、特に書き添へておく。

創立者の一人深澤利重氏は、最初から専ら經濟上の責任を負うてよく盡力せられたが、創立後間もなく治ねく縣下に共鳴者を求めて、共愛社なるものを組織し、若干名の常議員を擧げて經營の任に當らしむることゝした。

かくて、翌明治二十四年八月になると、創立以來校長として熱心に盡力せられた不破唯次郎氏が

京都へ轉任せらるゝにつき辭職せられ、氏の後任として前橋教會に來られた杉田潮氏が、同じく後任として本校々長に就任せられた。杉田氏は、二十九年一月迄在職せられたが、其の間は年々數名の卒業生を出した以外には、之といつて取立て、記すべき事件もなかつた。杉田潮氏は名古屋へ轉任せらるゝにつき二十九年一月辭職せられたので、本校常議員會は時を移さず倉賀野の松本勘十郎氏を推舉し、幸に快諾を得、同月中に校長として就任された。然るに、松本氏は、在職一ケ年餘すると健康を害せられ、三十一年春には鎌倉に轉地療養に赴かるゝなど、専ら恢復に手を盡されたけれども効驗なく、遂に同年七月十二日同地に於て永眠せられ、同十五日倉賀野の自宅に於て葬儀が執行せられ、本校職員生徒一同會葬した。本校として現職の校長を失つたことは、眞に遺憾な事であり、痛惜に堪えないことであつた。

同年九月八日、校内に開かれた共愛社の臨時總會に於ては、空席になつた校長の事は問題に上つてゐないが、校舎の増築を協議し、委員として福田福太郎、桑島定助、須田明忠三氏を擧げ、早く既に十月十七日には増築工事に着手し、十二月六日には落成した。

本校は、本年度は校長空席の儘、學年末を迎えた。三十二年三月十二日の常議員會は、本年の卒業式と同時に本校創立第十週年記念會を催し、且つ増築校舎の落成式を舉行することを議決した。猶、本會は、同月七日前橋教會牧師として來任せられた堀貞一氏を本校々長に推薦する事を協議し之を交渉する事とした。堀氏は、同月二十五日に至つて承諾を與へられ、校長として就任された。又、前記の記念會及び落成式等も豫定の通り舉行することが出來、一同感謝した。本校としては、これで漸く八回の卒業式を執行し、總數四十一名の卒業生を出したばかりで、今日から見ればまこ

とにお恥かしい様な状態ではあつたが、それでも兎も角も縣下の女子教育に先鞭をつけて、たとへ細みではあつても、苦心に苦心は重ねながらも、此の十年間をやり通して來たといふ一種の誇りを感じ、どうやら自信らしいものも心に持て、言ひ知らぬ歡喜に満されてゐたのであつた。

本校創立以來教鞭を執つた教師等の事を詳述する餘白を有たないが、主任教師を勤めた人々のみを擧ぐれば、伊庭菊次郎氏は二十八年九月から二十九年一月まで其の職に居り、同月伊庭氏辭任の後を受けて山本徳尙氏が就任したが、三十年四月には又々交迭があつて平山喜八氏が就職した。随分頻繁に交迭したものであつた。

堀 校長 時代

同窓會雜誌の誕生前後

本校は、十週年を記念すると共に、空席九ヶ月にして漸く校長を得て、新學年を迎えたので、校内は何となく活氣が洋溢する様に思はれた。が、相變らず人事は意の如くならず、六月になると主任教師の平山氏が渡米遊學の爲に辭職した。幸に、九月の新學期には、白井俊一氏を聘して後任とすることが出來た。で、其の學期に於ける教師の擔當學課を見るに、校長の堀貞一氏は毎週一回聖書を講義せられ、白井教師は漢學、支那歴史、倫理、數學、作文及び別科生の教授を受持たれ、大竹清子教師は英語、經濟、生理、地理、地文、植物及び音楽を教へられ、深井芳子教師は裁縫の擔任、内田桑太郎講師は音楽と習字、齋藤惇講師は國語、堀愛子夫人は活花其の他、パミリー講師は英語、といった様なことで、教師等は孰れも總力を傾けて努力されたことが窺はれる。朝禮には堀、白

井、大竹、グリスウオード諸氏が代るべく講話された。

其の頃同窓會雜誌發行の議あり、明治三十三年一月には發刊の豫定であつたが『種々の事情ありて』同年三月二十日附で『同窓會雜誌』第一號が出た。菊判十八頁の一小冊子に過ぎなかつたが、それでも當時の本校としては、斯うしたものが同窓會の名で出せる様になつたことは一大進歩であつたと謂へる。其の『發刊のことば』に曰く

赤城の山高く聳ゆる所、利根の流れ水清き畔、我が上毛共愛女學校の基をおきそめしよりいとはやくも十たびの春秋を重ね、卒業生を出すこと四十あまり一人とはなりぬ。時や遠きにあらず、人や多しと云ふにあらねども、過ぎし日共に手を執りかはして、敷島河原に明月に歌ひ、あるは廐橋城の邊の花に戯れし同じ學びの友どちは、今はや西や東とその住みかを隔て、あるは既に嫁ぎて家を齊ふるあり、母となりていとし子をはぐもめるあり、なほ家に在りて父母に事へまつれるあり、または進みて奥深く文の林にわけ入れるなど、其のむきくなすわざし異なれども、花咲きにほふ春の晷、蟲の音しげき秋の夕、折にふれて思ひ出るは、朝な夕なに机をならべて螢の光、窓の雪、書よむ月日かさねにし學びの庭、さては共に喜び共に悲しみ、その睦らひも深かりし友どちの上にあらぬはあらず、しかはあれど、みな身に負へるつとめしあれば、しげく交らひ語り合ふことの容易ならぬをうらみにき。よしや彌生の春の頃、なつかしき學びの舎にて相逢ふ折のなきにはあらねども、これとても世のくさぐさのわづらひにへだてられて、集ひ得るもの十のうち僅かに五六に過ぎず、かくては遠きものいよいよ疎しと云ひけん古へ人の謠の如く、知らず識らずの間にその交らひも薄らがんことの本意なければ、爰に此の冊子をもつして、互の思

ふ思を告げ、またその今の様ども知らせ合ふ媒ともなし、さてはわが上毛共愛女學校の近き狀を聞くにそなへんと欲りすることゝはなりぬ。徒らに世の流を追ひ、筆を弄ぶにはあらずかし。仰ぎ願はくは同窓の諸愛姉、之を以て御身等自身の俱樂部と思ひ公園となし故郷となして、相共に我物として永久に、其の發育成長を助けられんことを、ふみの初めに聊かそのゆゑよしをしるす事かくの如し。

以上を一讀すれば、十分に當年の熱意を擲むことが出来る。同誌は第三號には二十六頁となり、第五號には五十二頁となり、其の後益々擴大發展し、最初は年一回であつたのが三年目からは年二回發行してゐる。

同誌創刊號には、創立以來十年間に教鞭を執られた教師三十名の氏名が掲載されてゐる、即ち、青柳新米、深井芳子、内田糸太郎、故不破清子、村山雪子、ミス・シエツド、加藤徳子、今田滿智子、井出睦世子、河邊文次郎、林外浪子、立石恒子、光篤子、三谷民子、ミス・ハミリー、ノイス、ノイス夫人、住谷八朔、故岡供子、伊庭菊次郎、矢島妙子、山本徳尙、大竹清子、齋藤惇、平山喜八、アルブレクト、アルブレクト夫人、白井俊一、堀愛子、ミス・キース、竹下武松、小鹽高恒諸氏であつた。・點を附したのは其の時尙教鞭を執つてゐた人々である。猶、卒業生は、明治二十五年に第一回五名を出し、明治三十二年迄に八回合計四十一名を出してゐるが、最低は三名で最高は九名である。内既婚二十名、在家十一名、在學三名、教育者四名、永眠三名、不詳一名とある。數字は甚だ貧弱な様であるけれども、當時の上毛婦人界に於て之だけの貢献は、決して尠少なものでなかつたと稽える。

是より先、本校經營の主體として共愛社なるものが組織せられ、幾何かの社員があり、幾名かの常議員が擧げられてゐて、其等の人々が折々常議員會を開いて、學校經營上の事から校内の行事に至るまで協議した。遺憾乍ら明治三十一年三月以前の記録が湮滅して無いので、其の組織内容を詳かにする事が出来ないのであるが、本社には最初の程は常議員會はあつても社長はなかつたらしく明治三十三年三月五日の高崎三浦屋に開かれた常議員會で『校模擴張ノ件ニ關シ先ヅ社長ヲ撰定シテ後萬事ヲ議スル事ニ決ス』とあるけれども、其の時は唯それだけの事で社長の決定には至らず。同年二十三日本校で共愛社總會が催され、諸報告の後將來の方針が議せられ、常議員の改選をなし、深澤利重、森村堯太、畑中七郎、福田福太郎、山口六平、栗原兵次郎、桑島定助、半田平次郎、柏木義圓、後藤源九郎諸氏を推舉したが、社長の事には及んでゐない。同年九月十五日本校に開催された常議員會に於ても、社長推薦の件を議題としたが未だ決議にならず。同年十月二十七日高崎市櫻井元八氏宅に開かれた常議員會に於て、漸く『森村堯太氏ヲ共愛社長ニ推薦スル事』を決議し、同年十一月十七日同氏の社長就任を見た。尙、其の會に於ては『一、校長職務章程ヲ定ムル事。一、女學校敷地所有者ノ名義を常議員ノ名義に改ムル事』等の重要な決議もあつた。而して其の校長職務章程は、翌三十四年四月十五日の常議員會に於て左の如く議決された。

本校長ハ本社教育ノ方針ニ遵據シ本校教育ノ事務ヲ整理シ所屬職員ヲ統裁スルコト
本校長ハ教員ノ任免黜陟及經費ニ關スル事項ハ凡テ社長ニ協議シテ施行スルコト

本校長ハ學科組織ノ變更ニ關シテハ常議員會ノ協賛ヲ經ベキモノトス
猶、該常議員會に於て決議された明治三十四年度本校經常費の總額は金九百五十圓で、内金七百二十圓が教員及び事務員の給料である。之を賄ふ爲に、常議員は一人に付一ヶ年金參拾圓を負擔し、其の他は臨時寄附金を募集する事に決定した。此の會で『學校敷地所有者ノ名義ハ財團ニ改ムルコト』を決議した。

斯うして、常議員並に社員諸氏の熱心なる努力に由て、本校の基礎も漸く固められ、内部も善く整備せられて來たが、此の頃に至つて、本校の教育理想も又世間の認むる所となつて來た様に思はれたので、本校としても使命の重大なることを自覺して、一層完備するの必要を痛感し、明治三十五年一月二十三日下記の如き上申書を前橋市參事會に提出した。

謹みて一書を裁し前橋市參事會に呈す、惟ふに方今女子教育の樞要なる天下已に業に其の等閑に附すべからざるを論ぜざるものなし、賢明なる市參事會員各位閣下等また夙に之れが忽せにすべからざるを見て企圖せらるゝ處あらむ、曩に高崎高等女學校設けられ今に師範學校女子部新設せらると雖も、前者は未だ全縣下の希望を容るゝに足らず、後者は是れ専門特種の學校たり、然り而して我が前橋の地たるや群馬縣下首腦の地として一高等女學校なきは遺憾の極みならずや、我が共愛女學校は明治二十一年市内南曲輪町に創設し、越て二十二年七月岩神村に移轉し、爾來十有餘星霜二百有餘名の女子を養成し、就中前橋市に屬するもの實に八十名に及びたり、元來本校の理想として我が上毛の實業國たるに則り浮華輕薄の風を斥け實業質素を尙とび女徳を修め兼て普通有用の學科を授け、必ずしも多數の學生を收容せむが如きは敢て望まざりしかど去春來頭に

入學希望者を増加し、而も本校經營は元より基本金もなく單に篤志者の贊助と授業料とによりて成立し來れるが故に自由に校舎を増築するが如き餘裕なく、遂に己むなく入學志願者を謝絶せざるを得ざる境遇にあり、斯くの如く日進月歩の駁勢を見繼かに經濟の相償はざるが爲めに其の希望を満す能はざるは洵に千歳の恨事と云はざるべからず、今東西の趨勢に思ひをめぐらし、市の體面に考へ市費を以て幾分の補助あらむには、其の利前橋市は更なり、我が上毛教育の爲め、將又國家に貢献する處豈に尠なしとせむや、閣下等明察の資公益の爲め盡瘁せらるゝを知る、翼はくば微意を納れよ、恐懼再拜

此の請願書が功を奏して、其の年六月二十一日前橋市役所から補助金百五十圓を下附せられた。

順調なる進展

本校は、堀校長が就任せられた頃から、何となく活氣づいて、世間の注目を引き來觀者も次第に多くなり、入學志願者が年々激増の傾向を示し、明治三十五年四月には三十名の入學生があり、開校以來の多數であつたが、翌三十六年四月には一層増加して四十名の募集人員を突破し、九月に至つても尙補缺なきやと問合せて來る者が幾人かあつたと云ふ盛況であつた。

本校では、以前文學會なるものを催し、學生等が國語及び英語の詩歌文章の暗誦又は朗讀、對話劇、感話、音樂の演奏などをして慰樂と親睦との會であつたが、暫らく中絶してゐたのを、明治三十四年十二月第三土曜日に久し振りで再開し、まことに愉快な好い會であつたから、爾後毎月一回第三土曜日に例會を開く事とし、月々趣向を凝して開會した。三十五年七月十八日の如きは、第七

回文學會大會を催し、來賓三十餘名を迎へて、唱歌、文章、對話、英語暗誦、英語唱歌、美文明朗讀、同暗誦、感話、英語對話、同朗讀其の他三十餘番に及び、最後に木村清松氏の批評があり、まことに盛大な會であつた。斯した會も、本校の發展を徵象するものであつた。

明治三十五年七月八日、高崎市高崎館に開會の臨時常議員會は、教室増築の件を議決し、其の建築資金の寄附金募集委員として、堀貞一、須田明忠兩氏を擧げたが、十月一日には早くも二階建十四坪の教室の棟上げをなし、十一月二十八日には之が竣工してゐる。之は双葉寮で、其の増築は從來教室であつた一棟を正しく東西に引直し、東端に四間四方の二階建教室を繼ぎ足したものであつた。今までの狭い二教室を併せて一教室となし、新教室を合して三教室となし、各々三十名を收容する事が出來、二階は作法茶の湯等に用ひらるゝ廣間となつた。此の總工費は、金一千四十九圓五十錢であつた。此の増築工事中は、前橋教會々堂を借受け、其處を假教室として授業をした。

此の年の現在生徒は六十餘名で、今迄にない多數であつた。斯した狀況を呈して來たことは、一般に世間が女子教育の必要を認めて來たといふことにも由るであらうが、それと共に漸く本校の價値が認識さるゝに至つた事にもよるであらうと思はれる。其の頃のこと、一日前本縣知事鈴木定直氏が突然參觀に來られ、校内を隅なく檢分し、授業の狀況を視察した後、同氏は堀校長に對して『一體女子教育は必らず一つの主義がなければならぬと思ひます、貴下が斯して宗教の基礎におやりになつてゐるといふことは誠に結構な事でありませう、此の上とも大に御盡力を願ひます』といった意味のことを繰返し言はれたといふことであるが、それは確かに當時の識者の觀る所を代言したものであつたと思ふ。而してそれは體て、本校の校勢を盛んならしめたのであつた。

斯して、明治三十六年四月二十四日の常議員會に於ては、共愛社を財團法人組織となす事を決議し、準備委員として森村堯太、堀貞一、深澤利重、桑島定助四氏を推舉してゐる。

同年五月二十日には、前橋市役所から補助金五十圓の下附を受けた、請願したのではなかつた。明治三十七年一月二十九日の常議員會に於ては、從來本科三學年であつたのを四學年に變更する事の可否に就て協議した上、柏木義圓、深澤利重、福田福太郎三氏を取調委員に推選してゐる。それと共に校舎の改築設計を議し、建築費金五千圓の募集を決定してゐる。(尤も此の改築は、當時日露戰爭中で時局多端であつたから、四月十九日の常議員會で暫時延期した)是等の決議は、本校が斯うした盛んな機運に向つてゐたことを示すものである。

明治三十七年三月二十三日の總會に於ては、常議員の満期で改選をしてゐるが、其の選定は總會から七名と同窓會から三名を選出する事とし、總會からは半田平次郎、栗原兵次郎、桑島定助、深澤利重、後藤源久郎、齋藤壽雄、森村堯太の七氏、同窓會からは畑中七郎、福田福太郎、柏木義圓の三氏を推舉してゐる。

本總會で決議されたであらうと推定せられる共愛社の改正社則が、明治三十八年五月の『野の花』に掲載されてゐる。當時の本校の内幕を知るには重要な資料であるから、煩を厭はず左に其の全文を収録しておく。

共 愛 社 々 則

本社は基督教主義を以て善良有益なる女子を教育し開明の基礎を建立するを目的とし上毛に在る

基督教信徒及篤志者相集り本社を設立す其社則左の如し

第一條 本社は共愛社と稱す

第二條 本社の目的を達せん爲め前橋市岩神村に共愛女學校を置く

第三條 本社の事務所を共愛女學校内に置く

第四條 社員を分ち左の三種とす

(一)正社員 (二)賛成社員 (三)特別社員

第五條 正社員は毎年金參圓以上を寄附する者若くは一時に金參拾圓以上を寄附せし者にして總會の議員たる権利ある者とす

第六條 賛成社員は毎年金參圓未満の金額若くは物品を寄附する者にして總會の議員たる権利なきものとす

第七條 特別社員は本社に對し功勞ある者にして常議員會の議決により正社員と同一の権利を有する者とす

第八條 會或は社の名稱を以てする第五條第六條の金額若くは物品を寄附する者は一個人と見做す

第九條 本社の役員は左の如し

(一)社長一人 (二)幹事一人 (三)常議員十人

第十條 本社の役員は左の職務權限を執行す但し任期は三年とし再選するも妨なし

第一項 社長は常議員中にて互選し本社一切の事務を監督し其責に任ず

第二項 幹事は常議員會にて選定し社長の命を受け本社事務を執行し會計一切を擔當し其責に任ず且つ社長不在中は代理たるべし

第三項 常議員會は總會に於て正社員特別社員中より七名共愛女學校同窓會會員より三名を選挙し凡て本社に關する重要な事件を議決し社長を互選し且つ幹事及び校長を選定するものとす

第十一條 總會は正社員及び特別社員を以て組織し毎年三月之を開き事務會計の報告及常議員の改選をなすものとす常議員會は毎年二回之を開くその會期は社長之を通知す但し事宜により臨時開會する事あるべし

第十二條 社則は總會出席員三分の二以上の同意に非ざれば改正することを得ず

- | | |
|-------|-------|
| 社長 | 森村堯太 |
| 專任事務員 | 須田明忠 |
| 常議員 | 深澤利重 |
| | 半田平次郎 |
| | 畑中七郎 |
| | 福田福太郎 |
| | 柏木義圓 |
| | 栗原兵次郎 |
| | 桑島定助 |

齋藤壽雄

明治三十七年三月改正

共愛女學校内 共愛社

前記改選の常議員中には後藤源久郎氏の名が見へてゐるけれども、此の社則の署名中にはそれが見へない。代りに須田明忠氏の名が見へるけれども、それは事務員であつて常議員ではなかつたと思はれるが、今はそれらの事實を確かむる由もない。

校長堀貞一氏は、素と前橋教會の牧師であつて、本校獨占の專任校長ではなかつた。校長といへば如何にも名譽の様であるが、當時の本校々長たるや全然無報酬の『全くの名譽校長で、毎年度一回教師等に御馳走をするのが校長の特權であつた』といつた様な待遇であつた。にも拘はらず、堀氏は克く熱心忠實に盡力せられ、此の五ヶ年間に本校は、上述した様に異常なる發展を遂げた。然るに、其の頃に至つて前橋教會は、堀氏が校長職を辭して牧職に専念することを要望したので、氏は三十七年十一月に校長辭任を申出られた。元々無給の校長の事として留任を願ふわけにも行かず、同月十八日の常議員會は、それを受理することを決議し、且つ『校長ハ當分缺員トシテ教頭川合信水氏校長ノ任ヲ心得ラル、事』をも同時に決議してゐる。斯くて堀校長は、明治三十七年十一月二十一日附を以て辭職されたが、偶然にも氏の校長辭任は本校の歴史に一時期を劃する事となつた。といふのは、無給の校長は氏の辭任を以て終焉を告げ、爾後校長は有給となつたからである。而してそれは、本校が發展の一段階であつたと稽える。

川合校長時代

就任

前述の如く、明治三十七年十一月十八日の常議員會で、堀校長の辭任受理と教頭川合信水氏の校長心得任職とが決議せられると、氣の早い堀校長は直ちに翌十九日(土)職員會を開いて自ら辭職の旨を報告された。越えて二十一日(月)朝全校生徒を集めて、共愛社々長森村堯太氏の代理として幹事須田明忠氏から『前橋教會は總會の決議を以て堀先生に、學校をやめて専ら教會の爲に盡力して貰ひたい、と要請したので先生は直ちに本校に辭表を提出せられ、高崎に開かれた常議員會で、其の辭表を受理することに決定したが、今後暫く校長を缺員とし、川合先生を教頭として、校長を心得て貰ふ事に決定した』旨報告された。報告の後、川合氏は起つて一場の挨拶をされた。日誌に其の要點が川合氏の自筆で左の如く記してある。

實ハ余ガ此校ニ來リシ時、堀校長ヨリシテ教頭トナルベクお勸メアリタリ、サレド(一)ハ自己ノ健康未ダ恢復セザルガ爲メ、(二)ニハ未ダ學校ノ事情ニ通ゼザル爲メ、(三)ニハ少シク考フル所アルガ爲メ、其事ヲ辭シ居タリ、二、三回お話アリシモ之ヲ辭シタリ、然ルニ今ヤ前回ノ報告ノ如キ事情アリ、今ニシテ之ヲ辭スルハ、即チ難ヲ避クルナリ、自己ノ健康、又ハ事情ニ通ゼズトイフガ如キ事ノ爲メニ之ヲ辭スルハ、即チ勞ヲ厭フナリ、難ヲ避ケ勞ヲ厭フハ、余ノ性質トシテ能ハザル所ナリ、乃チ快ク此事ヲ御受ケ致シタリ、教育ノ根本義ニ就キテ八十年以上ノ經驗アリ、

自信アリ、タゞぼんやりニテ能ク物事ヲ忘レ、且細キ事ノ出來ヌハ余ノ困ル所ナレドモ、幸ニシテ津田、原、横山等ノ諸先生アリ、共ニ學校ノ爲メヲ思ヒ、相助ケ相働キテ、學校ノ爲メニセラシムル、事ヲ信ズ、故ニ生徒諸君モ安心シテ善ク御勉強ニナラン事ヲ望ム、學校ガ今ヨリモ悪クナルトカ、退歩スルトカイフ事ハ決シテ無キ事ヲ信ズルナリ、職員モ生徒モ共ニ一致シテ勉強シ、堀校長ノ經營ト勞苦トヲシテ水泡ニ歸セシメザラン事ヲ望ムナリ、云々。

堀氏も當日午後登校せられて、一時から生徒一同に對して自ら辭任の報告をされた。堀氏は、學校を罷めても尙前橋に居られ、多少の交渉は有たる事であり、且つ校長心得として後を繼ぐ川合氏が學識才能のある立派な人物であつたから、職員及び學生等の間には、毫も動搖がなかつた。

斯く十一月十八日に常議員會で決議すると、直ぐ其の二十一日には、堀氏は校長を罷め、川合氏は校長心得となり、實質的には更迭を了してしまつたのであるが、翌年三月卒業式直前に『校長就任式』が執行せられ、川合氏の事をそれ迄は『教授』と呼び、其の後は『校長』と稱してゐる。常議員會の決議に基づき、川合氏の正式の稱呼は『校長心得』の筈であるが、上記の如く學校の日誌にも同窓會雜誌にも『校長』と記し、川合氏自身にも然う自稱された様であるから、編者もそれに従ふ事にする。

本校創立以來十八年間未だ曾て校長の就任式は執行された事がなかつたといふのであるが、此の時初めて、實際の就任よりは三ヶ月遅れてではあつたけれども、其の式が擧げられた。時に明治三十八年三月二十二日、共愛社長森村堯太氏、常議員深澤利重、桑島定助兩氏臨席、職員生徒一同を會してまことに嚴肅な式であつた。式の順序は左の通りであつた。

- | | | | |
|-----|---------|---|------|
| (一) | 讚美歌 | 一 | 須田幹事 |
| (二) | 聖書朗讀 | 同 | 同上 |
| (三) | 開會の祈禱 | 同 | 同上 |
| (四) | 校長推薦の辭 | 同 | 同上 |
| (五) | 就任の演説 | 同 | 同上 |
| (六) | 職員總代の挨拶 | 同 | 同上 |
| (七) | 祈禱 | 同 | 同上 |
| (八) | 讚美歌 | 同 | 同上 |

司會者は須田幹事であつた。川合校長の就任の演説は、下記の通りであつた。(本文は川合氏の自筆で同窓會雜誌に掲載されたものである)。

今日は此丁寧なる式を設けられ、余の深く感謝する所なり、以前より就任せよとの御話ありしも、未だ受けざりしが、今回は決心して愈々御受致したり。

如何なる考を以て受けし乎。

名譽の爲めか、あらず、たとへ上州一國を動かすやうなる地位に上るとも(勿論斯の如き事は無けれども、若し有りとしても)余は之を以て名譽と思ふ者に非ず、余が神を信じ、基督を愛する心は、余をして斯の如くならしめたり。

然らば利益の爲めか、あらず、若し利益を求めんと欲せば、他に多くの道あり。然らば何の考を以て受けし乎。

(一)には愛の爲めなり、生徒諸姉を愛し、學校を愛するが爲めなり、余が半年間の教育は、余と諸姉との間に斷ち難き愛の繋ぎを生じたり。

(二)には自ら信する所あるが爲なり、假令諸姉を愛し、學校を愛するも、若し自ら教育者たる資格無くして其任に當らば、是れ僭越なり、されど教育の根本義に就きては、自ら十數年の経験あり、自信あり、幾多苦心の後、神の教育法、基督の教育法に就き、少しく發明する所ありたり、故に今後五年、十年の間、諸姉を教育するとも決して困ることなく、他より乞食をして來らずとも、諸姉を養ひ得て餘りあることを信する者なり。

(三)には困難を負はんが爲なり、今や學校は改革の機に臨めり、發展の時に至れり、幾多の困難生じ來らんこと必然なり、此際に於て逡巡せんことは、持つて生れし一片の義侠心よりするも、天下人類の爲めに難を負ふて十字架に上り給ひし基督の心よりするも、斷じて爲難き所即ち進んで難を負はんことを欲する者也。

以上三個の理由によりて、余は校長の椅子に就きたり。

職員諸兄姉に告ぐ、余は專横自ら喜ぶ者に非ず、虚心坦懷、衆智を容れ、衆考に聽き、善きが上にも善く、美しくしが上にも美しくなさんことは、余の希望する所にして、且實行する所、是れ半年間事を共にせられし諸兄姉の熟知せらるゝ所ならん、然れども此に一つ諸兄姉に申述べたき事あり、斯の如く計り、斯の如く聽くも、或は多數によりて決定し、或は余が判斷によりて決定したる時は、諸兄姉たる者、必ず心より之に服従せられんことを望まざるを得ず、參謀會議の時、幾多の智將謀將各々熱心に忠實に自己の意見を陳ず、議論時に花を咲かすことあり、口角

或は沫を飛ばすことあり、而も總指令官、若くは參謀總長の一斷あるや、各將盡 之に服従し、一致協力して事に當る、是れ日本軍の勝利ある所以なり、彼の露兵の敗るゝ所以のものは、各將個々の意見に執し一致連絡を缺くこと其一因たらずんばあらず、斯の如き事は、諸兄弟の固より知らるゝ所ならん、然れども余は今日此嚴肅なる式場に於て、更に諸兄弟と共に此事を考へんことを欲す、決議に服従し、判斷に服従し、一致して共に進まんこと、實に大切なりと思ふ。

次に生徒諸姉に告ぐ、此學校は獨立自由の學校なり、教會の有に非ず、宣教師の有に非ず、而も教會と宣教師とは、非常の好意を以て學校に盡さるゝなり、牧師の如き、ベッドレー夫人の如き、常に同情を以て學校を助けらる、之に對して感謝の心なかるべからず、當り前の事と思ふべからず、其他の教員諸君皆身を献げて學校の爲めに働けり、他の學校に行けばモット名利を得べき者も、學校を思ひ、諸姉を思ひ、薄給に安んじて働き居らるゝなり、之に對して感謝の心なかるべからず、感謝の心なき者は、人物の發達を見ること能はず、我儘、不足、皆感謝の心なきより出づ、注意せざるべからざるなり。

前に述べたる如く、余は諸姉を愛する心より、校長の任に就きたり、然れども愛は甘味のみならず、時に苦味となることなり、或は優しき同情となりて顯はれ、或は厳しき叱責となりて出づ、涙も愛なり、鞭も愛なり、故に今後或は諸姉を叱責することあらんも是れ威張る心よりするに非ず、余は二百人や三百人に戴かれて得意となるが如き小さき量見の者に非ず、諸姉は余が叱責の裏に無限の愛情あることを知らざるべからず。

余は以上の如き精神を以て、校長たることを諾し、以上の如き精神を以て事に當らんことを欲

する者なり、余の心中、生徒ありて私なし、學校ありて己なし、故に若し余に優りて生徒を導き、學校を益し全體を統轄すべき人來らば、余は何時にても、校長の椅子を其人に譲らんことを欲する者なり、斯く言へばとて、一時腰掛けの如き考にて働くに非ず、神の許し給ふ間は、忠實に、眞面目に、其職責を盡さんことを欲する者なり、之を就任の辭となす。

素より堀校長に不足があつたわけではなかつたが、今や川合氏の就任は、非常な期待と信頼とを以て歓迎された。同窓會雜誌の編者は斯く記してゐる「歡喜の聲を鳥にき、希望の光を花に見る、あゝたのしきこの春よ、我校もまたこのよろこびにもれず、先に教授として來校せられし川合先生、このたび更に校長として教子の爲めに盡さるゝことゝはなりぬ。よき花はそが培養のよろしきに由る、吾等が心の花も師の君の土かひ導かせ給ふにより、いやが上にも麗はしく、家庭に匂ひ、社會に薫するに至らん。」と。以て當時に於ける校内の氣分を窺ふに足るであらう。

様々の改正と會の設立

前記校長就任式の後二日、三月二十四日午後一時から第十四回卒業式が執行せられ、十六名の卒業生があつた。開校以來十八年、此の日初めて本校の卒業式場に知事閣下の來臨を辱ふし、群馬縣知事 吉見輝氏は「諸子が此振古未曾有の大戦の時に當り卒業の榮を得たるは、思ふに永く諸子の記念たるべし、諸子善く本校教育の精神を體し、以て良妻賢母とならんことを望む」と告諭されたといふ事であるが、此の前年迄の卒業式が十三回で、卒業生の總計が九十六名であるのに、その年は十六名といふのであるから非常に賑やかに感ぜられた、其處へ知事閣下の臨場を得たから、月て

が新校長の下に新發足をした本校を祝福するかに思はれ、校内一同が歡喜に滿されたことは想像するに難くない。席上、川合校長は卒業生に誨告を與へて、『嘗て屢言ひし所なるが、此際改めて之を勸む、常に最高の理想を立て、道に進み、義に勵み、順境逆境靈界俗界を一貫して、自らを修め他に盡し、遂に神人合一を期すべし、而して之を行ふに當つて、女子の美性を失ふべからず、靜寂、謙遜、柔順、貞操、忍耐、平和等二千五百年來養成したる日本女性の徳を全うして、以て天地の大道を行ひ、天國を地上に建設せんことを期すべし』と勸めた。之は聽て氏が本校指導原理の一端を漏されたものであつた。

明治三十八年は校長が有給となつたのを手始めに、様々の改正が行はれた、其の第一は修學年限である。本校の修學年限に就ては、豫て常議員に於て考究中であつたが漸く成案を得たので、本年二月二十七日の常議員會に於て、來るべき四月の新學期より従前の三年制を四學年制に改正する事を決議し、校則を改正して其の通りに實施した。

豫て同窓會雜誌に別の題號を附したいといふ考へがあつたらしく、明治三十七年五月發行の同誌には『諸姉が好み給ふ草或は花等につきて本誌名號たるにふさはしきもの』を募集してゐるが、明治三十八年五月二十日發行の同誌は突然『野の花』と改題し、卷頭に『改題の辭』を掲げて、是れ上毛の野に咲く一小花のみ、是れ改題して『野の花』といふ所以なり』と斷はつてゐる。但、號數は前號を繼承して、第八號となつてゐる。

明治三十八年は日露戰役最後の大勝を博した我が國史上永久に記念せらるべき年である、殊に其の五月二十七日は海軍日本に取つて光輝ある日本海々戰大勝の當日で、今に海軍記念日として守ら

れてゐるのであるが、本校に於ては特に同年五月三十一日午前八時から祝賀會を開き、式の後餘興があり、午後は運動會を催した。

本校が創立當初『上毛共愛女學校』と稱せられたことは、既述の通りであるが、其の語呂がわるい爲か、何時の間にやら『上毛』の二字を省略して、本校を呼ぶに、他も我も均しく『共愛女學校』を以てしたらしく、同窓會雜誌の如き本校出版の物すら創刊號以外は凡て『上毛』の二字を省略してゐる。初め本校の名稱を附するに當り、單に『共愛女學校』では前橋の女學校の様になつて、上州一圓の人々の同情と贊助とを得難いかも知れないといふ事を慮つて、特に『上毛』の二字を冠したのであるといふことであるが、今や校運は彌々進展して、遠く九州から來學してゐる生徒もあるといふのに、『上毛』の二字を冠したのでは如何にも狹隘な響きを與へるので、『日本國の女學校として有志の生徒を集めん』爲には、寧ろ『上毛』の二字を削除すべきであるといふ様な意見が出たので、明治三十八年七月十日の常議員會は、『校名ヲ改稱スルコトヲ決議』し、即時之を實行した。

斯うした校名の改稱にも知らるゝ如く、校運が發展し生徒が増加してくるに従つて、學校當局の悩みは教室の狹隘といふことであつた。在校の生徒等もそれを氣づいた。それで此の同じ三十八年の七月には、別項募金趣意書にも認められた様に、全校生徒を糾合して二葉會なるものを組織し、四學年の教室を建てるといふことを目的として、儉約をしたり、何かと物を作つて賣つたりして釀金した。それが其の年の十二月頃になると三十餘圓に達したといふから、最初のうちは餘程熱心にやつたらしい。

尙同年十一月十六日と十八日には、萬國基督教婦人矯風會本部派遣のミス・スマートが來校して、

矯風會に關する講話があつた、其の結果として本校内にも婦人矯風會が組織せられ、會長半田かく、副會長半田せん、書記半田ゆう會計室橋うめ、諸姉を擧げてゐる。

川合校長は、矢繼早に改變を實行した人であつたが、明治三十九年に入ると、卒業式の行事に新例を創定した。從來卒業式當日、特に依頼した來賓によつて卒業演説なるものが行はれたが、「かくては短かき時間中、演者は思ふ所を盡し難き憂あり、來賓は或は演説の早く終らんことを欲するとなきにあらず、聽者は或は落ちつきて聽くこと能はざることもやあらんとて、本年より米國の大學などの例に倣ひ、式日に先ち卒業演説を爲すこととなり、三月二十三日午後一時より、安中教會牧師柏木義圓氏來演せられ、生徒及び父兄校友の或る人々謹聽し、有益に散會したり、「野の花」而して卒業式は同二十七日に執行された。當時は何でも「上等舶來」の時代で、歐米の眞似をするのは進歩的な立派な事に思はれたので、此の變更は一新機軸を出したものとて、好感を以て受けられたに相違ない。此の例に従ひ、明治四十年には矢張り卒業式の三日前に、堀貞一氏の演説あり、同四十一年には八日前に柏木氏の演説があつた。

共 愛 寮

川合校長は、識見と經綸の人であつたから、愈々其の椅子に着くと盛んに意見を吐き、思ふ所を實行に移した。明治三十八年五月の『野の花』には、『共愛寮及び其主婦』と題する一文がある、曰く、今より七年以前、余仙臺東北學院寄宿舎の舎監たり、當時『芙蓉峰』雜誌を發刊し、『學舎論』を草しぬ、其中に曰く、

吾人はこゝに、世人一般は兎も角も、基督教徒の精神、事業としては、寄宿舎設立に關して根本の考を一新せられんことを望まざるを得ず、即ち先づ監督てふ考を棄て、教育てふ考を持たんことなり、監督の文字と考との裏には、治者被治者の感を伴ひ、教育の文字と考との裏には、師弟朋友父子兄弟の感を伴ふ、青年慈親の膝下を辭し、遠く他郷に遊ぶ、而して監督者の下に在りと思ふ、間々或は卑屈となり、或は之に反抗を試みんとする者等を生ずるに至ることなしとせず、是れ相互に治者被治者てふ冷やかなる心より、或は政府の如く、或は卑屈の民の如く、或は自由の民の如く、知らず／＼の間に思ふより生ずること多し、教育上有害なる事なり、若し夫れ教育者の下に在り、父兄朋友の下に在りと思はば、其感情や自ら融々たるものあらん、たとひ叱責を蒙むることありとも、之が爲にヒガミたる心を生ずることなかるべし。次に改めたき事は、寄宿舎といふ名なり、寄宿舎の名、何ぞ其好ましからざる、寄宿すといふ、恰も寄食者の如く、旅人の如く、腰掛茶屋に在る者の如き感を持ち易し、此輕薄の感は、學道の上、勉學の上に驚くべき損害を來すものなり、校主、幹事、舎監等、寄宿舎の亂雜なるに苦み、其屋壁戸障子疊等の甚しく破るゝに苦む、如何に吐るも論ずも、殆ど其効なきは、今日の状態に非ずや、何ぞ知らん、其根本『我が家、我が塾にあらす』てふ輕薄なる考に基ずることを、夫れ我が家に非ず、壁にラク書をなす、何かあらん、疊を切る、障子の骨を折る、何かあらん、我に痛痒なきなり、此心實に此行をなす、固より吾人は一概に寄宿舎てふ名の爲めに然りといふに非ず、然れども此名は確かに此心を持たしむる一因となさざるを得ず、故に吾人は之を改めて塾舎と曰はんと欲す、聞く昔は塾といひ、寮といひたりと、今日も其名を用う

る者なきに非ざるなり、寄宿舎の名は恐らく明治の新熟語にして(?)面白からぬ語なり、之を改むるを可とす。

既に寄宿舎を改めて塾舎といはゞ、隨て舎監の稱をも改めて塾長といふべし、而して塾舎を以て我がホームと思はしめ、塾長を以て、家父、長兄、先覺、朋友と思はしむるに至らんことを要す。

是れ男學校の寄宿舎に就て論ぜし所、而も眞理は一貫す、移して以て女學校の寄宿舎を考ふる材料となすことを得べし、勿論女子は天性上、男子の如き亂暴をなさざらん、然れども其寄食者の如く、腰掛茶屋の客の如き輕薄冷淡の心は、女性の溫和、柔順、同情、相愛の美德を破壊することに於て、驚くべき影響を及ぼすことなくばあらず、通常寄宿舎に對する世間の不信任は、多く斯くの如き點に存するなり。

如上の理由により、共愛女學校の寄宿舎は、本學年よりして、『寄宿舎』の名を廢し、改めて「共愛寮」と稱ふることとせり。

共愛寮心得の第一條に曰く、(規則といはずして、心得といふ)

本校ハ遠隔ノ地ヨリ來ル學生ノ爲メニ共愛寮ヲ設ク

其第二條に曰く

學生ノ寮生タル者ハ特ニ本校ノ精神ヲ體シ教職員ノ命ヲ奉ジ智德體ノ修養ヲ怠ラズ秩序ヲ保チ時間ヲ守ル習慣ヲ養ヒ長幼相助ケ共愛一致以テ清キ家庭ノ生活ヲナスベシ。

而して『舎監』の名を改め、『主婦』と呼ぶこととせり、『主婦』の名、若し日本全國の女學校に

無しといはゞ、共愛女學校は、即ち日本全國に先だちて、創めて此名を附したる者なり。

『共愛寮』は即ちホームなり、生徒各自の家なり、『主婦』は即ち名詮自稱、此ホームの主婦なり、母なり、姉なり、友なり、此校の舎監は、從來生徒よりして『おばさん』と呼ばれ、幹事は即ち、『おぢさん』と呼ばれ、寄宿舎は誠にホームの如くなるも今は更に其名稱をも改め愈々名實一致教育の本旨を全ふせんことを欲す。

以上寄宿舎に對する校長の考は、單なる論說に止まらずして、直ちに其の通り實行された。同年十一月十一日に催された文學會は、未前の盛會であつたといふ事であるが、其の席上三年生の松井そのといふ寮生の一人が『共愛寮の生活』と題して述べた談話が『野の花』第九號にある、其の一文にはよく共愛寮の生活を盡してゐるから抜萃する。

(前略)室の數は十ありまして室には室長があります、室長は其の一室の事を世話をして室の人を導く責任があります、主婦が若し母ならば室長は娘の中の姉のやうであります

朝起きるのは五時半であります、鈴を合圖に皆起きますそれから身仕度を致しまして、六時四十分五分にお集りの鈴がなります、其の時には一室の人が聖書を読んだり、祈りを致したり信者でない方は御自分の好きな精神上道德上の書物を読みます、それから窓のそばに座して深呼吸をしたり、又靜かに考へたり致します、七時に朝御飯の鈴がなります、五分間のうちに皆着席致します其の時に主婦が一同に「お早う御座います」と申します、それから御飯を終り三十分休み一時間程勉強し八時三十分に始業の鈴がなります、そして通學の方々と一所に教場に出席し禮拜を致す事になつて居ります、此の集りの時には先生方が替る／＼短かいお話をなさつて精神道德の事は勿

論凡ての學課に渡つたお話が御座います、八時五十分から午後二時迄は學課の課業時間でありまして後は自由になつて居ります、勉強する人、考へる人、仕事する人、運動する人いろ／＼で御座います、五時に御飯を食し後は運動時間になつて居ります、緑の草の上を散歩したり、おにごとをしたり致します、天氣のよい時には先生に連れられて利根の川邊を散歩したり觀民山の方へ遊びに參ることもあります、六時三十分には御集りの鈴がなります、其の時には寮舎の人は皆聖書を讀んだりお祈りをしたり、自分の所感を述べたり先生方に短かいお話を聴いたりし居ります、三十分位で此のお集りは済み、七時から九時までの間は勉強時間で御座います、九時になりますと床に就く鈴がなります、其時には矢張り主婦が一同に「お休み」と申しますそれから室に入つて休みます

又生徒一同が家庭の事を實習する爲に御飯番を致します、一日に二人づゝ其の事に當り御飯臺をふいたり、お茶碗を洗つたりお味噌をすつたり致します、これは一日づゝ交代で御座います、又廊下の掃除番も御座いまして二人づゝ二日毎にかはります又庭はきも御座いまして一日毎に代ります別に世話係といふ者が御座いまして教員室の茶炭等に注意し先生方に御不自由をかけぬやうに致して居ります、又應接係といふ者が御座いまして學校へお訪ねの方のお取次を致しますが、何れも一學期毎に交替致します、土曜日は私共に取りまして最、喜ばしい日であります、即ち一週の終の日で翌日は日曜で御座いますから氣がゆつくりして居りますからで御座います、毎日曜日には午前は教會に參り晝の御飯の後は煎餅、饅頭、餅、甘藷のやうな物を頂きます時候／＼により、いちご、枇杷、棗、栗、柿、蜜柑等をも頂き一所に楽しく面白く頂きます、其の間に家

らしい心を養ひ互に交情を温めるやうになります、二時頃からは寮の生徒は料理の稽古を致します、時々先生方をお招き致す事も御座います、御祝の時には御すし又は赤飯の出ます事も御座います、互ひ／＼の間は仲よく親しく交はり勉強する時には知らぬ事は知つて居る人に尋ね知つて居る人は知らぬ人に教へ互に進むやうにして居ります、殊に幸なる事は津村先生が寮舎においてになり、原先生やミセスベッドレー先生が學校の續きの地内においてになり、白崎先生は學校の直ぐ近くにおいてになりますから一同時間外にいろ／＼の教を受けることが出来ます、又日曜日の午後には川合先生が御在宅で御座いますから通學生、寮生とも自由に精神上の問題など聞くことが出来ます、寮舎の人は近くで御座いますから直ぐ行くことが出来ます(後略)

擴張と増築と創立記念日

明治三十八年秋裁縫部の擴張を行ひ、新たに東京から教師を増聘し、大渡に假分教室を設けて新式裁縫を教授することゝなつた。

同年十二月には、日露戦争記念校舎増築費募集を開始した、前年來の計畫で戦争の爲中止してゐたのを戦勝記念として發表したのであつたと思はれる。其の趣意書に曰く、

日露の戦争は、人類の歴史あつて以來、最大の戦争なり、而して海に陸に、最大の戦捷を得、而して今や平和の局を結ぶに至れり、五千萬衆の公義、人道、忠君、愛國の心は、幾多の犠牲を辭

せずして、此光榮を博し得たり、此戦の中外に及ぼせる影響は、誠に深大にして、測るべからざるものあり、宜なる哉、全國各地に於て、戦争記念の爲め、或は開墾をなし、或は植林をなし、或は圖書館を建て、或は公會堂を設け、其他種々の記念物を作ることもや。

我が共愛女學校は、共愛社の設置する所にして、上野國前橋市岩神村に在り、土地乾燥、空氣清潔、東北に赤城、武尊の二峯を眺め、西北に榛名山を望み、西に淺間、妙義の諸山を眺め、西南に立科、八ヶ嶽等の高峯を望み、少しく歩を轉すれば、坂東太郎の水滔々として流るゝを見る、觀望頗る壯大なり、校は明治二十一年の創立にかゝり年を閲すること十有八、卒業式を行ふこと十四回、卒業生を出し、こと百十一人、現在生徒九十五名、現在職員十二名、其教育の方針は、學藝淑徳兼備の女子を養成するに在り、即ち人としては善美の人たり、娘としては淑女たり。嫁としては良妻たり、親としては賢母たるべき婦女を養成するに在り、其學校精神は獨立自由にして政府の束縛、民論の壓抑、教會の掣肘、宣教師の干渉、一として蒙むる所あらず、其師たる者は徳を重んじ、智を愛し、自ら責め、自ら修め、身を以て學生を導かんことを期し、其弟子は善く師を信愛し、和氣常に霽々たり、今年其三學年制を改めて、四學年制とせしも、未だ其教場の増設を見ること能はざるのみならず、講堂の設置なく、裁縫室の狹隘を告ぐるあり、且年々信用を得て各地より生徒を送らるゝに對し、之を容るべき寮舎の不足を訴ふるあり、是に於て乎吾等同志は、此前古未曾有の大戦の記念として、教場と、寮舎との増築を計らんと欲す。之を江湖に訴ふるに先だち、吾等靜かに思ひ、深く考へ、世間通常の寄附金募集の如くならざらんことを欲し、之を天地の大道に照らし、之を教育の一義に質し、己先づ勤勞して、而して後之

を人に請ひ、己先づ所有を投じて、而して後之を人に求むることの道なることを信じ、師弟相會して、親しく此事を議し、先づ(第一)節儉して出す事、(第二)勤勞して出す事、(第三)樂みて出す事、(第四)神に献ぐる心を以て出す事とを心に誓ひ、本年七月以來、生徒等は、二葉會といふを組織し、全生徒九十五人これが爲めに節儉し、勤勞して、漸く三十圓餘を積み得たり、金額微なりと雖も、赤心其中に存す、亦以て校舎有形無形の基礎たるべく、亦以て之を江湖に訴ふるも早きに失せざるべしと信じ、愈々起て天下の諸兄弟に懇求するに至りしなり。古人曰く、十年の計は、樹を植るに在り、百年の計は、人を植るに在りと、大方の諸兄弟、願くは吾等の微志を察し、此大戦の記念として、百年の大計の爲めに、奮つて義金を投ぜられんことを、深く望み、切に希ふ。

明治三十八年十二月

共愛女學校長 川 合 信 水
共 愛 社 長 森 村 堯 太

此の趣意書の文案は川合氏の筆と思はれるが、書中『政府の束縛』を蒙らないといつた様な傍若無人な文句は甚だ穩當を缺くと考へるけれども、時代思想と筆者の性格の然らしめた所と、編者は解してゐる。勿論川合氏と雖も、今日之を正しいとは認めないであらう。尙、編者は、其の署名に際し、校長が社長を次席にしたのを、決して禮に酬うたものとは認めてゐない。たゞ之は當時公けに發表されたものであるから、斧鉞を加へずして収録したのである。

斯くて、明治三十九年六月には、本校の敷地と西南方の地續きになつてゐる交水社所有の土地三

百七十八坪五勺と、それに附屬した七十二坪程の建物を譲り受けた。而して同月四日には、此の建物を裁縫室並に教室に模様替をする増築工事を始め、七月七日に落成した。該教室は一學年の教室と定め後日育愛館と稱した。それまで七疊敷の教室で満足して授業を受けてゐた一年生も、初めて「教室らしき教室に移るを得、各自大喜にて机腰掛を運びしも愛らしかりき」と當日の日記に認めてある。同月十六日午後一時から此の増設祝賀會が催され、席上過る十九年間裁縫科教員として勤続した深井芳子氏に對して、「職員生徒一同より祝賀として」斜子を一反贈つた。

本校には明治四十年に至るまで創立記念日の制定がなかつた。が、本校が創立されてから二十年にもなるので、創立記念日を制定したいといふ考が、本校當局者の頭腦に浮んで來た。ところが、本校が創立されたのは妙な日で、明治二十一年二月二十九日夜、鍋屋旅館の一室に於て、數名の同志が相會して、前橋英學校の譲渡の相談をした、それが本校誕生の時であつた。然るに、二月二十九日といふ日は閏年の外には無いので、餘儀なく一日繰り下げて、三月一日を本校創立記念日と定め、明治四十年の其の日は金曜日であつたけれども、授業を休み祝賀式を舉行した。先づ君が代を一同にてうたひ、川合校長が聖書を読み祈禱を爲し、深澤利重氏が感話をなし、一同讚美歌二百八十一番をうたひ、終に三年生有志の祝賀文を津田教頭が代讀した。それで式を散じた。爾后年々、此の日を守ることをなつた。

川合校長と須田幹事夫妻

川合氏は、後年郡是製絲株式會社に於て特異なる工場教育組織を完成した程の人であるから、上述した所に於ても知らるゝ如く一廉の見識を以て、「吾黨の女子教育」を主張し、「女學校長」を論じ、雑誌「誠心」を發行しては、「本誌は川合山月子の主筆する所にして精神の修養に志す者、道の奥妙を味はんと欲する者は、其基督教徒たると、佛教徒たると、儒道家、神道家たるとに論なく、必ず一讀せざるべからざる雑誌なり」と自薦し、其の強靱なる自信と達文宏辭とを以てして盛んに嘔々の言説を弄するのみならず、相當の實行力を有して、自ら是と意想する所に對しては、他に介意なく實行せんとした。時に論議に於て傍若無人と見へた氏は、其の實行に於ても他の鼻息を窺はなかつた。氏は、本校々長としても、確固たる指導原理を胸に疊み、意圖する所は着々實現せしめんとした。

當時の本校は、創立以來二十年に垂んとして、尙在學生徒は一百に満たず、明治二十二年以來渝らず須田明忠氏が幹事として校務を處理し、學生たちからは「おちさん」と懐かれ、須田己喜子夫人は舍監として寄宿舎の内外を行届き過る程切り廻はし、學生たちには「おばさん」と慕はれて宛ら全校の母の如く、本校は其の頃まで此の「おちさん」と「おばさん」との下に渾然として一個の家庭の様であつた。校長も社長も須田氏夫妻を信任して、校内の事は其の思ふが儘にさせた。其處は、春風駘蕩として情味の溢るゝ所ではあつたが、規律と禮儀とには缺けたところがあつたかも知れないが、併しそれで、良かつたのである。母校を巢立つてから四十年近くになる卒業生が、在學

當時を追懐して、『私はその頃家庭を作る日が来たら、此のおばさんの様に家の人たちをまとめて行きたいと思ひました』と言つてゐるが、『おばさん』の世話になつた卒業生たちは、みな一樣に同じやうな所感を語つてゐる。『おちさん』や『おばさん』を批難する者は一人もない。だが、此の夫妻を學校當局として厳格な眼で見た時には、公私混同の甚しきものがあり、言語同断な専横な振舞があつたかも知れない。といふのは、何しろ創立者の中堅深澤利重氏が、須田氏夫妻を深く信用して松井田町に傳道してゐたのを手當も定めずに連れて来て、最初の程は、豫算はあつたであらうけれども、入費は必要なだけは出すといつた様な風で、不破校長は善良な人であつたから何も言はずに任せ切り、須田氏夫妻殊に其の夫人は、學校を吾が家の如く、生徒を吾が子の如く、殆んど公私の區別なく、懇ろに取扱つたのであつた。

川合校長は、儀禮格式を重んじ、形式を尊ぶ人であつたから、寄宿舎は共愛寮として家庭的であることを望んでも、學校としては或る形式を立て一定の規律を保ち度いと思つたであらう。勿論それ故に、須田氏夫妻が公私混同の嫌ひある態度には憤懣たらざるを得ないものがあつた。川合氏が自己の學校に對する方針を實現せんとするには、須田氏夫妻殊に其の夫人の爲す所を根本的に改變するの必要を痛感したであらうことは察するに難くない。而して氏は、校長としての自己の意圖を須田氏夫妻殊に其の夫人にも尊重せしめんとしたであらう。が、二十年間爲し來つた所の事を一朝にして改めることは容易でない。須田夫人に見れば、其の賢明を以てしても、何が故に改めなくてはならないかすら判じ兼ねたであらう。川合氏も須田氏夫妻もいづれも立派な人たちではあつたが、然うした性格の相異から來る感情の齟齬は、いつしか校内に川合派と須田派とを作つてしま

つた。職員の間にもあらず、生徒の間にもそれがあつたといふに至つては驚き呆れるの外はない。川合氏が校長就任三年目の明治四十年になると、もう校内は騒然として落ちつきを失つてしまつた。最早校長としての川合氏の失敗は、歴然として蔽ふことが出来なかつた。川合氏は立派な人物であつたが、校長たるの自覺が餘りに強く、自身が校内に於ける新参者であることを失念して、功を急ぎ過ぎたことは失敗の主因であつたと思はれる。殊に川合校長が創立以來二十年間學校内外の信愛を全身に受けてゐる須田氏夫妻と對立したことは、氏に取りては最も不幸な事であり、合點の行かないことであつた。

兩者の問題は、遂に常議員會の問題となり、席上では様々の議論があつたやうであるが、結局三人共罷めて貰ふ事に決議されて、此の問題は結末に導かれた。而して校長は即決することができな

いので、當分後任の決定する迄常議員の一人柏木義圓氏が其の事務を取扱ふ事に決した。
明治四十年十二月十八日午前中、川合校長、須田幹事、須田主婦等三人の辭職が發表せられ、職員生徒一同に對して挨拶があつた。而して同日午後には、森村共愛社長、柏木、齋藤兩常議員等登校し、生徒一同を集めて訓諭された。越えて二十一日午前九時から其の學期の終業式が執行せられ十時から川合氏の送別會が催された。

青柳校長時代

青柳校長

明治四十年十二月十八日 川合校長が辭任された時には、常議員等の間に未だ後任校長に就ての

成案はなかつたのであるが、其の後青柳新米氏を校長として迎ふるの議が熟し、同氏の承認も得て其の年の内に同氏の校長就任は確定した。仍て明治四十一年一月元旦には、拜賀式の後に之を報告し同月十一日始業式の後に引續いて後任校長の披露式があり、終つて歓迎會が催された。青柳氏は本校に取つて新しい人ではなかつた。氏は、本校創業の頃不破校長の下に教頭の如き位置に在つて、教務の全責任を負うて永く盡力されたのであるが、其の後他行されてゐたのを招聘したので、氏としては故郷の吾が家に歸つた様な感があつたであらうと思ふ。尊敬された校長と、敬慕された幹事夫妻とを失つて、寂寥を感じてゐた校内一同に取つて、氏の就任が大なる歡喜であり、力であつたことは申す迄もない。青柳校長の教育觀を窺ふに足る一文が、『野の花』第十三號にあるから、左に其の全文を收めて氏を知るの資料とする。題して『教育の本義』といふ、曰く、

抑も、身體は他人から養育せられたり、また教育せられたりと思ふて居るものはあるまい。他人より云へば養育と云ひ、教育と云ふのは、單に此の飲食物を與へ、或は彼の飲食物を給して其自ら成長するのを待つのみのものである。此の運動を行はしめたり、彼の體操を行はしめたりして、其自ら筋骨の發達成熟するのを待つのみのものである。要するに自己自ら成長發達するの所ありとせば、それは或る刺戟を與へ助勢を與へ得るといふに過ぎぬのである。若し父母教師が幾分にも與り得るの養育と云ひ教育と云ふも、亦他人は殆んど與り得る所はないのである。之と等しく、心の養育と云ひ教育と云ふも、他人の身體の成育には與り得ぬ事を知ると雖も、心の成育には與り得らるゝも然るに世間には、他人の身體の成育には與り得ぬ事を知ると雖も、心の成育には與り得らるゝものゝやうに信じて居る者流が多。それで圓滿なる人物を造るの、完全なる品性を養ふの、或は

良妻賢母を造るとか、隨分誇大の標榜を掲げて、自ら得たりとして居る者流もあるやうであるが如何なる教育家と雖も被教育者其人天稟の身長以上に一寸を伸し、身長以下に一寸を縮むることは出來得るものではない。それと等しく、其人天稟の心の大小高下に一毫も増減することは出來ぬのである。唯だ其心の高下、天稟天分の在る所を成るべく多く、成るべく善く、發展するやうに刺戟し助勢し得るといふまで、過ぎぬのである。

最も巧妙に此の刺戟助勢を與ふるものを、最も巧妙なる教育家と稱し、最も巧妙に種々様々なる手段方法を以て、他人の心を刺戟し、他人をして自ら能く、あらゆる方面に其心を發展せしむるものを、良教育家とは稱するのである。されば教育家たるものは、是非とも自ら高尚善美なる思想情操道徳を有つて居るものでなくてはならぬ。若し有つて居らぬ場合には、他人をして斯かる思想、情操、道徳を發展せしむるやうに、仕向ける方法を工夫案出することが出來ない。自ら高尚善美なる思想、情操、道徳を有ちつゝ、行ひつゝ、種々様々の手段と方法を以て、極めて巧妙に之を表示して他人をしてどうしても其れと同等若くは其れ以上の思想、情操、道徳を生起せねばならぬやうに、仕向けるのが最も肝要なることである。

教育家として、あらゆる知識學術に達し、あらゆる思想、情操、道徳を有つと云ふは、無論極めて望ましき美事には相違ないが、到底不可能であつて、是非斯くあらしめんと云ふが如きは、無理の註文たるのみならず亦必ずしも必要必須の條件ではない。教育家としての必要條件は、教育家の被教育者に對する眞の分限を知つて之を守るに在るのである。即ち教育家の被教育者に對して爲し得る所のものは、殆んど幾らもない、唯だ僅に或る符牒暗號を示して、以て被教育者の自

ら成育するやうに盡力するに在るのみと云ふことを認識するのである。又被教育者に對して出來得る限り、自然の刺戟を與へ自然の助勢を與ふるに在る、と云ふことを認識するのである。與ふる所の刺戟助勢が自然に出で、さへ居らば、よし其教育家は卑小の人物なりとしても、被教育者の天稟相當に被教育者を動かすが故に其被教育者天分の在る所を、十分に發展せしむることを得て、教育家よりも幾十層か偉大高尚善美なる人物とならしめ得ることもあるのである。若し出來得べくんば、教育と云ふものは他より外部より來るものではなく、自己自ら被教育者をして、發展成育する所以の意義を悟り、他人たる教育家に餘り多く依頼することなく、自己自ら教育しやうといふ精神を發揮せしむるに在るのである。被教育者をして自ら教育しやうといふ確乎たる精神を發揮せしむるのが教育の第一義である、根本義である、自ら教育せんとの精神を發揮せしめ、間斷なく其精神を以て進ましむるやうになし得たりとせば、教育家の責任は既に其大半を盡したつたものと云つてもよいのである、被教育者たる地位に在る人々にも善く自ら反省して、自ら教育するより重要な事はないと云ふ點に注意してもらひたい。即ち自己自ら教育しやうとの精神を發揮して、其精神を以て日常百般の細事より、日課學科の總てに當つてもらひたいと云ふの微意に外ならぬのである。

青柳氏の校長就任に由て、校内は一應落ち着いた様であつたが、其の年の三月二十五日の共愛社の總會では、『川合前校長、須田幹事及び同主婦辭職ノ件ニ付社員諸氏ヨリ種々ノ質問アリ』常議員から一々答辯した。殊に、永年吾が家の如く盡した須田氏夫妻に對する社員等の好意は、再任の問題をも提起せしめ、相當頑強な意見もあつたらしく、其の事は『常議員ニ於テハ不可能ト認ムルモ森

村社長ノ意見ヲ確メタル上社長ヨリ諾否ノ確答ヲ本日列席ノ社員ニ發スベキ事ヲ決議シ點燈後ニ至ツテ散會セリ』とある。須田氏夫妻に對する愛着は、當分社員の間には燃つてゐたらしい。又、學校を去つて後の須田氏夫妻は、全く生存の意義を失つてしまつた様な状態で、不幸な晩年を過され、まことに氣の毒であつたと承はる。

校舎と宿寮と講堂と

本校毎年の入學生は、堀校長就任當時までは十名内外に過ぎず、修學年限も高等卒業入學の三ヶ年であつたから、全校の生徒數もまことに少數であつたが、堀校長の辭任される前年頃から入學志願者が急に激増して三十名以上となり、殊に三十八年度からは修業年限が四年制になつたから、在學生の數が非常に多くなつた。然うした狀況で青柳校長の代に入つたので、教室並に宿寮の増築は新任校長に課せられた第一の問題であつた。

明治四十一年八月二十八日には臨時常議員會を開いて、二階建寄宿寮一棟建築の件を議決し、早速九月九日に起工して、十二月二十三日に竣工した。其の同じ十二月に電話も架設され、十六日には開通したといふことである。

斯うして、當面の必要に迫られて擴張をなし増築をなし、學校の經濟は膨脹させてゐたけれども、其の遺線をしてゐた共愛社當路の苦心は容易ならぬものであつた。創業七、八年目位の時は最も甚しかつたといはれるが、併し本校の事業も稍や其の緒に就いたと見られる此の頃になつても、經營

維持の苦心は絶えなかつた。共愛社の議事録を見ると、大正三年十月二十五日に開かれた理事會に於て、もう既に忘れてゐる様な明治三十九年に交水社から譲り受けた地所建物の代金の残額の處分法や、更に溯つて明治三十五年十一月に落成した双葉寮の建築費残金の處理法に就て決議されてゐるのである。前の擴張や増築の跡仕末もせず、後の計畫を實行してゐる。而して然うした事の確な會計記録も、今日には残つてゐない。だからが無い、無統制な様であるが、さうするより外仕方がなかつたであらうと思ふ。然うした中で、屢々議事録にも記録にも將た會計簿にも見當らない様な建築工事が出来上つたりしてゐる。法律的地見地からすれば、それらは凡て法律行爲であるから、やつた事に不正はなかつたとしても、追求されたら處罰物であつたかも知れないのである。が、孰れも無私の奉仕的熱情によつて社會公共の爲を思つて爲された事であり、當局としても寛大に見てゐたらしいので、やかましい事にはならず済んで来たものゝ、斯うして一連の歴史を編まうといふ事になると根據になる記録もなし、辻褄の合はない事ばかりで、甚だ難澁するのであるが、そこに本校の特色があるのかも知れない。本校は、然うした無統制の中で、野人の如くどしどし、發展して来たのであつた。まことに、本校が驚異的な發展が出来たのは、全く其の放漫無統制なるところにあつたともいへるのである。とにかく然うした中で、明治四十四年には、何の警告もなしに特別教室なるものを一棟、五月二十九日に新築の工を起して、九月二十一日に落成してゐる。簡単に記された記録の蔭に潜む經營者等の一方ならざる苦心を思ふ。

斯くて本校創立二十七年目の大正五年になると、本校同窓會前橋支部諸姉の間に、來るべき本校創立三十年を記念して母校の爲に講堂を新築しようといふ議が起り、學校當局に諮り、理事評議員

等の了解を求め援助を得て、同年三月には左の如き『講堂新築趣意書』を發表した。

我儕の愛する母校共愛女學校の過去は苦心慘憺の歴史にして亦光榮感謝の歴史にて候由來世の官公立の學校の如く國民の租税に依らず亦彼のミツシヨンスクールの如く外資をも仰がず赤手空拳一片の丹心を以て起りたる我母校は其經營維持に於て固より苦心慘憺を極め候併し乍ら其間職員献身の精神と生徒及び卒業生の愛校心とに依頼し一定の主義に立ち終始一貫獨立以て今日に至り候は實に母校の光榮にして感謝に堪へざる所にて候特に上毛基督教婦人會が我母校の創立と維持とに於て與つて力ありしが如き亦我儕婦人の誇りと存候斯くて美を去り實に就く我母校の教育は着々として驗あり既に卒業生を出すこと四百餘り國家の基礎たる家庭をして健全高潔平和ならしむるに貢献する所少からず今や明年を以て創立三十周年を迎へんとするに至り候ひしは我儕の欣喜雀躍措かざる所にて候孔夫子は三十而立と被申候既に而立の年齒に達する我母校の此時機を以て一新時期を劃し一大發展益々其使命を盡して社會に貢献する所あらしめたきものと存候大教育家ペスタロヂーは國民の教育は母を經由して爲されざる可らずと申候我母校の使命は決して輕からずと存候依て我儕は明年を期して一講堂を母校に献げ永く我母校創立三十周年の記念と爲し間接には聊か國家文明に貢献する所有之度深く深く希望罷在候仰ぎ希くは大方の淑女紳士我儕の微衷を諒として我儕の志を御贊助被下度偏に奉願上候 敬白

大正五年三月

共愛女學校同窓會前橋支部

更に、同年九月十五日附發起人總代二十三人の名義を以て會員に依頼狀を送り、十月十五日を豫約申込期限として、三ヶ年分割拂込一口五圓の寄附を求めた。かうした募金運動の經過について

は、今は知るに由もないが、發起人等の熱心は報ひられて、大正八年二月二十六日に起工し、三月三十日には上棟式を舉行し、十一月八日には午前十時から落成式を舉行した。當日は、知事代理として内務部長、市長代理として助役、上毛新聞社長外三十餘名の來賓と卒業生八十餘名の列席あり、教員杉山勇司氏が司會し、青柳校長が式辭を述べ、柏木義圓牧師の演説があり、誠に記念さるべき盛儀であつた。此の講堂は、最初は單に記念講堂と稱したが、後には常盤館と命名せられ、間口十間に奥行五間で、當時の本校としては破格の堂々たるものであつたと思はれる。總工費は七千三百四十四圓七十九錢であつた。

式上、深澤利重氏の報告演説の中に斯く述べられてゐる。

大正五年……同窓會におきましては記念講堂新築の相談が成立しまして委員を選び寄附の募集を始めました處が種々の事情に依て思ふように運びませず少し行き難みの姿でありました處が一方學校にては生徒が増し校舎も狭く教室に不足を告ると云ふ有様でありますから同窓會に相談しまして學校の方でも手傳ひまして共同にて一般有志の同情に訴へ速成を期することに成りまして今日此式を舉るに至りました次第で御座います。然るに豫算だけの金を募集して建築に着手する筈であるのにそれでは校舎が間に合はぬので止むを得ず請負師の長谷川豊吉氏に相談致しまして金は募集次第拂入ることとし若本年中に皆済せなければ殘金に對しては來年より利息を附けて支拂ふと云ふ約束の下に建築致しましたのでまだ金は支拂濟には成りませんのです今日迄寄附の約束を得ました高は五千七百餘圓でありまして支拂ふべき約束は附屬品迄合せれば七千圓位に成りますので凡そ一千三百圓の不足に成りをるのであります此不足は是非本年中に募集して完済致した

いと希望で居りますから同窓會の姉妹方にも尙御盡力を懇願仕る次第でございます。終りに尙一言申添へたいのは寄附金募集の餘りに手間どれることでありまして之に就ては苦言も聞き又注意も受けまして少し積極的に自動車でも運動すると申す意氣込でドシ／＼やつてはと勧められた方もありましたけれども最初の方針が募集した金は其目的の外には使用せず募集費は凡て半田理事一個人のポケットより出すと申すことに相成り居りましたのですから成るべく半田氏の負擔を軽くすべく費用を節減する爲め青柳校長と兩人で事務の間に徒歩運動と申す次第で思ひの外延引致しましたのですから此事は御諒察を得たいのであります。

之を讀むと、當時局に當つて奉仕した人々殊に此の結末をつけた深澤氏の苦心、努力、忠信、熱心が眼に見える様である。本校は、斯うした先人の盡力に由て漸くに太つて來たのである。尙當日柏木牧師の記念演説は左の如くであつた。

山城の叡山に釋迦の足跡が印せられて居る石がある。日本に釋迦の足跡とは怪しいが兎に角此石が斯く傳へられて數百年來あつたには相違ない。併し數百年前も今日、此石の大きさには少しも變りがないであらう。伊豆の伊東の某神社に樟の巨樹があつて其空洞中には疊が八枚敷かれると稱せられ二千年の古木と云はれて居る。併し此巨樹も初めから斯る大木であつたのではなく小さい種子から發育成長したのであらう。石は何故に千古變りなく樹は年月と共に大きくなるのであるか、此は前者には生命がなく後者には生命があるからである。前の前橋中學校長であつた故秋山恒太郎氏は深く新島先生を敬慕して居られたが其の宮城縣の師範學校長たりし頃先生は仙臺に東華學校を創立せんとて御出になり秋山さん七八名の生徒は得られませうかとの仰せ故七八名と云

ふ御覺悟なら大丈夫です少くとも七八十名は集りませうと御答へしたが七八名で始めるとの先生の御覺悟には深く感じたと申された、七八名の學校は實に小さい、併し生命ある主義精神を其中へ吹き込めば他日如何に大なるものになるか分らない、先生の胸中には大なる生命の火が炎々として燃えて居たのであつた、見よ同志社も先生が創立になつた當時は僅かに八名の生徒しかなかつたが其中には元良博士や中島力造博士も居られたのである、明治十三年の頃當時尙一青年學生たりし湯淺吉郎氏が演説して彼の吉田山へ登つて洛中を一瞥すれば屹然山の如く南に聳ゆる大迦藍は兩本願寺にして而して北相國寺と御苑との間に僅に松樹の間に隱顯する見る影もないものは我同志社に非ずや、併し生命ある芥種は竟に大木とならざるを得ず、十數年の後には我同志社は遂に堂々洛中を壓するに至らんと曰はれたことがあつた、而して今や同志社は其豫言の如く御苑の後ろ十數丁に亘りて巍然として聳えて居るのである、二十餘年前私が初めて此學校に來た時は今の食堂の在る建物一つ丈けで其處に校長室も職員室も教場も寄宿も一切皆あつたのである、其れから一つ増し二つ増し三つ増し遂に此の立派なる講堂を見る迄に至つたのである、此講堂も他の諸學校のものに比しては觀るに足るものとはないであらう、併し觀る可きものは講堂の大きさや美しさではなくて其進歩發達生長の跡である、此學校は初めから大きくとも千古變りのない頑たる石ではなくて初めは粒程でも終にけ天を摩するの巨樹となる可き希望のある生命ある植物であつた、抑も學校の生命とは何であるか、其主義である、其主義が大なれば大なる丈け永遠的なれば永遠なる丈け其學校は將來に大になり永遠に發展する希望があるのである、然らば此學校の主義は何か、申す迄もなく基督教主義で人をして永遠に生くる神の子たるに相應しき

人格を創造するの主義である、一言に云へば即ち神の子を創造するのである、實に大なる教育主義ではないか、創世記の開卷第一章を讀むと神が光を造り水陸を造り植物を造り動物を造り其の出來上る毎に神之を「善しと觀玉へり」と記してある、此れは神が其創造を觀て満足に感じ玉ふたと云ふことであらう、武藏野に農に隠れて居る江渡幸三郎氏と云ふ學者がある「詩を作るよりも田を作れと云ふことがあるが予は詩を作る爲めに田を作るのだ」と曰ふて居られる、其意味は文藝家が創作するやうに農作物を創作して樂しむと云ふのであらう、蓋し農業を詩化し美化して創造を樂むのである、有名なる米國のパーバンクスの手にかゝると凡ての作物が實に美しく美化すると云ふことである、人生の快事は實に創造であらう、而して神は最後に人を創造し玉ふた、創造の極致は實に人間の創造である、此の學校の教育は實に此の神の子の創造の聖業に參するのである、何と偉大なる教育主義ではあるまいか、近年九十才の高齡で世を去つた英國のアルフレッド・ラツサル・ワーレースは進化論の學者としてダーウキンと共に世界に知らるゝ人物である、ダーウキン既に進化論の學理を發見し尙慎重なる學者の態度として研究の上にも研究して未だ其創見を公けにしないで居た時ワーレースは南洋に在て同じく進化論の學理を發見し其論文を友人なるダーウキンに寄せて之を英國の學士會院に於て發表せんことを囑托した、之を見れば自分の學說と暗合して居るのに驚いたが名譽に淡泊なるダーウキンは之を公けにして進化論創見の名をワーレースに成さしめやうとした、然るにダーウキンの友人は深く之を惜みダーウキンをしてワーレースのと同時に其發見の學說を公けにせしめた、此れ實に學界の美談である、其のワーレースは十四、五年前に「宇宙に於ける人類の地位」と云ふ本を著した。其說に由ると昔の人は地球が宇宙の中

心で太陽が其周圍を廻るのだと信じて居たがコバルニカス出で、所説全く破壊され爾來地球は太陽の周圍を廻り太陽は亦其系中の諸星を率ゐて他の星の周圍を廻るので地球は宇宙の中心どころか宇宙の一隅にポツリとして存する一小星に過ぎないと云ふことになつた、數限りなき諸群星中には人間の如き生物の住む世界も多くあるであらう、基督教では神の子が人類を救ふ爲めに此世に降つたと云ふが廣大無邊の宇宙の中に滄海の一粟程でも無い地球の中に居る最も小さい人間の爲に神の子が天降るなど餘りに人間の地位を誇大に見た自惚れたたと云ふ者もあるに至つた、併し最新の天文学に依ると宇宙は無邊でも星の世界は決して無限でないこととは着々證せられて來たとて一々星界の事實を擧げて之を談じ地球は決して宇宙の中心だとは云はないが少くとも星界の中心に在りと論斷し且つ生物が發生するには一定の溫度が數億年つゞくを要するから天に星が多くありとて何處にでも生物が存在すると云ふわけのものにあらずと生物學より之を論證しワレーズは竟に天に星多しと雖地球は無數の星界の殆ど中心に位し人間の存在するは地球のみだと結論し去れば宇宙は我が地球の爲に存在し神の數億年に亘る廣大なる宇宙の經營は全く我地球の爲に存するものゝ如く此の地球を永遠の神の子を創造し教育するの場と爲し玉ふのではあるまいか、果して然らば宇宙に於ける人類の地位は實に驚く可く重大なるものだと言道した實にや天地は神子教育の大學校で基督耶穌は無比の大教育家である、此の絶大無比の大教育家なる基督の主義を其教育の主義とし生命とする此學校は將來何うして生長發達しないで居られやう、此學校が此主義を離れ此生命を失はない限りは前途有望と謂はざるを得ない、且つ五百の卒業生の胸に亦此生命宿り居らば無數の無形の共愛女學校亦到る處に出現するであらう、五十年

百年の後の此學校を想見すれば轉た希望に輝かざるを得ない、皇天希くば永へに此學校を御指導なし玉へ。

更に此の祝典の爲に特に準備された『落成式の歌』が、式上生徒一同によつてうたはれた。是等に由て見るも、其の歡喜の程は察せられる。

落成式の歌

原 三 世 枝

一、幾年待ちし同胞が

此處に集ひて新しき

我が學會の落成を

祝ふ此の日の嬉しさよ

二、赤城の嶺の高きごと

利根の流の清きごと

心を研磨きいそしみて

基礎ゆるがぬめでたさよ

(以上野の花第二十四號所載)

大正十一年二月十九日より二十一日まで三日間同窓會主催にて、本校基金募集の爲前橋大和劇場に於て活動寫眞會を晝夜二回開催し毎會盛況を極めた。此の催により金二千三百圓の實收を得、一

同感謝と喜悅に満された。

同年三月には校舎敷地四百坪餘を購入した。かくて本校直面の事態は、否應なしに敷地の擴大と校舎の増築とを繰返さしめ、本校は大きくなるつもりもなく大きくなつて行つた。

財團法人共愛社

明治四十三年三月二十六日の共愛社總會に於て舉げられた常議員は、森村堯太、深澤利重、桑島定助、半田平次郎、高橋源之助、後藤源九郎、栗原徳治(以上總會選出)、柏木義圓、齋藤壽雄、畑中七郎諸氏で、社長は引續いて森村氏に依頼する事に満場一致で決定した。尙常議員中に常任幹事一名を置く事となり、幹事は社長の指名といふ事になつたので、森村社長は深澤氏を指名し、深澤氏は幹事に就任した。

明治四十五年四月八日高崎市三浦屋に開かれた常議員會に於て、豫て懸案となつてゐた法人組織の件『實行ヲ期シ定款ヲ立ツル事』之と同時に『共愛社ノ社則ヲ改正スル事』を決議した。猶、常議員半田平次郎氏は昨年八月死去せられたから其の後任として同氏の相續人半田善四郎氏を依頼する事、又畑中七郎氏に常議員を辭して貰ひ湯淺治郎氏に其の補欠を依頼する事等を議決し其の通り運んだ。

同年八月二十六日、本校に於て常議員會を催し、辯護士徳江亥之助氏が起草された社團法人の定款に就て協議した結果、財團法人組織とする方が好からうといふ事になり、更に其の草案の作製を徳江氏に依頼する事とし、法人の目的、理事及び評議員の數、其の選舉法等について協議した。斯

して着々準備が出来たので、彌々同年十一月二十七日午後一時から本校に於て臨時總會を開催し、『財團法人共愛社寄附行爲書』其の他を議決して、大正元年十二月二十七日、杉田潮、須田明忠、深澤利重、青柳新米等四氏の連署を以て、財團法人の設定を申請した。幸に通過して、大正二年二月五日附を以て、文部大臣柴田家門殿から法人設立を許可せられ、同月二十六日財團理事として森村堯太、深澤利重、半田善四郎三氏の登記手續を完了した。尙、評議員は、大正三年二月七日の選舉と同年五月十二日の選定會の結果、湯淺治郎、柏木義圓、齋藤壽雄(以上社友選舉)、森村堯太、深澤利重、半田善四郎(以上同窓會選出)、桑島定助、高橋源之助、徳江亥之助、星野葆光(以上評議員會選出)諸氏が決定され、之で財團法人共愛社の陣容は整備された。而して定款は左の通りである。

財團法人共愛社寄附行爲書

杉田潮、須田明忠、深澤利重、青柳新米ハ本寄附行爲ニ依リ左ノ如ク財團法人ヲ設立ス

第一章 目的、名稱及事務所

第一條 本財團ノ目的ハ基督教主義ノ德育ヲ基本トシ質實ナル女子教育ヲ施サンガ爲メ學校經營ニ要スル財産ヲ所有スルニ在リ

第二條 本財團ヲ共愛社ト稱ス

第三條 本財團ノ經營ニ係ル學校ヲ私立共愛女學校ト稱ス

第四條 本財團ノ事務所ヲ前橋市岩神町百三十一番地ニ設置ス

第二章 資 産

第五條 本財團ノ資産左ノ如シ

第一 基本財産

甲

一 宅地九百五拾貳坪參合貳勺

此地價金百八圓四拾貳錢

此評價格金千九百四圓六拾八錢也

但 杉田潮ヨリ寄附スヘキモノ

一 宅地參百七拾八坪〇五勺

此地價金五拾五圓八拾參錢

此評價格金七百五拾六圓拾錢也

但 須田明忠ヨリ寄附スヘキモノ

一 建物拾棟

此總建坪貳百四拾五坪貳合五勺

此評價格金四千百貳拾五圓也

乙 金六百八拾壹圓 基本金

但 青柳新米ヨリ寄附スヘキモノ

丙 將來基本財産タルコトヲ指定シテ寄附セラレタル財産

丁 每會計年度ニ於ケル經費ノ殘餘ノ全部又ハ一部ヲ理事全員ノ同意ニ依リ基本財産ニ繰入タルモノ

タルモノ

戊 其他理事全員ノ同意ニ依リ基本財産ニ繰入タルモノ

第二 普通財産

甲 圖書並ニ教授用器具器械貳千貳百七點

此評價格金九百五拾貳圓貳拾壹錢

但 深澤利重ヨリ寄附スヘキモノ

乙 將來取得スヘキ財産

第六條 資産ノ管理方法ハ理事全員ノ同意ニ依リ別ニ之ヲ定ム其之ヲ變更スル場合亦同シ

第七條 本財團ニ要スル通常經費ハ資産及事業ヨリ生スル收入及其ノ他ノ雜收入ヲ以テ之ニ充ツ

第八條 基本財産ハ理事全員ノ同意アルニアラサレハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

第三章 社友及役員

第九條 左ノ資格アル者ヲ以テ社友トス

一 本財團ノ目的ヲ贊助シ金三十圓以上又ハ評價額三十圓以上ノ財産ヲ寄附シタルモノ

但 五ヶ年内ニ分納スルコトヲ得

一 理事ノ特選シタル者

第十條 本財團ニ評議員十人ヲ置ク

第十一條 評議員ハ理事ノ諮問ニ應シ本財團ノ經營其他重要ノ事項ニ付審議シ尙ホ理事ヲ選舉ス

ルノ權利アルモノトス

第十二條 評議員、總テ社友中ヨリ之ヲ選舉ス

第十三條 評議員中三人ハ社友之ヲ選舉シ三人ハ共愛女學校卒業者ニ於テ之ヲ選舉シ其餘ノ四人ハ右選舉セラレタル六人ノ評議員ニ於テ之ヲ選舉ス

第十四條 本財團ニ理事三人ヲ置ク

第十五條 理事ノ互選ヲ以テ理事長一人ヲ置ク

理事長ハ本財團ヲ代表ス理事長故障アルトキ八年長ノ理事順次其職務ヲ代理ス

第十六條 理事ハ評議員ニ於テ之ヲ選舉ス

第十七條 理事ノ選舉ハ聯記無記名投票ヲ以テ之ヲ行ヒ其比較多數ヲ得クル者ヲ以テ當選トス

第十八條 設立ノ際ニ限り理事ハ設立者ニ於テ之ヲ指定ス其指定ニ至ルマテノ間ニ於テハ設立者

青柳新米ニ於テ理事ノ職務ヲ行フ

第十九條 理事ノ任期ハ三ケ年トス

但 設立ノ際ニ於テハ本財團設立許可ノ日ヨリ其任期ヲ起算ス

第二十條 理事評議員ニ於テ缺員ヲ生シタルトキハ臨時補缺選舉ヲ行フ

補缺員ハ前任者ノ残任期間在任スルモノトス

第四章 會議

第廿一條 理事長ハ定期若クハ臨時ニ社友會評議員會ヲ招集シ其議長トナリ會議ニ於ケル必要ノ事務ヲ處理ス理事長事故アルトキハ他ノ理事代リテ之ヲ行フ

第廿二條 評議員會ハ半数以上出席スルニ非サレハ開會スルヲ得ス

第廿三條 第廿一條ノ會議ハ其都度採決方法ヲ議場ニ問ヒ議長之ヲ決ス

第廿四條 理事會ハ必要ノ都度理事長之ヲ召集シ又ハ理事二名以上ノ請求ニ依リ之ヲ開ク

第廿五條 理事會ハ理事會ノ決議ニ依リ本財團ノ事務ヲ處理スルモノトス

理事會ノ決議ハ第八條ノ場合ヲ除キ出席者ノ多數ニ依リ之ヲ定ム

可否同數ナルトキハ理事長之ヲ決ス

第廿六條 本寄附行爲ハ理事全員ノ同意ニ依リ主務官廳ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

右之通り

大阪市東區寺山町四百九拾六番屋敷

設立者 杉 田 潮

東京府豐多摩郡西大久保百人町九拾四番地

設立者 須 田 明 忠

群馬縣前橋市國領町六拾四番地

設立者 深 澤 利 重

同 縣同 市岩神町百參拾壹番地

設立者 青 柳 新 米

大正五年一月三十一日午前十時開會の評議員會に於て、理事の任期満了につき改選をしたが、森

村、深澤、半田三氏が當選重任に決定した。然るに同日午後二時理事會を催し、全員の一致決議により理事一名を増員する事となり、寄附行爲書の變更を主務官廳へ申請することとした。此の手續は、四月十一日附を以てせられ、同二十一日附を以て文部大臣から認可された。仍て大正八年三月二日理事改選の評議員會に於ては、森村、深澤、半田、青柳四氏を選擧し、森村氏が理事長に推された。然るに大正九年二月六日の評議員會に於て理事交迭の件が議題となり、青柳校長は理事を辭し、其の代りとして富岡守治氏が満場一致を以て推薦されたが、之は其の時の必要上からであつたらしい。で、次期の大正十一年三月の改選には、森村、深澤、半田三氏の外に、柴田清策氏が選舉された。その年の夏青柳氏が辭任されて校長の代變りとなつたが、共愛社の基礎は漸く堅固になつて來た様であつた。

半田平次郎氏

半田平次郎氏は、群馬縣碓氷郡松井町小板橋仁平の次男として、嘉永六年四月十日に生れた。幼少の頃から勤勉熱心で、少年時代から父上を助けて農商に従事したが、其の爲す所甚だ凡ならざるものがあつた。偶々原市町半田宇平次氏の知る所となり、明治十二年十二月七日其の孫女くら子と結婚し半田家を繼いだ。くら子は二女を擧げたが不幸にして病を得て明治二十四年二月一日良人に先立つて逝かれた。平次郎氏は、其の非凡の才能を以て養父の遺業を繼ぎ、拮据經營益々繁榮した。氏の爲す所は、凡て自ら利得するのみならず、他の福利を増進することを志ざしたから、人にも大に喜ばれた。氏は、言を作つたけれども、开は凡て潔き手に仍て成されたものであつた。

氏は、半田家に入つて後、基督教を聽きて感ずる所あり、明治十四年九月海老名正氏から受洗入信し、爾來原市教會の柱石として盡力された。氏は、篤き信念と、高き理想とをもち、潔き家庭を營み、立派なる事業を經營した。其の甥善四郎氏を養子としようとした際、其の胸襟を披瀝して書翰を送つた文中に『我は君に譲るに聊かの物質的の物の外何物もなしと雖も云々』とあつたといふので、其の謙遜懇篤なのに、善四郎氏をして感激せしめたといふ美談も傳へられてゐる。

氏は、外出する場合には、其の出先で商取引上如何に利益あることがあつても、家の人に約した時間には必ず歸宅する様にし、決して商取引の爲に歸宅を遅延せしめたことはなかつた。之は些事の様であるが決して然うではない、家庭の平和と純潔とを商取引以上に評價した氏の精神は實に立派なものであつたと思ふ。かうした人であつたから、使用人等に對しても何事も公平であつて、孰も悦服してゐた。公職は氏の好む所ではなかつたが、推されて町會議員となり、郡會議員となり、所得稅調査委員となり、遺産相續審査委員となり、各方面に努力した。又、西毛電氣株式會社々長となり、濟生會の世話人を囑託せられ、京都同志社理事となり、本校の常議員も創立以來死に至る迄勤められ、最、忠實なる一人であつた。各方面に對して克く盡力されたが、多病にして竟に明治四十年八月十八日享年五十九才を以て永眠された。惜むべき人であつた。氏は、寡黙多く語らざる人であつたから、表面には餘り顯はれてゐないけれども、本校經營の爲には深澤利重氏に力を協せて多大の盡力をせられ、本校が幾回となく逢着した難局に際して、克く善處することを得せしめられた功勞は、實に没すべからざるものがあつた。

生徒の徽章

六〇

創立以來二十年餘りは本校生徒の徽章といふものは何もなかつたが、明治四十二年になると學校當局はその必要を感じたので、櫻花の崩しの徽章を袴の裾につける事を規定し、七月十七日第一期の終に之を全校生徒に發表し、第二期の始め即ち九月十一日から實行する事とした。其の日から共愛女學校の生徒は、一見して他校の生徒と區別がつく様になつたのである。青柳校長が『野の花』第二十號に於て『本校生徒袴の徽章に就て』と題して、それを詳細に説明して居られる、左に其の全文を掲げてその意義を明かにしておく。

近年女學校に於て生徒の袴の裾に徽章を附ることが流行する、公私の別なく女學校に於ては争て生徒の袴に徽章を付ける、其等の徽章の中には中々優美のものもある、意匠を凝らしたのもある然し中には殆ど無意味無趣味であつて、唯他の學校の眞似をしたのではあるまいかと思はるゝのもある、抑も袴の徽章なるものは己の學校と他の學校とを區別するのであるから、一見彼は某の學校の生徒であつて某の學校の生徒でないと思ふことさへ區別がつけば、それでよいやうであるが決して然でないと思ふ、赤十字社の社員が赤十字の徽章を付け、恐れ多い事であるが皇室にて菊花の御徽章を用ひらるゝことは、何れも貴い歴史もあれば深い意味もあることは今更説明するの必要はない、學校に於て着ける徽章も、之を附けるからには何等かの意味があるべきである。本校に於て生徒が袴の裾に今の徽章を付け始めたのは去る明治四十二年九月の事である、之は色々理由のある事である、當時我群馬縣下には高崎に一の縣立高等女學校がある許りであつて、

前橋には裁縫學校と稱する所は二三あつたが、未だ高等女學校は無かつたのである、然るに本校の生徒が往々他の女學生と誤られ、他の女學生が本校の生徒と見らるゝことが有て大に迷惑したのである、生徒等も皆大に此事を憤慨し袴に分かり易い徽章でも付けて見誤られないようにしたいと申出たのである、依て學校にても生徒の請を容れ新に徽章を制定する事とした、勿論之は徽章であつて裝飾ではない。

擬徽章を付る事と定つたが前にも申した如く徽章でさへあれば何でもよいと云ふ譯にはいかない、依て學校にても職員會にて種々調査をなし、生徒等よりも意見を述べ且圖案をも作らしめる事とした、然るに不思議の事には生徒の考案と學校の考案と宛も符節を合せたやうに一致したのである、但しこれは其頃生徒が徽章として「ともさくら」の胸ピンを着けて居たのであつて、此「ともさくら」を崩したのである。

袴の徽章の由來は先づさつと右の通りであるが、此徽章には如何なる意味があるかを一言しよう。一、此徽章は優美である、櫻花は我國特有の名花である「しき島の大和心を人間は、朝日ににほふ山ざくら花」であつて、我武士道の精神を代表し東海の天に聳ゆる芙蓉の峯と共に我國民の理想である、本校生徒は此徽章を愛し此徽章を以て誇りとするのである、奈良の女子高等師範學校にても本校のと同じの徽章を附けると云ふが、奈良縣には有名なる吉野もあるから櫻花の徽章を用ゆるも理由のあることであるが、同校で此徽章を附けたのは本校よりは後の事である。

二、此徽章は質素にして何の飾りもないけれども極めて趣味に富である、只一筋の線を以て櫻の花瓣を綴り連ねたのであるが、少し離れた所から見るときは唐草模様のやうで女性の美を形作る

曲線を以て描かれてゐる、色は鼠色で地味な色であるが袴地の色と能く配合する、兎角女子は虚榮に走り易き傾向があるから無論質素を旨とすべきは云ふ迄もないが、近來女學生の服装は餘りに無趣味ではあるまいか、男學生などはどうでも能いかもしれないが、元來女子は花の如く美なるべきものである、精神の美なると同時に外貌も亦美なるべきである、徒に虚榮に馳せ紅や脂粉に浮身を褻すは厭ふべきであるが、出来るだけ天然美を發揮する事を努むるは教育ある女子のなすべき事である、イエスキリストは「心の清き者は福なり其人は神を見ることを得べければ也」と教へらる、さくら花の如きは花の最も清きものである、キリストは又「爾曹は地の鹽なり」と教へらる、鹽の食物に味をつける如くに、家庭の人とならば其家庭に、社會の人とならば其社會に趣味を興へて楽しからしむるは女子の本分と云はねばならぬ、左れば斯の如き由來と深き意義ある徽章を其袴につくるものは、一面に於て質素を旨とし、滔々として打寄する虚榮の浪に浸されざるの覺悟あると共に、他の一面には専ら清き心と優美なる情操と高尚なる理想とを養ひ、將來能く殺風景なる社會に清くして高尚なる趣味を興へ、此世を天の樂園たらしむる事を心掛くべきである。

宿寮の生活

こゝで本校の誇るべき特色の一つである宿寮の生活は其の頃は何うであつたかを見ておきたい。本校當局は、何の校長の時代にも、寄宿寮の改善整備といふことに多大の留意をしてゐる。一つの例として、試みに明治四十四年六月九日の日誌を見ると『高畠舎監寄宿制度取調べの爲高崎高等女

學校參觀』とある。文句は簡單であるが、容易ならざる苦心と熱意とが其の背後に窺はれる。然うした當局の温情の下に如何なる生活が営まれたか、大正三年七月の『野の花』に『あづま』といふ筆者名で『我寮寮舎の生活』といふ一文があり、其の委曲を盡してゐる。曰く

或は桂寮或は二葉寮或は常盤寮等室に新舊の差はあれど起臥する友の心には隔あるべくもあらず朝起床の鈴なれば直にとび起きおのがじつすなる掃除は廊下掃除、部屋掃除、廁掃除等種々あれども寮を清潔にせむてふことに歸す、廊下掃除はいと勇ましく庭掃除はいと心地よし、なべて人々に好まるゝは庭掃除ならむ、洗面後箒をとりて庭に立てば朝風吹き來り心地よきこと限りなし赤城、淺間、榛名の山々は無言の教を垂るゝが如し、いひふりにたる言なれど春は雪の如き花片を集め秋は敷きなしたる錦を寄す、夏の涼風はいと嬉しく冬の寒きに手に息ふきかけつゝなすど面白からぬはなし、されどこれをのみ好みて他を厭ふが如きことは決してあらざるなり。その他隔日の風呂には二人の當番ありて石炭を入れ湯の加減を見などす、又食事の當番は三人あり、日々食前食後の事をなす。當今起床は午前五時半にしてそれより約一時間餘經たる六時四十五分に第二の鈴は舎内にひびき渡る、こは靜肅の時を告ぐるなり。この時は既に結髪もすみ掃除も終り居り皆靜肅を旨とし敢て高音を發せず、或は聖書をよみ或は祈禱をなして一日の計をなすなりかくして十五分も経れば第三の鈴は朝飯をしらす。一同食堂に集ひ各自定まれる場所に着けば校長先生、寮内の諸先生見へられ、こゝに朝の挨拶をなす、食前の感謝は舎監先生せられ一同睦しく朝食を喫するなり。朝餉たうべ終れば八時半禮拜に至るまで自習時間となす、禮拜は職員生徒一同集りて行ふなり、その間凡そ二十分、皆心清くなりて神を讚美し祈をさゝぐ、語り給ふ先生

の御話の有益なることを俟たず、一週に一回ベッドレー先生グリスオールド先生の御話あり。これより午后三時まで晝飯の時及び已むを得ざる時の外は寮内に入ることなし。放課後は部屋に歸りて復習讀書或は洗濯等心のまゝにす、夕食は春夏秋冬とはす五時と定めらる。夕食後は運動時間にして春夏など日長き頃は先生に連れられ利根河原、敷島河原等に遊ぶこと屢なり、夕風に袂吹かせつゝ堤上をそゞろ歩き落日の紅なるを眺むるは楽しみの一なるべく敷島河原への道すがら美しき花どもとりつゝ行くは楽しみの中の二つなるべし、食後直に日暮るゝ昨日今日は三々伍々うちつれて運動場の芝生の上をそゞろ歩きなどす、これも亦楽しきことなり、かくして六時四十五分夜の集りの鈴なれば皆食堂に集り等しく神を讚美し祈りをなし司會者は聖書を朗讀す、聽て夜の挨拶終れば部屋に歸りて七時自習時間の鈴をまつ、七時となれば各自一心に勉強す、八時には十五才以下は就床し九時にはいづれも安らかなる床に就き寮内は寂然たり。我等は概ね、かくの如くその日／＼を送りつゝあるなり。猶この他書くべきは日曜と金曜の夜の集りなり。この日は常と少し異なり日曜には先生の御話あり、金曜は讚美歌の稽古ありてその時間も常より長し。あはれ楽しき寮舎なるかな、設備は固より完全とは云ふを得されど情厚き師の君に導かるゝこそ嬉しき極みなれ。この寮に入りぬるため我等は世界の端々までも尊ばるゝ聖人の書に朝な夕な接するのみならず、その講義をもきゝ得、折々は名高き人の有益なる御話をも承はることを得るなり。誇がましきことなれど目に見へざる靈の糧を得ること最多きは我校の寮舎ならむ。朝の禮拜、日曜の教會行き、その夜の集りなど一つとして有益ならざるはなし。あゝかゝる楽しき寮舎に日々起床す、我等の幸如何ばかりぞや、左れば我等は皆協力してこの寮舎の更に清くなりゆきて直に

愛をもて上級は下級を妹としいつくしみ下級は上級を姉とし慕ひ眞に美しき一樂園となさむために祈り且勵みつゝあり。

以上は、如何にも楽しい理想的な面を描いてゐるけれども、不完全な人間の爲る事であるから、然うした楽しい事ばかりではなかつた、大正七年十二月の『野の花』には、三年生の生方たかといふ生徒が、卒直に『かくありたしと思ふ學校寄宿舎』といふ一文を發表してゐる。それによると吾が寄宿舎は、其の建築はいたつて不完全である。それにしても中に生活してゐる諸先生及び生徒の皆さんは、誠に心の氣高い氣の清々とした互に愛し合ふ方々である。先生は故里にある母の様に、姉のやうに、萬事世話をして下さる。ほんとに感謝の言葉もない。私は如何に建築が不完全で、外部よりの見へはわるくとも、其の内部に行はれる事實が正義人道にかなつてゐるならば少しもはづる所はない。なほさら世人にほこつてやる事が出来ると思ふ。それにしても、あまりに不完全の爲に毎年嵐の時など、常盤寮の如きはつぶされるかと思ふやうにゆれるのである。其の時は生きた心地もしない。ただつぶれた時はと思ふばかりである。だから見へはいいかにわるくとも、今少しけんごでありたいと思ふ。又規律ただしくあつてほしいのである。

今では寄宿舎のきまりになつてをること、亂れに亂れて居て、すこしも行はれて居ないと云つてもよい。たとへば朝鈴の鳴らない中に早起をして、あちらではばたん、こちらではがたんといはせ、又は廊下を早足にばた／＼と通る人等、ほんとに下に寝て居る人たちはそれが耳にさわつてならないさうだ。さうかと思へば、鈴が鳴つてもぐす／＼して起きない人もある、其の他色々

のきめられた時間を守らないで、我儘の事をして居る。此頃になつては規則の亂れてる事がなほさらはつきりとしてきた。どうかしてこの悪風を取りさり、規律正しき人にならなければならぬ。

掃除の如きも至つて不行届である。女子でありながら、此の様に物事をおろそかにするのは残念の極みである。

あゝ今までの悪かつた事を善に導くのは、皆之から上級生とな。私たちの雙肩にかゝるのであるハイカラな生意氣な事をする寄宿は、まないけれども、建築が完全で規律正しく、禮儀をよく守り、女子の女子たる道を行つて、世人に恥ぢないよき模範的の寄宿舎を作りたいと望むのである以上二つの引照で十二分に知らるゝ如く、多少の不平や不満はあつても、全體として見る宿寮の内部には四時春風駘蕩の和やかな趣があり、いかにも家族的な喜びと親しみとが、傳統的に持續されてゐたことを知ることが出来る。

猶、前校長川合信水氏が其の理想と見識とを以て、寄宿舎を『共愛寮』と改稱し、舎監を『主婦』と呼ばせられたことは既述した所であるが、青柳校長の代になつてからは、格別川合氏の様に理由をつけて何うの斯うのといふではなかつたけれども、いつしか一般の慣稱に従つて『寄宿舎』と『舎監』とが復活した様で、右の引用文にも然うなつてゐるが、本校の記録にも悉く然う書いてある。勿論名稱が何うであらうと、川合氏の謂はれる様に囚人と看守の如な状態や氣持は微塵もあつたのではない。見らるゝ如く、宿寮は其の頃の生徒に取つて一個の楽しい家庭であつた。

二葉會と愛隣會

會て川合校長の時代に、教室が狭くて足りないので苦勞した生徒に由て、四年生の教室を建てるといふことを目標として二葉會なるものが組織せられ『節儉し』『勤勞し』『樂みて』『神に獻ぐる心』を以て出す』事を誓つたといふことは、既述の通りであるが、其の會は其の後何うなつてゐるかといふに、それ以來校舎の増築は何れだけか出来、目的の幾分は果されたのであるけれども、本會は依然として繼續せられ、月日と共に發展しつゝある本校の爲に熱心なる奉仕の志を集めてゐるのであつた。本會に於て如何なる事が成されたかといふに、會員たる生徒等が各自小さな細工物などを作つて、前橋教會に持つて行つてそこに集る人々に買つて貰つて其の利益金を献げる様な事もあり又時に無駄を節約して献げる様なこともあつた。方法は様々であつたが、如何にして母校を擴張する爲に一錢でも多くを献げるかといふことを心がけて、會員銘々が努力したのであつた。大正九年十二月發行の『野の花』に萩子といふ人が『双葉會懷古』といふ一文を寄せてゐるが、其の中にか

く記してある。

私が丁度四年の時でした選ばれて双葉會で働く様になつたのは。その時は何が何やら夢中で上の級の方から渡された品物とお金とを見て五人の役員はこんな事を云ひました『マアこんな無器用な者ばかり選んで本當にどうするんでせう』と。それでも五人してよく働きました。或る時は旅行の途中珍しい小兒のおかけを買つて来てそれをバラ／＼にほぐして、それと同じ様な形を切り珍しい新式なおかけを幾つも拵へ、大變儲けた事も御座いました。又文學會の後のバザーの

爲めに、摘み細工やら小細工やら出すので、學課以外に働いてよく寮の二階に残つては仕事した事がありました。或時は原市までも品物を賣りに行つた事もありました。こんな工合で卒業間近には渡された時よりお金も品物も倍にもなつて居りました。私共の時から會計と書類などを置き整理しよゝ爲めに帳面なども寄附した様に覺えて居ります。そして卒業の時は記念の爲めにベツドレー先生のお庭で双葉會の人達だけで寫眞を撮りました。(中略)

私達の小さい愛の働きも十年の後には二百幾圓となつて校内に雜貨店を開き生徒の急に具へてありました。他の學校の購買部様のものでせうが、その成立が全く生徒の赤誠より校を思ふ一片の愛の事業に外ならないので御座いますもの、そこに働いて下さる只今の生徒さん達も屹度喜んでこの意義ある仕事をして下さる事だと存じます。

尙、此の二葉會の名稱に就て、創立當初川合校長の記されたものには『二葉會』とあり、此の引用文の筆者は『双葉會』と書いてゐるので、編者には些し疑問があつたので取調べたのであるが、最初は『二葉會』と名づけられたものが、後には『双葉會』とも書く様になり、漫然兩方共用ひられたものらしい。とにかく此の引照でも知らるゝ様に、本會は青柳校長の時代が最も盛大で、皆々熱心に活動したらしい。

本校には、此の二葉會の外に以前から愛隣會といふのがあり、今日購買部と稱してゐる其の同じ仕事をして、時に公共事業などに寄附したりして來たが、其の會も青柳校長の時代に其の働きを繼續して相當の成績を示してゐた。かうして生徒等は、教師たちの指導の下に、よく忠實に熱心に學校の爲に活動し奉仕したのであつた。之は、たしかに本校の一特色といへるであらう。

御大葬、校長辭職

青柳校長の時には、二度の大悲痛事件があつた。一は明治大帝の崩御、他は昭憲皇太后の崩御である。先づ明治天皇崩御前後の日誌を見る。

明治四十五年七月二十一日 日曜日

今朝の新聞紙に因り 天皇陛下御不例に渡らせられ候事を知り臨時教員會を開き一同謹慎御平癒を祈るべき事を定む

同 二十八日 日曜日

天皇陛下御重態の由に付謹慎一意御平癒を祈るべき様通告書を發す

同 三十日 火曜日

其筋より次の通り通牒あり

天皇陛下崩御遊ばされたるに付き何分の通達ある迄不取敢授業中止すべし

青柳校長縣廳に横田事務官を訪ふ

大正元年七月三十一日 水曜日

市内生徒及職員を召集して特別の訓辭を校長より爲す市外の者には通告書を發送す

同 八月三日 土曜日

市役所より御太葬中生徒の服裝等に付通牒あり

同 九月十日 火曜日

午前九時より職員會を開き遙拜式に付協議す

同 十三日 木曜日

午後三時より運動場芝生に於て遙拜式を執行す(式次省略)

午後十一時寮生一同更に遙拜を爲す

更に大正三年四月の日誌を見る。

四月十一日 土

午前九時三十分市役所より 皇太后陛下崩御遊ばされたる旨通牒あり授業を中止し大喪中の心得を訓示す

同 十三日 月

市役所より大喪に付重ねて通牒あり

五月二十二日 金

臨時教員會を開き遙拜式の件を協議す

同 二十四日 日

午前八時三年級教室に於て 昭憲皇太后御大葬の遙拜式を舉行す(式次省略)

以上は事務の日誌、あるから記述は極めて簡單であるが、あの明治の偉大なる 兩陛下の崩御はまことに悲痛のうちの悲痛、哀愁のうちの哀愁で、今も尙當時を忘れることができない。

時代は明治から大正へと移つた。それは唯年號の相異だけではなかつた。大日本といふ此の國の根本からの推移であり轉換であつた。時代に處して一個の事業が適應して、維持されてゆくといふ

ことは、否更に伸びてゆくといふことは、容易なことではない。青柳校長は、席煖まる暇もなく足を摺子木にした。日誌を見れば、其の苦心努力はよく判る。其の結果は顯はれて、本校は漸次に學校としての形體を整備して來た。入學生も此の校長の時代に於て、ある年には六十名以上に達した。本校の位置は動かないものとなつて來た。理事及び評議員諸氏の並々ならぬ苦心を思ふ。深澤氏の逸事や半田善四郎氏などの談話を聞けば、涙のこぼれる様な事ばかりであつた。議論もしたらしい、理屈も云ひ合つたらしい、が、みんな本校の發展を慮かつてのことであつた。或る時には、餘りに負擔が重過ぎるといふので、十人あつた筈の評議員が一人去り二人去りして、三人になつてしまつたこともあるといふ。其の三人といふのは、先代森村堯太、深澤利重、半田善四郎の三氏であつた。此の三氏は、其の場合、舞臺上の素晴らしい英雄であつたと思ふ。然した蔭の焜者たちと表面に活躍した校長との盡力は、其の時代に在りて、遠慮なく伸張發展した本校の様態に於て、十二分に報ひられたものと謂へるであらう。

斯うした中で、青柳校長は大正十一年八月二十六日暑中休暇の終らうといふ頃、突如として辭職された。青柳氏は、既に記した様に、本校創業時代五年間教鞭を執られ、今次は校長として十五年間盡力せられ、前後二十年間に亘り本校の爲に奉仕された、其の功勞は没す可らざるものがある。

柏木假校長時代

柏木義圓氏

本校も昔は校長を九ヶ月も空席にしておいた事もあつたが、大正十一年代の本校としてはもうそ

んなわけにも行かないので、青柳校長がその職を退かれると直ぐ其の後に、評議員の一人柏木義圓氏が假校長として擧げられ、九月二十六日に校長就任式が執行された。しかし、氏は、安中教會牧師といふ本職の有る人であるから、校内に於ける實際の事務は、主として教員の杉山勇司氏が擔當され、校長としては毎週月曜日に登校して修身の講義をされた位のことらしい。斯う書いてしまふと氏の假校長は、至極簡単に登場された様に見えるが、何うして然う容易く出来たものではなかつた當時『野の花』に掲載された教員杉山勇司氏の『迎柏木校長之辭』を讀めば、之がなか／＼の難産で、編者の推測にして誤謬なしとすれば、杉山氏が産婆役として大に活躍努力されたことが判る。辭の末文にしるして曰く

曩に青柳校長の病餘重職に堪えずと高踏勇退浩然之氣養に就くや須臾も缺くべからざるものは校長なり。衆目の視る所十指の指す所其れ嚴なるかな。評議一決三度安中の寓を訪ひ就職を懇請すること極力至盡漸く條件の下に出盧す、氏の同志社に在學するの時余も亦同志社に在りて氏を識る甚だ深し矣。氏は資性清心寡慾冬一裘夏一褌公に勇にして私を忘れ財を糞土に比す。僿褻穢穢風雨に沐櫛を憂へず。敬神憂人の甚厚ならざるを之れ患ふ。其の忠肝義膽孤憤深慨の氣鬱積磅礴久うして洩さず。其の境に觸れて時事を讜議縱横に當るや蘊を闡くし、新意を發し拘泥せず、執滯せず。意を以て志を逆ひ經緯貫通堅を鑽り沈むを釣る。燧して火を取るが如く湯を空灌ぐが如し。議論人意の表に出づ。秀を嚼み、華を吸ひ、毫を落して章を成す。筆吃人をして戰慄せしむ奇なりと謂つべし。初對面破顔の處女の如く論議風發陣厲脫兎の如しとは抑も亦氏を謂ふか。自今氏を校長と仰ぐ幸甚だ大なり。云々

以上を見れば、柏木氏が出盧の経緯もよくわかる。本校當路の意を齎らした十分押しのおきく使者が二度安中教會の牧師館を訪づれたのであつたが、あの茫漠として捕捉し難い先生の應待で、なかなか諾と言はれなかつた。三度目に至つては、使者の態度も甚だ強硬の度を加へたと推察される。熱心な頑張りが竟に功を奏した。露骨に言つてしまへば『仕事は御心配かけない様に私がします、看板だけ先生の御名前を出して下さい。決して御名前は傷つけませんから』といったことで辛うじて其の承諾を得たのであつた。

柏木氏は、明治三十一年から共愛社の常議員として本校の經營に盡力せられ、且つ卒業演説其の他特殊の場合に屢々來校して、職員生徒一同の爲に講演を爲し、有力なる精神指導を與へられた。氏の本校に對する關係は、並々ならざるものがあつた。偶々氏が假校長に就任された事を記述するに際し、茲に大正三年七月發行の『野の花』第十九號の巻頭を飾られた『眞の婦人』と題する氏の論説を収録して、其の女子教育に當られた態度を知り、且つ氏の婦人觀を窺ふたよりとする。

創めて開發主義の教育を唱へて教育界に一時代を劃したベスタロジイは眞の教育は母を経て成されねばならぬと云つた。國民を教育せんと欲せば先づ將來其母となる可き女子の教育より始めなければならぬと云ふのである。彼は幼にして其父を喪ふた、父が世を逝る時多年忠實に仕へた下女を枕頭に呼んで我が亡き後は妻を補佐して幼兒を人に成して呉れと呉々も頼んで死んだ。彼女は深く此の主人の信頼に感激し野菜を買ふにも一日に三度も市場に足を運んで賣れ残りで價の下るのを待つて買ふと云ふ風にして家政を理めベスタロジイが何か請れば母上が斯く／＼苦心して入らせらるゝを御察しなさらぬかと懇ろに諭し主従心を協せて彼を立派な人格に仕上げたの

であつた、彼の眼には其母と下女とが如何に貴き婦人と見へたであらう、去れば彼が國民の教育は母を経て成されねばならぬと確信したのは決して偶然ではあるまい。而してこれ教育上不動の眞理である、孔子は女子と小人とは養ひ難しと云ひ佛教は女を五障三從の惡人と云つて特に罪業深き者と爲して居る、ペスタロジの如き人に在ては何うして此の如き婦人觀を有つことが出来やう、儒教や佛教の如き婦人觀の有る所には眞の女子教育は有り得ない、隨て國民教育も起り得ない、婦人の眞位地が認識せられ女子の眞價が發揮せらるゝのは實に基督教文明の感化である。米國クラーク大學總長スタンレー・ホール博士は女子教育の主なる目的は母を造るにありと唱へ眞の婦人となると云ふことは妻たる性質よりも寧ろ母たる性質を發揮するに有る、聖母マリヤと云ふ觀念は男子が婦人の本性を最も高尚に了解したことを現はすもので予は加特力教徒がマリヤを崇拜するのを非常に美ましく思ふ……現今婦人で母とならぬ者が多いと云ふことは病的現象とは曰へぬかも知れぬが確かに現代の一大不幸である……生涯獨身で終り或は教育家或は博愛家或は社會改良家文學家として其猷身的精神と云ひ其功勞の偉大と云ひ將又妻或は母として有る可き愛情を人類に傾注したこと、云ひ實に人間最高の理想を現はして居る婦人を見れば轉た崇敬に堪へないが併しさう云ふ立派な婦人が獨身であつて將來の社會の爲めに善い種を遺して呉れなかつたと云ふ事は社會の損失である、レスリー・スチーヴンスは歐洲に修道僧の出來た事は歐洲暗黒時代の來る原因であつたと言ふて居る、其譯は此等の修道僧は當時の撰り抜き的人物で其れが僧庵の中に隠れて仕舞つて社會の爲に善い子孫を遺すことをしなかつた爲に歐洲が退化したと云ふのである、偉い婦人の獨身と云ふ事も亦之に似た結果を生ずるものであると曰ふて居らるゝ、聖

書に「婦女若し信仰と愛と清きと謹みに居らば子を生む(母となる)ことに因りて救を得可し」(提前二ノ十五)とあるは味ふ可き言だと思ふ。

母は實に人を創造するのである、世界何事か之より高尚にして偉大なるものがあらう「人と云ふ内容が高く深くあればある程母てふ」天職の崇高を加ふるのである、母は單に家の爲に人を造り國家の爲に人を造るのみではない、實に永遠の天國の爲に新人を造るのである。人の裏に潜んで居る神の肖像たる靈性を啓發して神の天國に入らしむる迄にしなければ未だ母たるの天職を完ふしたとは謂はれない、ホール博士は又「フレイベルは嬰兒が無意識であるのは神の力に安眠して居るのであると曰ふたが意味頗る深長である……嬰兒が始めて此世界に生れ出た時、母親が本能的に軽く打つたり撫でたり抱いたりする爲に嬰兒が未だ自他の區別さへ出來ない内に色々な感情が起て來る、其精神が發展するに隨て第一に母なる人の顔と聲とに注意する様になる、すると間もなく母は嬰兒の爲に神の地位に立つゝとなる、此時期に於ける子供の宗教は要するに感謝、信任、依頼、愛情など云ふ情操に過ぎない、而して此等のものは只母に對する情操であるが將來は其れが即ち神に對する情操となるのである。此時期の小供に取ては母たる者が唯一の適當なる相手であるから若し此時母に對して此等情操が養はれることが少なければ生長の後神に對して有すべき此等の情操も亦隨て乏しい譯である、此情操が基礎となつて將來小兒或は大人の宗教が建設されるのである、母の地位は神聖であつて其責任は頗る重大である」と曰つて居られる。獨逸のドレスデン府の博物館に伊太利ヴェニス美術家ロベルトウ・フェルチイの作なる有名なシスチン・マドナの繪像があつて人が此の畫室に入るや何物にか打たれて寂然として聲なく覺え

ず脱帽すると云ふことである、人性の母(マリヤ)が神性の兒(キリスト)を愛しみ抱く、噫これ何等の異観であるか、誕生は人間の歴史に於ける最も不思議なる瞬間で母の愛は人生に於ける最も純潔なる感情である、母が子を愛育しつゝある光景は神が人間を愛護し玉ふ聖意を代表するものではないか、且つ家庭は國家の基礎で又天國の面影である、子が無ければホームは無い、嬉々と云ふ叫聲、トン／＼と云ふ足音、時々刻々目ばなしの出来ぬ程なる母の心遣ひ母と子之があつてのホームでないか、母は其愛の泉を湧き出さん爲に子を求め神は其聖愛を注がん爲に我等人の子を求め玉ふ雷に子が母をたづね神を追ひ求むるばかりではない、聖アウガスチンは「汝は汝(神)の爲に我を造り我は汝に在て休むに非れば平安を得ず」と曰つたが神も亦「我は我が爲に汝を造れり汝が我れに頼り来るまでは我心安からず」と仰せらるゝであらう、母子の意義は實に宇宙の秘義である、天使は聖母マリヤを祝して「汝は女の中に於て最も福なるもの」だと言つた、これマリヤがカルデヤ人の天文学を知つて居たからであらうか、將た埃及語パピロン語を學んで居たからであらうか、抑又彼女が或は慈善事業に矯風事業に於て社會に活動したからであらうか、否々此は彼女がキリストの母であつたが爲である、シメオンはマリヤの生涯を豫言して「劍汝の心を刺し透す可し」と曰つた、マリヤの生涯は實に此通り慘澹たるものであつた、去らば子から衣食の養を享けて安樂に暮らすこれ亦女の幸福の最上なるものではない、キリストらしき者の母となるこれ實に理想の母である、心理學者として世界の典據たるホーム博士は「予は一箇の心理學者として感情は智力よりも貴いものであると云ふ事を益々深く信する者である、而して婦人と云ふ者は神の御手から來た者であると思へば婦人に對する愛情が益々熱烈になつて來る」と曰はれた

此の婦人の純潔純美なる感情は實に母たるに由つて發揮せらるゝのである、眞の婦人は眞の母である。

バザールと活動寫眞

大正十一年十一月十一、十二兩日本校最初の試みとしてバザールを催した、それに模擬店を設けて飲食物を提供し、生徒等有島武郎作『大洪水の前』と題する舊約聖書のノアと其の家族の事を劇に綴つたものを演出して、來會者の眼を楽しませた。此の催しは、最初教員室での即興的な話題が取り上げられて、年々の文藝會を變更され、實質的な催しとされたものらしいが、二日とも會は大成功で、夥しい來會者であつた。が併し、かうした成功を得るまでの準備は大變であつた、報告記事に斯く記してある。

バザールの爲とて桐生、伊勢崎へ反物の品定めに喜んで何度も赴いて下さる先生、柄も品も良く格安なものをと苦心された結果、お召、銘仙、富士絹、帯地、小布は山の様に積まれる。公設市場からは林檎、蜜柑、バナ、葡萄、鱈節等も運ばれる。生徒は出品の製作に日の暮れるのも知らない。可愛い、手に成つたエプロン、細工物、袋物、爪皮等が並べられるのを待顔だ、綠、茶、黒の食券は作られる。おすしにしろこにコーヒー。鉄の音、胡粉で朱墨でかゝれる筆が立つたまま横になる暇がない。糸に通して整理をするもの、毎日／＼教員室は渦を捲いた様な有様です。ポスターは見事に書き上げられて町の要所々に貼られた。案内狀、プログラムは美事にすり上げられた。日は迫る。校内の凡てが忙しい中にも引締つて行く。學課を終へてから五時迄の短い

間を練習に、餘りに少ない時を悲みながらもベストを盡しての劇の練習。烈しい練習に身體を痛める人、咽喉を傷ふ者、時には苦い顔もし、いやな顔もされて、それでも来る日の華やかな評を楽しみにいそしんだ。背景は一枚々々出来上る。凡ての者が定められたパートパートに努力する。云々

然した努力の後に迎えられる其の日は、誂へた様な日本晴の好い天気で、校外の同窓生諸姉も應援せられ、凡てはまことに好都合に運ばれて、食料品や雑貨の賣店から飲食物の模擬店、さては劇場に至るまで満員の盛況で、二日間の賣上利益金四百餘圓を得、全部本校の改築基金の中に納めた。

大正十二年二月になると、本校同窓會前橋支部が主催して、母校基金募集活動寫眞會なるものを十七日から三日間前橋の大和劇場で開催した。満場の觀衆を得、大成功であつた。此の活動寫眞會に、學校では手作りのドウナツをこしらへて持つて行つて賣つた様である。何でも機會を捉へては母校の爲に一文でも多く儲け様といふ熱心だけで、場合や手段は撰ぶ所がなかつた。該活動寫眞會は、引續いて各地の支部主催で催された。二月二十四、二十五兩日は伊勢崎で、同地の支部が主催して開會し、是亦大盛況であつた。四月七日には安中で、同地支部主催で開會し、同十五、十六兩日は松井田支部主催で同地で催した、いづれも好況で同窓會員たちがよく働いて母校の爲に盡されたことは特筆すべきである。斯うした努力に由て得た純益金が精算の結果金五千壹百五拾圓あり、七月四日母校改築基金へ寄贈された。是等の事に仍て、當時活躍した同窓會員等の熱意を想ふ。かうした活動のうちに、いつしか大正十二年の暑中休暇が來た。之で柏木假校長時代の幕を閉ぢ

る。この休暇中に、新校長が決定したのであつた。

因に、柏木氏は、其の後も評議員として克く本校の爲に盡力せられたが、惜しい哉昭和十三年一月八日永眠された。

柳田校長時代

就任

校長が無いといふことは、理事評議員等の惱みであつた。遂に一策を得た理事柴田清策氏は、上京して山室軍平氏に該問題を諮つた。山室氏は、當時金澤の石川縣師範學校に在職の柳田秀男氏を紹介されたので、早速交渉したところが、幸ひ話が順調に進んで大正十二年九月十一日には同氏の學校長就任式を見ることが出来、校内一同歡喜に滿された。

柳田氏は、京都同志社大學神學部の出身で、教會の牧師を勤めたこともある篤信の宗教家で、相當の希望と抱負とを以て赴任されたのであつた。氏が翌年春『野の花』に書かれた『我が喜悅、我が希望』と題する文に曰く

私は昨年九月一日前任地金澤師範を辭して本校に赴任する事になりました。前古未曾有の大震災は物質文明の日本より精神文化の日本への一分岐線を作りましたが、九月一日は私一個の生涯を取りても一つの大きなターニング・ポイントをなしてくれた日でありました。嘗に新しい職業に就き新しい生活の形式を取つたと言ふのみではありません、本當の私の生活が此の日を誕生として始まつたと言つても敢て過言ではありません。

惟ふに神は私の受洗以來約二十年私を孕み育て、私の内に其の働きを始め今日のための準備をなさしめ給ふたのであります。私が本校に赴任すると同時に神は内なる私に應しい衣を以て私の外を飾り給ふたのであります。私の衷なる祈願が外に應答を受けて神よりの使命として今日の働きが興へられたと言つてもよいでせう、神の使命を受くると共に私の「人生」を見出した私の感謝私の喜悅は譬ふるに物が無いのであります。

日月流矢の如く、就任して既に半歳を経ました。半歳にしては餘りに多くの試練、餘りに多くの悔恨、又餘りに多くの祈求のため半歳も私に取りては可成りな長年月の如く感ぜられました。然し其れにも不拘此等の試練悔恨祈求によりて使命に對する私の確信と熱愛は益々強さを加ふるのみでありました。私は今猶ほ就任當時の感激を以て神を打仰ぎつゝ私の喜と私の望を「野の花」を贈ると共に二百有餘の在校生と七百有餘の同窓生の姉妹に語り得る事は何たる特權であり何たる感謝でありませう。

私が本校に赴任し、第一に最も明らかに意識し且つ信じたる事は、此學校の校主校長とも言ふべき方は主基督であると言ふ一事であります。形に於て見るべき美しき榮なくとも過去三十七年間此の學校を指導したるものは何某校長でなくして實に主基督の見へざる御手であつたと思ひます。而して「彼」は今新しき時代に新しき姿を取りて最も強く校長として活躍し給はん事を信じ且つ祈るものであります。對社會對世間の關係上假に私が校長の名を僭すると雖も事實は基督が校長であり又校主であります。私は斷じて空想を語つて居る者ではありません、凡ての善き事凡ての美はしき事凡ての益なる事は私達の小さき祈に應へて主基督が學校の上に成就なしつゝあり給

ふ事を實驗するがためであります。私は此の眞校長の下に是れ命是れ隨ひ、且其の活躍を祈る所の一校僕に過ぎぬものであります。此れは神が知り私の良心が知り又神を知り私を知る人々の本心に既に明かにせられたる事と信じます。共愛女學校は基督の學校であり、基督の心の顯はるゝ基督の體であると言つて始めて學校存立の意義があります。たゞ世には薄信不徳の私達を見て、又過多き生徒達を見て學校を罵り嘲り「基督の體」を傷けんとするものがあります。此は固より私達の罪であります、かゝる人は物の表面に躓いて物の眞髓に觸れない人々であるとも言へます。願はくは千名近き我校友は我校を見る事、基督の心の顯はるゝ基督の體なりとの信念によりてせられん事を祈つて止まないであります。

使徒保羅が腓立比の兄弟等に贈れる書簡に「若キリストある勸と愛による慰と靈の交際と慈悲と矜恤とあらば汝等念を同うし愛心を同うし意を合せて念ふ事を一にし我が喜を満たしめよ、何事を思ふにも黨を結び或は虚榮を求る心を懐くべからず、各謙りたる心を以て互に人を己に愈れりとせよ、又各々己が事のみを願みず、人の事をも願みよ、爾曹キリストイエスの心を以て心とすべし」と。噫、私は右の聖句を一字一句も増減なき其儘の詞を以て、内にしては二百有餘の若き姉妹に、外にしては七百有餘の同志の姉妹に私の衷情の祈願を訴へんとします。

諸姉よ、基督の心をして基督の體なる共愛女學校と其の同窓會の中に充滿せしめよ。斯くして基督中心共愛中心の大家族を建設し、靈と愛とによる一致團結によりて、各自其の持場に於てベストを盡しつゝ戦ふ時、日本を根底より救ふ事も敢て困難ではないと思ひます。

第二に、私は一校僕としても一基督者としても、私の宗教々育に就ての理想を語らねばなりません。

ぬ。私は基督教女子教育を統一ある且徹底せるものとせんには、今の共愛女學校を中心として上に高等教育機關を設け下に幼稚園より小學校に至るの普通教育機關を合して後初めて私達の抱負の幾分を成就し得るものと思ひます。之は必しも私の創案でもなく現今識者の目醒めつゝある所であります。今日日本の徹底的教化を想ふものは、從來の斷片的傳道法に慚らずして宗教々育に全力を注がんとしつゝあるのは事實であります。又一信徒としても今日の無神論的知識偏重の小學校教育に喜び安んじて我等の子女を托する事が出来ませうか。私は焦眉の問題として全國の基督者が此處に覺醒して基督教主義の小學校を興すべきであると思ふ。私は出来得べくんば共愛女學校に同主義の附屬小學校を増設したい。若し能はずんば同志の協力を得て基督教主義の小學校を興すも可である。而して此の輝かしい理想は決して暗から暗へ葬り去らしむべき一場の夢たらしめてはならないと思ふ。私は千名近き共愛團の家族に此事を告ぐると共に、日本文化の立場より兩毛にある主にある兄弟に此の眞理を絶叫して同志を糾合したいと祈るものであります。

私は願ひて餘りに自己に就て語り過ぎた事を恥かしく思ふ。然し「我が喜悅、我が希望」は私の標題であるが故に最後に尙學校の現状に就て私の喜、私の望を述ぶる事を許して戴きたい。同職の友の献身的努力を見る時、嬉々として日々を學窓に樂む少女を見る時、自ら勵まされ且彼等の上に祝福を送らざるを得ない。校の内外の先進知友の援助と同情ある縣當局の忠言によりて設備漸く加はり文部省の指定認可を受けんとする機運に向ひし事は大なる感謝であります。嘗に夫れのみならず、學校經營の上に、蹉跎起り困難襲ひ試練來るとも凡ては主を愛するものゝために働きて益をなすを實驗する時、私達の喜悅は更に加はり希望は益々大ならざるを得ませぬ、私の

心は天を仰ぎ四方を拜して感謝に溢るゝのであります。

然し翻て思ふに今は漸く我が發展の第一歩に就いたまでであります。前途は遙に遼遠であります。第一線に立ちて遠く完成の彼岸を望む時、而して自己の無能を顧る時只管に母校を愛する同窓の姉妹を始め同情の知友の加禱と奉仕を祈つて止まないのであります。此れは私のためではなく、我が校のみの爲めではなく、公共事業として社會奉仕する我が校の尊き使命のためであり、更に神の榮光のためであります。

振興記念日

柳田校長就任後の第一の歡喜感激は、新校舎の増築落成といふことであつた。調査してみたけれども起工の日を詳かにし得ない、唯大正十二年十月十二日の日誌に「本日午後新校舎に移轉」とかいてあるのを見るばかりである。尙十月二十日の日誌を見ると「校長室、教員室、事務室、新校舎へ移轉」とある。該校舎は二階建て、講堂とすべき大廣間があつた。

翌十三日は「振興記念日」と稱せられ、當日を第一回として午前九時から「新講堂」で「新校長」の「我が校の使命」とも題すべき二時餘に亘る有益なる講話があつた。而して今更乍ら全校の職員生徒等は、基督教主義に本づく精神教育を主とする宗教學校の使命に就て思ひ返した。當時關西にはかうした學校が多くあつたが、關東から東北にかけては甚だ少なく、殊に群馬縣附近には本校の外には一つもない。加ふるに同年九月の關東大震災で多くの學校が倒壊した直後のことで「我が校の使命は、ますます明瞭に深く重く大きく強くなつて行く」ことを感じ「尊い使命を思ふ時に、如何

にして安閑として居られようか。凡ての者が等しき目標に向つて戦線に奮ひ立たなければならぬ事をつくづく思ふた。此うした深い感銘から其の日を記念す。爲に三つの計畫が發表された。即ち(一)校庭にテニスコートを設ける事、(二)ピアノ購入寄附金を生徒から募集する事、(三)震災地義捐金を募集する事で、いづれもその通りに實行された。講演會の後、隣接の宣教師邸の庭を借り受けて祝賀の意味で、赤飯で全校の者が會食した。柴田理事、校長、職員生徒等一同の面上には『包み切れぬ喜悅と誇りとがあり／＼と讀まれた』のであつた。新築の校舎は、記念館と稱せられた。

右計畫發表のうち大震災慰問金は、その後間もなく金貳百六圓集まりそれ／＼送金された。ピアノの購入に就ては、其の月の下旬に募金趣意書を配付して、早速同窓會員有志の寄附金が九百七圓五十錢に達したので、其の年の十二月には金一千圓のピアノを購入して講堂に備へつけ、年來の希望が満されて全校の歡喜であつた。而してテニスコートも、専門家の指導の下に造築に取り懸つた。同年十二月には、校則を改正して英語を必修學課とした。同時に、一ヶ年修了の補修科を増設した。

森村堯太氏の永眠

さる程に、共愛社當事者等は、其の體制を一層強化するの必要を感じたらしく、大正十二年十一月七日の理事會に於て、森村、半田、深澤、柴田四氏全員の一致せる決議に依り、理事を一人増員して五名とする事とし、直ちに主務官廳に其の手續をなし、且つ理事及び評議員等は増員理事たる

べき人物に就て内々詮衡してゐた。

然うしてゐる間に、理事長森村堯太氏は、同十一月下旬頃から腎臟病にて臥床せられ、醫療に手を盡されたけれども養生相叶はず、遂に十二月十日永眠された。享年六十一歳であつた。同氏は本校創立者の一人深澤利重氏と親交があつた關係から、創立後間もなくの頃から本校の經營に關與して共愛社の常議員となり、熱誠を以て盡力せられたので自然常議員等の間に於て重きをなされ、明治三十三年十一月社長を立つるに當り推されて第一代の社長となられた。大正二年二月共愛社の組織を整備して財團法人共愛社の設立許可を受くるや、改めて其の理事に選ばれ更に第一代の理事長に擧げられ、死に至るまで其の任に居られた。氏は、本校の經營と人事の最も困難であつた時代に、深澤氏等を助け後には其の中心となつて經營の衝に當り、三十年に近い歳月を始終渝らず、克く熱心に忠實に盡力せられ、其の間に於て本校が、家塾にも等しい覺束ない存在から堂々たる女學校としての形態を有つに至るまでに發展したに就ては、其の功勞の氏に歸すべきもの多大なりしを思はずにはゐられない。當時本校經營の基礎は森村氏初め共愛社幹部の努力に依つて漸く堅固になつて來てゐたといへ、學校としては尙ほ整備の時期に在り、氏の盡力に期待する所決して尠少ではなかつたと思ふ。氏を失つたことは學校全體の深き愁歎であつた。氏の葬儀は同月十五日執行せられ、本校からは職員生徒二十一名が代表として參列した。噫。

かくて、大正十三年一月八日の評議員會は、共愛社の柱石ともいふべき森村氏を失つて、まことに寂しく開會せられたのであるが、豫定に依つて増員すべき一名の理事に、佐波郡名和村字柴の森川抱次氏を選擧した。編者の臆測する所にして若し過ちなからしめば、森川氏の理事推薦に就ては

多少内部的な事情が伏在したであらうと思はれる。といふのは、森川氏は、佐波郡内での有力者であり、當時は縣會議員として本縣政客中の錚々たる人物であり、熱烈なる信仰の人であり、其の頃の共愛社として此の人を得ることは最も必要であつた。而して森川氏は、理事の一人たる柴田清策氏には親戚であり、理事長の森村氏とは親交の間柄であつた。森川氏が其の自叙傳に記す所によれば、森村氏は幾度か其の最後の病床に森川氏を招いて、共愛女學校の經營に參劃することを懇囑され、其の友情に動かされたとある。然もありぬべしと思ふ。死の病床に在つた森村氏が、學校の將來を思ひ熱情と誠實とを以て氏を説いた、それは否應なしに森川氏を奮起せしめた。評議員會の選舉は、然うした事共のあつた後の單なる手續上の一形式ではなかつたかと思ふ。兎に角當時の共愛社が森川氏を理事に參加せしめ得たことは、必要な時に必要な人を與へられたのであつて、全く天與といふべきであらう。

更に同月三十日には理事會を開いて、理事深澤利重氏を校主に推舉し、且つ故森村堯太氏の相續人たる令息森村堯太氏に社員たるの承諾を得る事を森川氏に托し、尙評議員會を催して同氏を嚴父の後繼者として理事に推薦することを議決した。而して、六月二日に評議員會を開いて、森村堯太氏の理事補缺選舉を確定した。之で漸く共愛社の陣容が整備された。斯うした間に、大正十三年四月には、生徒の父兄を以て結成された父兄後援會が誕生して、校内強化の一翼となつた。

文部大臣指定

大正八九年頃になると、本校も創立されてから三十二年にもなる、人ならば而立の齡を越えて二三年といふところである。歳々年々の怠らざる努力が報ひられて、内容外觀共に公立の高等女學校

と比較してやゝ遜色なきに近いものとなつて來た。そこで本校に於ても、内外から『専門學校入學無試験檢定』への要望があつた。大正九年一月及び同二月の評議員會は、其の問題を取り上げて協議し、それに關聯して修業年限延長の可否をも研究してゐる。それらの議は年々に熟して大正十三年二月二十三日に至り、本校創立滿三十五年にして、『本科卒業生ヲ専門學校入學者檢定規定ニ依リ高等女學校卒業ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト』指定されんことを熱求して、『受験ニ關スル資格指定申請』書を文部大臣宛提出した。

其の頃の本校は如何なる状態であつたかといふに、生徒は二百四十名（内譯一年八十八名、二年五十一名、三年五十二名、四年四十九名）の五學級で、教員は十二名であつた。入學定員は、從來五十名であつたが、大正十三年度から百名にする豫定であつた。大正十二年迄の卒業生は總數七百七十八名であつた。猶、敷地建物等に就て記述するならば、本校敷地の總坪數は一千八百八坪餘、建物の總坪數は六百十五坪であつた。今日から見れば、まことにお恥かしい様なものであるが、之でも當時としては相當のものであつた。

當時申請書に添付したる共愛女學校維持方法に關する書類は、本校を理解するに至極適當なるものと思はれるから左に其の全文を載録しておく。

本校ノ經費ハ授業料舍費其他學校ノ收入ヲ以テ支辨シ尙不足ヲ生ジタル場合ハ父兄後援會暨縣市ノ補助金ヲ以テ之ヲ補フ外賛助員ノ定額寄附及一般寄附ヲ以テ之ニ充テ來レリ、殊ニ本校經濟ノ樞軸トモ言フベキ理事會員ハ土地ノ資産家ニシテ本校ノ維持發展ヲ以テ己ガ精神的使命トスル人ヲ以テ組織セラル、故ニ基礎頗ル強固ニシテ動搖ノ虞ナキ事ハ創立以來三十八年ノ本校歴史ガ之

ヲ證シテ餘リアリト雖モ更ニ時代ノ進運ニ伴ナウ發達ヲ期セン爲メニ基本財産ヲ設ケテ本校ノ維持經營ヲシテ磐石ノ基礎ノ上ニ築カン事ヲ期セリ

以上の申請に對して、大正十四年四月二十五日附を以て、當時の文部大臣岡田良平氏より、同年三月以後の本校本科卒業生に對して、専門學校入學に關し修業年限四ヶ年の高等女學校卒業生と同等以上の學力を有するものと指定された。當年此の指定を得たことは、本校に取つて實に劃期的な事柄であつて、本校は之より一大飛躍を遂ぐべきであつた。

斯くて同年五月には、俊彙森川抱次氏が共愛社理事長に推されて本校經營の衝に當り、縣下教育界に於ける本校の位置もや、定まつて來たかに思はれた。

然るに、同年七月第一學期の終業と共に、校長柳田秀男氏が辭任して去られた。

半田多加子刀自

本校の歴史に於て半田多加子刀自の名を逸してはならない。上毛婦人レブタ會が生れたのも、同會が本校最初の敷地購入資金を寄贈したのも、引續いて同會が年々本校に特別寄附金を贈られることになつたのも、すべては同刀自に負ふ所である。刀自は、本校の爲には、個人的にも多くの援助を與へられてゐるが、今に至つて一々それを調べ上げることは出来ない。たゞ茲に、刀自の略歴を誌して、刀自を記念することとする。

半田多加子刀自は、天保十四年十二月十四日原市町に生れた。父宇平次翁を助けて、大店舗を經營したのであるが、店に來る客が『宇平次さんは』と云つて、若し翁のゐない時には往々にして其の儘辭し去るのを見て、自分の信用の足らないことを反省し、大に努力し修養して後には『お多加さんは』と云はるゝ様になり、克く其の店を切り廻された。又その父上、良人、一人娘、女婿等孰れも多病であつたが、克くそれ等を親切に世話された。半田家はもと禊教を。せられたが、偉人新島襄先生の説教を聽いて悔悟し、遂に基督教に歸依され、宇平次翁先づ入信し、亞而多加子刀自は明治十五年三月五日安中教會牧師村上俊吉氏より受洗して同教會信徒となられた。愛嬢くら子に激勵せられて、四十九才の時より特に熱心なる信仰の人となり、聖書と『日々の力』を愛讀した。或る日、其の家より出火し白煙濛々として家内に渦卷いた。家人等は狼狽したが、刀自は靜かに二階に上つて神に祈つた。終つて階下に下つた時には鎮火してゐたといふ。それ程信仰に徹した人であつた。刀自は又、勤勞を愛する人で寸時と雖も空費するを好まず、よく勤勞の快味を知つた。刀自が道を修め善に進まんとするの志は老いて益々旺んであつた、曾孫隆一氏を同志社に入學せしめんとする時には、積年の嗜好に打ち勝ち斷乎として禁煙された。斯の如きは常人の及び難い所である。刀自が縣下唯一の基督教主義女子教育の機關たる本校を支持し、上毛婦人レブタ會を通じて之を援助した事は當時としては一大貢獻であつた。然うした刀自の精神は、次代平次郎氏に傳はり、更に善四郎氏に傳はり、引續いて非常なる熱意と誠實とを以て、或は本校評議員として、或は理事として經營に力を效されて居る。若し半田家の盡力が無かつたならば、本校の經營は容易でなかつたと思はれる。斯して刀自は、立派な信仰の生活を營み、八十二才の天壽を全ふして、大正十三年八月十二日永眠された。

周校長時代

周再賜氏

九〇

新理事長森川抱次氏に課せられた第一の問題は、學校長の選定といふ難事であつた。森川氏は自己の責任と感じた事は如何なる難題でも征服せでは止まぬ熱と力の人であるから、共愛社の理事にならんと間もなく缺位になつた學校長の問題に就ても、時日移さず理事評議員等に諮り、又原市教會牧師柏木準雄氏と、東京靈南坂教會牧師小崎道雄氏に相談したところが、當時京都同志社大學文學部助教授周再賜氏が適任者であらうとのことで、柏木、小崎兩氏から紹介を受けたので、早速京都に赴き同志社大學神學部助手たる令息宅に滞留して、周氏と交渉して快諾を得、又同志社當局と折衝頗る努めて漸く此の事を確定し、大正十四年九月一日第二學期始業式には職員生徒一同に對して新校長を紹介し得たことは、實に大手柄であつたと思ふ。

周再賜氏は、明治二十二年七月六日臺灣阿緱(現今の屏東市)に生れ、長じて京都同志社に笈を負ひ、明治四十二年三月同志社普通學校を卒業し、亞で同志社大學神學部に入學し大正四年三月卒業するや渡米して、同年九月にはオーベリン大學神學部に入學し同七年五月卒業してパチエライ・オヴ・デヴィニテイの學位を受けた。こゝで氏は、轉じてシカゴ大學神學部に入り、一年の後マスター・オヴ・アーツの學位を得たが、攻學の念止み難き氏は、更に同八年九月ニューヨークのユニオン神學校の研究科に入學して宗教哲學を専修した。かくて同九年の夏にはカリホルニヤに赴きブラサ日本人會幹事となつて働いたが、翌年三月には歸朝して、直ちに翌月から母校同志社大學文學部

助教授の職に就き、次で專門學校神學部及び女學校專門部の講師を兼ね、本校の聘を受くる迄母校に於ける育英の事に専念せられたが、其の間大正十二年十月には日本組合基督教會の總會に於て教師の按手禮を領し、牧師たるの資格をも得られた。氏は、學識と人物と閱歷とに於て、縣下の他の女學校長と比べても、優るとも劣る所なき立派な人物であると認められた。殊に、其の卓絶せる實力と秀拔なる技倆とは、日月の經過と共に衆目の認識する所となつた。

こゝに、教育家としての周氏の勝れた人格の基底に、如何様なる反省と覺悟が有るかといふことを窺ひ知るべき一文がある。「學校とその教師」と題して共愛時報第五號に掲げられたものであるが、左に其の全文を収録する。

會つて或る女學校を參觀した時其の學校の教員の在任期間を尋ねて見たが、大抵一學期乃至一年間で、一ケ年以上勤続の者は極めて稀であるといふことであつた。學校管理に經驗のない私は、この(私にとつては)耳新しい事實をきかされた時、暫く言葉が出なかつた程吃驚した。成程人格の感化は時間を超越したものであらう、しかしさうぐる／＼變つては果して生徒に人格的感化を與へることを教師に期待し得るであらうか。これは極端な例ですが、或る女學校の或る學級に四年の間に英語の教師が八人交代し、校長が四人變つたと云ふに至つては、殆ど言語同斷の沙汰である。辭令一枚で官吏も公吏も教員も巡查も轉任させられ、時には無意味と思はれる様な異動が行はれるからして、社會も生徒の父兄も教員の異動に就て格別注意を拂はないのが常である。

しかしながら教師は出来る丈け同じ學校に長く留る方が望ましいことである。 그리스ウオールド

先生の如く三十年一日の如く教鞭を執つてゐらつしやるのは、わが校の誇の一つであると思ふ。卒業生が母校を訪問して舊師に會ふは何とも云へぬ懐しさを感ずる。蓋し教育を單に學校の教室に於て一定の年間に丈け之を限るは餘りに狭い。同窓生同士が一生の友であると同様に、師弟の間柄もいつまでも變らない筈のものである。懽みの時喜びの時、種々困難なる問題の起る時に、平生敬慕する所の師に相談すれば如何ばかり力づけられるであらう。尤も之には教師の自覺と絶えざる修養努力進歩、否信念がなければ出来ない。自分の拙き経験を申せば、私は小學時代、中學時代、大學時代にそれ〴〵敬慕する所の恩師を有ち、現今も尙其の教師達をば敬慕措く能はざるは、わが一生の大なる祝福であると考へて感謝に堪えない。敬慕すべき恩師を有つは學窓生活の大なる賜の一であるならば、之を有たないで卒業するは最も不幸なこと、云はねばならない。かく考へると、教師の職は極めて吞氣さうにして又愉快な方面があると同時に、その使命をよく果すは容易な業ではない。絶えざる勉強と修養と苦心が要る。或る人の話に、教師の中で中等學校の教師程不眞面目の者はないと。吾等は必ずしもさうとは思はない。専門の學校では生徒が相當に批評眼を有つて居るから、教師はうつかり出来ない。又小學校では組織や監督機關が整然として居るから、たとへ時には機械的に流れても兎に角各々よく其の義務をつくす。ひとり中等學校は恰も中間に位し割合に融通がきく處を見てかく云つたのであらう。併しながら中等學校時代は、生徒の心身發達の最も著しく思想感情習慣の養成に最もよい時であつて、木當に人間としての教育の最も有効に行はれる時代である。若し中等學校の教師が靜かに生徒の事を思ひ、自らの使命の重大さを考へるならば、決して安閑吞氣で居れるものではない。

眞に教育殊に中等教育は困難な仕事である、教師に望むことも亦多くあるが私は今試みにその二三を挙げやう。第一に教師は理想がなくてはならぬ。理想を目標にその生徒を導かねばならぬ。理想に到達しようとする努力には自然に信仰を必要とするのである。第二に教師は學識が勝れてゐなければならぬ。それと共に常識に富み、學理と實生活との交渉を生徒に示すことも大切である。第三に教師は公平でなければならぬ。公平は冷靜にものを判斷する習慣によつて養はれるものである。その他健康、天真、謙遜の如きも必要なる條件である。しかし理想、學識、公平の三者を兼備せば良教師たるを失はない。斯る良教師を有する學校が即ち良き學校で、設備は第二であると云つて差支ない。されば學校は良教師を得るために全力を注ぐべきもので、それと共にその教師を優遇するの途を講ぜねばならぬ。歐米の大學に於ては良教師一人を聘せば學生が増し、之を失へば學生が減ずるのが常である。機械的教育にあき足らざる我が國に於ては、正しく人格教育の盛んに唱道さるべき時機が到來しつゝあるを思ひ、學校はその教師の人格的感化を期待し、長らく在任せんことを望み、その途を講ずべきものである。又教師はその學校の爲にすべてを捧げるに至つて、初めて教育の効果が現はれるものと信ずる。(大正十五年十二月一日)

周氏が其の後の實生活を見れば、氏のこの主張が氏自身の反省であることを首肯づくことができ。氏は、不幸にして子女を有たれないから、家族は夫人と二人きりであるが、其の大家族を學校の中に打ち込み、夫婦共々學校自體を自分等の生活として、生徒等の訓育指導と學校の經營とに任じ、文字通りの總力生活を營まるゝに至つた。然うして、氏が校長の椅子に着かるゝと共に、本校はやゝに其の面目を一新して來た。

一體、人事は實に闇引の様なものであつて、適所に適材を得るといふことは容易でない、餘程綿密な調査をしても彌々實地に當て箝めて見ると意外な事があるものである。然るに周再賜氏は、恰も本校の爲に準備された様な人物であつて、曩に森川氏を共愛社の理事長に得た本校が、茲に周氏を校長に迎へ得たことは、是亦當に神與といふべきであつた。此の校長の就任に際しては、森川理事長の全校に對する紹介があつたばかりで、改めての就任式も舉行せられなかつたが、新校長は、そんな事には一切拘泥せず、其の素晴らしい實行力を以て自己の椅子を生かした。間もなく全校が此の人こそは吾等の校長であるとする様になつた。否、校内ばかりでなく、校外の同窓生たちも母校の校長に此の人有りとなつたと認識した。

會の整理と共愛時報發行

從來本校には必要に應じて様々の會が設けられ、其の儘繼續されて來たのであつたが、新校長の就任と共に『校内諸種の行事を敏活にし、且つ秩序を一層よくする爲に』是等を整理する必要があつたので、先づ校友會を解散して、十月から新たに『共愛女學校學友會』なるものを組織し、左の如き規則を制定し、直ちに活動を開始した。

共愛女學校學友會規則

- 第一條 本會ヲ共愛女學校學友會ト稱ス
 第二條 本會ハ本校設立ノ精神ニ從ヒ校風ノ發揚ヲ計リ會員ノ智徳ヲ養ヒ身體ヲ鍛ヘ併セテ御互ノ交誼ヲ厚クスルヲ以テ目的トス
 第三條 本會ハ本校在學生ヲ以テ正會員トナシ現在職員ヲ以テ特別會員トス

第四條 本會ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ四部ヲ置ク

運動部 藝術部 購買部 庶務部

各部細則ハ別ニ之ヲ定ム

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名 副會長一名 部長四名

會計一名 幹事若干名

但時宜ニ依リ評議員若干名、委員若干名ヲ置クコトヲ得

第六條 副會長以下各役員ノ任期ハ一學年トス

但再選スルコトヲ得

第七條 本會々長ハ本校々長ヲ推舉ス

第八條 副會長、部長、會計ハ評議員會ノ推選ニ依リ本校職員中ヨリ會長之ヲ依囑ス

第九條 幹事及委員ハ生徒中ヨリ選舉ス

第十條 會長ハ本會ヲ總理シ總會又ハ役員會ヲ召集ス

第十一條 副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故在ル時ハ其職務ヲ代理ス

第十二條 部長、會計、幹事ハ各其事務ニ當ル

第十三條 本會役員ハ總テ名譽職トス

但役員會ノ決議ニヨリ年度末ニ會計ニ若干ノ手當ヲ呈スルコトヲ得

第十四條 本會々務ノ爲メ出張スルトキハ實費ヲ支給ス

第十五條 本會ハ毎年三月ニ總會ヲ開キ當該年度ノ會務ヲ報告シ次年度ノ豫算ヲ決定シ且役員ヲ改選ス

但必要在ル時ハ臨時總會ヲ開ク

第十六條 正會員ハ毎月(八月ヲ除ク)會費三十錢ヲ納ムルモノトス

第十七條 特別會員ハ本會經費中ニ應分ノ寄附ヲナスモノトス

第十八條 各部經費ノ豫算ハ役員會議之ヲ立案シ總會ニ提出スベキモノトス

第十九條 本會ノ規則ヲ變更セントスルトキハ役員會ヲ開キ役員總數三分ノ二以上ノ同意ヲ得テ之ヲ總會ニ提案ス

猶本校内には従前より二葉會と愛隣會とがあつて、既に記述した様にそれ〴〵其の目的達成の爲に活躍して來たが、以上の通り學友會が組織されると、其の十月三十一日限り是等を廢止し、『其の事業は一切學友會購買部で處理する事』とした。之で學生達の會が一本立になつた。

次に、教職員等の間に一つの新しい會が生れた。それは共愛互助會と稱するもので規約を左の如く定め、直ちに實行した。

共 愛 互 助 會 規 約

第一條 本會ヲ共愛互助會ト稱ス

第二條 本會々員ハ毎月金五十錢ヲ獻出シテ職員ノ親睦、送迎、慶弔ノ費ニ充ツ

第三條 本會ハ會長一名、幹事若干名ヲ置ク、幹事ハ會計一名ヲ互選ス

第四條 役員ハ會員ノ互選トス、但任期ハ一學年トス

第五條 本會經費支出項目左ノ如シ

一、慶 弔

(1) 會員中結婚スルモノアルトキハ祝金拾圓ヲ贈ルコト

(2) 會員中永眠者アル時ハ其遺族ニ弔慰金拾圓ヲ贈ルコト

(3) 會員中子女ノ出産アリタル時ハ祝金五圓ヲ贈ルコト

(4) 會員中家族(父母妻子)ノ永眠者アル時ハ弔慰金五圓ヲ贈ルコト

二、送 迎

會員中退職者アル時ハ餞別金五圓ヲ贈ルコト、但在職一學年未滿ナル時ハ贈ラズ

退職、新任者アル時ハ送迎會ヲ開ク

三、親睦會

年一回以上懇親會ヲ開クコト、但時宜ニヨリ送迎會ヲ兼ヌルコトアルベシ

四、其他病氣見舞又ハ臨時ノ場合ハ役員ニ一任ス、本規約ニ依リテノ贈呈ニ對シテハ返禮セサルモノトス

第六條 醸出金ハ銀行へ預ケ置クコト

斯くて同年十二月十日になると、本校内外の連絡機關として『共愛時報』第一號が發刊された。非賣品で一ケ年三回發行の豫定であつた。其の『發刊の辭』には『校内の出來事、其の他必要なる事柄を同窓生、社友及共愛女學校の緣故者、同情者に報道し、以て協力同心此の教育事業完成の爲め互に興味を咬すことが必要であらうと思ひます』と書いてある。

大正十四年十一月十日の現在生徒数は總計二百七十二名、内通學者百九十九名、寄宿生七十三名であつた。

生徒の服裝は、此の頃は未だそれ程嚴格には一定されて居ず、和洋いづれでも本人達の便宜と好みに任せられてゐたが『和服は華美に流れない範圍のものを着用すること』が注意され、大正十四年には夏服は『學校制定の夏洋服を着用すべきこと』が勧められてゐる。けれども實際には、大正十四年にはまだ和服の方が多かつたやうである。而して大正十五年四月の『新學期より漸次洋服を制服にして採用致す方針』であると發表したが『俱し型式、品質、色合は學校にて之を指定致しませす』といつた程度で新學期に入つてゐた。生徒の制服のことは、斯うした儘で年又年と過ぎた。

詮衡方針の發表と維持會

大正十五年の春の生徒募集は、周校長就任後最初のものであつたが、其の二月になると校長は、『本年度入學者詮衡方針』を發表して、學校當局としての態度を明示した。それによると

目下我が國に於て年々入學期に際し多くの父兄や子女が入學難に頭を悩まされ、多くの悲しむべき事柄の生ずるは、教育に従事して居る者の殊に不快に感ずる所である。此の入學難を救ふべき道は學校を増設するか、社會の教育に對する觀念を換へるかの二途を取るにあらざれば徹底的解決は望まれない。入學準備の弊害は識者の等しく認むる所であるが、さればとて選抜試験の必要が存する限り如何なる方法を以て矯正を試みても一長一短ありて結局五十歩百歩の類である。

併しながら吾人は現狀に満足して居る者ではない。徹底的解決法が講ぜられる迄、せめては入學詮衡の方法をば出来る丈改善し、入學志望者をして無益有害の競争を避けしめるのは教育者の義務であらう。

務であらう。

此の見地からして本年度に於ける我が校の入學者詮衡法を次の如くに致したい考へである。

一、小學校の成績

二、國語、算術について行ふ試験

三、人物考査

右の三者を各々百點を滿點とし、其の得點の合計を三で割つて得た平均によつて及否を定める。第一は出身小學校長の成績證明書に依つて之を採點し、第二は國語及算術について尋常六年程度の簡單なる試験を行ひ、而して第三の人物考査は學校が一人々々別々に保護者立合の上、その健康状態、言語、態度、家庭等を考査するのである。

此の方法に依れば世間に行はれて居る特別な入學準備が全然無用で、寧ろ小學校の日々の課業を忠實に勉強した方が第一と第二の條項を同時に満足せしめることが出来る。入學試験を爲すに當つて受験者をして成るだけ恐怖心を去らしめ實力を表はし得る様に試験場の設備に多大の注意を拂ひ、試験監督者は出来る丈親切丁寧な受験者を取扱ふ様に致したい。

尙附加へたいことは、本校の卒業生の子姉妹、親戚の方々が多數入學志望せられんことを切に望む。

かうして自らの意圖を卒直に暢べて、肉弾を以て打突かつてゆくのが、周校長の眞面目である。斯様にして生徒招致の方策を講じたが、同時に學校自體の維持擴張の方法も計企された。そこで大正十五年四月には共愛女學校維持會を設け、『校舍、寄宿舎、講堂を改築し、備品を完全にするため

資金を募集し以て校運の發達進歩を期する』事とした。同會の趣意書並に規約は左の如くであつた。

共愛女學校維持會趣意書

わが共愛女學校は創立以來終始一貫精神的教育を標榜し種々の困難と戦つて参りました、幸に諸方の御同情に依り漸々と發展の新氣運に向ひつゝあるは感謝に堪えませぬ。

然れども日進月歩の我國女子教育機關の間に伍して遜色なきのみならず益々其の特色を發揮して行かねばなりません。これには當事者を始め同窓生緣故者は云ふに及ばず、一般同情者の協力を仰がなければ出来ませぬ。現在に於ては校舎を始め標本機械に至るまで極めて不完全で一大改良を加へなければ教育の目的を十分に達成することは困難であります。

されば此の度有志相計り共愛女學校維持會を組織し、校舎、寄宿舎、講堂を改築し、備品を完全にするため資金を募集し以て校運の發達進歩を期する次第であります、何卒此の事業助成のため御加入下さる様切に御願申します。

共愛女學校維持會規約

- 第一條 本會ヲ共愛女學校維持會ト稱ス
- 第二條 本會ノ目的ハ維持員ヲ募集シ以テ共愛女學校ノ發展ヲ期スルニアリ
- 第三條 本會ノ事務所ヲ前橋市岩神町共愛女學校内ニ置ク
- 第四條 本會ノ釀金ハ年額一口六圓トシ三ケ年間繼續スルモノトス
- 第五條 本會ノ趣旨ヲ賛成シ第四條ノ釀金ヲ一口以上ナスモノヲ會員トス
- 第六條 會員タラント欲スルモノハ釀金ノ口數ト拂込方法ヲ明記シ本會ニ申込マルベシ

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名 幹事長一名 幹事若干名

第八條 會長ハ會務ヲ總轄シ會長事故アルトキハ幹事長之ヲ代理ス

幹事ハ會務ヲ處理スルモノトス

第九條 本會ノ役員ハ總テ名譽職トス

但時宜ニヨリ有給事務員ヲ置ク事ヲ得

第十條 會長ハ毎年會計其他重要事項ヲ會員ニ報告スルモノトス

第十一條 本會々員釀出金ノ用途ハ特ニ指定サレタルモノノ外共愛社理事會ノ決議ニヨリテ之ヲ定ム

第十二條 本會々長ノ選舉ハ理事會之ヲ爲シ幹事長以下ハ會長之ヲ委囑スルモノトス

此の會の設立と共に、校長も理事も會員の募集に熱心に努力されたが、幸に續々申込があり目的は漸々に達成されて行つた。

學校と其の卒業生

大正十五年九月十八日發行の『共愛時報』第四號を見ると、『學校とその卒業生』と題する校長の物された一文がある。それは、月日の経過と共に本校内外の事情に通曉して來られた周校長が、同窓會對する指導方針とも見るべきものであるから、左に其の全文を採録する。

何人もその家を愛し、之を慕ひ、その隆盛を希はないものはなからう。その如く卒業生は其の母校を愛し、之を慕ひ、その隆盛を希ふのみならず、これが爲に應分の貢獻を惜しまないもので

ある。殊に私立學校に在りては、その卒業生の愛校心が、母校の發展に甚だ大なる關係あるは、今更申すまでもありません。

勿論愛校心は、學生が其の教師、先輩、學校生活の印象によつて知らず／＼の中に涵養されるもので、技巧的にわざとらしく造られるものではない。それ故一般に私立學校の卒業生が特に母校を愛するは、蓋し師弟の隔てなきことや同級生學友相互の親しみが然らしむる所であらう。私立學校の成績は單に學生數や設備によつて之を量るべきものでなく、實に其の卒業生が學校を慕ふの強度と同窓生同士の終生變らざる友情の深淺によつて評斷さるべきものであらうと思ふ。母校に對する愛慕と同窓の友情こそ、實に人生の怒濤に於ける救の舟であり、世事情常なき沙漠の中の獨り旅の如き思ひをなすときの慰めの星とも云ふことができるであらう。

私は近頃つとめて古い同窓生を訪問し、共愛女學校の昔の様子をきくことにして居るが、大抵の古い卒業生は異口同音に在學時代の楽しき追憶を語られ、殊に寄宿舎生活が如何にも印象深く故須田夫人は又多くの人々の記憶の中心になつて居るのをきいて、これならば共愛女學校は確かに社會に對して何ものかを與へて居ると感じ、意を強くする次第である。

わが校は斯くて過去に於て社會に對し立派な貢獻を爲した、これが現在の教職員と生徒に取りての大切なる背景であり感激である。美しい歴史を汚さないばかりでなく、益々花を咲かせ實を結ぶ様にせねばならない感が現在の學校内の空氣である。勿論吾人は、時勢の相違あることを無視するわけにはいかない。一組の生徒が七人が十人の時代と一學級四五十人の時とに於て、全く同一の態度と御互の親密さを期待するは無理であるが、共愛女學校の爲にと云ふ一つの目標に向

つて進むことは、今も昔と變らぬ様にしてゆきたい。

學校を卒業して家庭を持ち子女ができて、朝から晩まで家事に職業に忙殺され、學校を愛する念は變らないが、如何しやうとも方法がないとの訴へをきく。成程尤の話である。そこで私は、何人も母校の爲に盡し得る三つの事を擧げて見たい。

(一)子女を母校に送ること。共愛女學校には二代目の方が少なくない。母親が卒業生で、其の子供も同じ學校に學ぶことが、既に大なる教育である。『之がお母さんの學んだ學校』と云ふ意識は、どれ位子供の精神をゆかしく感ぜしめるであらう。『お母さんも昔此の寄宿舎で食事をし、此の講堂で毎朝讚美歌をうたひ、こゝでお祈りをした』如何なる修身の材料も之に及ぶものはない。

(二)不幸にして自らの子女なき方は、知人や友人の子女を共愛に送る様に勧誘すること。

(三)母校の爲に祈ること。母校の爲に祈る同窓生なき時は、即ち共愛女學校の精神的に滅亡した時である。如何に外形が立派になつても、それはミイラである。母校の爲に祈る同窓生がなくなることが、最も恐るべきことである。

以上の三つは大抵の人にとりて出來得ると信するが、更に時間と費用が自由な人には、次の二つを望むものである。

(四)母校を訪問すること。知つた教師がゐないと云ふのが、殆ど何れの方にも母校を訪問しない理由になつてゐるが、私の願ひたいのは母校を訪問することで、古い先生を訪問することではない。母校を訪問する場合に知つた人が居て歓迎してくれると然らざるとは、感興が違ふのは當然である。若し出來れば來年三月卒業式當日に開かれる同窓會總會には、卒業後十年、十五年、二

十年、二十五年、三十年、三十五年のクラスがそれ／＼再會を期して、出来る丈け出席せられんことを希望する。

(五)相應の物質上の援助をせらるゝこと。これは説明も何も要らない極めて必要なことで、前號の共愛時報第一頁に、私はそのことを力説したからこゝで繰返しませぬ。

終に、私は母校に於て、毎朝授業前の禮拜、この他總ての式、すべての催しや會合に同窓生の御來席を大に歓迎することを附加へて此のペンを擱く。(八月三十日)

斯うした指導の下に在つて、同窓生と學校の間が親密の度を加へ得たことは申すまでもない。周校長が就任されて未だ歲月を閲せざるに、早く既に母校の校長たることは卒業生たちの凡てに認識せられ、古き卒業生たちまでもが校長を慈父の如くに仰ぐに至つた。そればかりでなく、母校に對して限りなき親しみと深き懐かしみとを有つようになつた。

然うした同窓生たちが愛校心の一つの表現として、同窓會主催の活動寫眞會を昭和二年二月二十二、二十三兩日前橋に於て開催し、引續き二十四、二十五兩日は高崎に於て開催した。其の時の前橋の模様を共愛時報に報告されてゐるのを抜萃して見ると。

少しでも母校の負擔を軽くしたい。

私達の出来るだけの力を注ぎ、少しでも母校に御恩返しが出来たらこれ程のよろこびはない、小さくはあるけれどこの働きが偉大なる母校建設の上に、わづかでも役立つのであつたら、それはまあ何と云ふよろこばしい誇りだらう

さうした希望にみちみちて過去幾度か經驗のある活動寫眞を開催することに決定したのは昭和

二年の始めである。

古參の同窓生の「成功疑なし」と云ふ意氣込に對して、世は諒闇であり、又數年來の不景氣の雲は今年になつて一層色濃く全市の上にうづまいてゐるのである。

かうしたことが多少の不安をともしなつたが、ひたすら神の加護と自己の力とを信じて猛進する私達には、それらのものとても路傍の何物でもなかつたのである。

幾度も幾度も相談會は開かれ、其都度仕事は具體化して行く、開會期日は二月廿二、三兩日、會場は少しでも多くの人々を入れる様に一番廣い前活館が選ばれた。

かうしてよいよ切符賣りに着手したのは二月九日である。

生徒始め市内同窓生に一齊に切符は配付され、これから火花をちらす様な活躍振りはみられるのである。

同窓生は勿論のこと、一年二年の小さい生徒達までが短かいスカート裾さばきも軽く、我が校の爲には寒さもものかはと、毎日街のすみからすみまで歩きまわつて疲れもおぼえぬ程に緊張してゐる。

街の要所々々に『海の野獸』の廣告びらを見出した時の嬉しさ！なつかしさ！よろこばしさ！私達の心は飛上る様だつた。

遂に其の日は來た、今迄の働きはおしよせる群衆の上に現はれ、二日二夜の館内は到る所人の海と化した。云々

一同の熱心な努力の結果は報ひられて、此の催しは前橋も高崎も大成功で、純益金は八百七十四

圓六十六錢に達した。かうした働きの結果、校舍建築資金の中へ、同窓會會計から金二千圓也を寄附して來た。これは實に有難い事であつた、其の金額の如何と云ふよりも、然うして働いて寄附された心を、まことに尊いものに感じられたのであつた。

施行細則の制定

大正十五年九月二十一日の理事會に於て、共愛社寄附行爲施行細則を左の如く決定した。

財団法人共愛社寄附行爲施行細則

- 第一條 理事ノ選舉ハ共愛社寄附行爲第十八條ニ依リ之ヲ行フ
- 第二條 評議員ノ選舉ハ共愛社寄附行爲第十三條及第十四條ニ依リ之ヲ行フ
- 第三條 社友ノ選舉スベキ評議員ノ選舉ヲ行フトキハ理事會ニ於テ各倍數ノ候補者ヲ定メ其ノ氏名住所及略歴等ヲ投票締切期日四週間前ニ各社友ニ通知ス
- 第四條 共愛女學校卒業者ノ選舉スベキ評議員ノ選舉ヲ行フトキハ同窓會ノ役員會ニ於テ各倍數ノ候補者ヲ定メ其ノ氏名住所及略歴等ヲ投票締切期日四週間前ニ各共愛女學校卒業者ニ通知ス
- 第五條 評議員ノ選舉ニ當リ理事長ハ選舉立會人三名ヲ選定シ選舉ニ立會ハシム
- 第六條 左ノ投票ハ之ヲ無効トス
 - 一、記名調印セザルモノ
 - 二、投票締切期日中ニ到達セザルモノ
 - 三、所定人員ヲ超過シテ記載セルモノ
- 第七條 選舉者ハ候補者以外ノモノニ投票スルコトヲ得

共愛館新築

校舍と敷地といふ問題は、寢ても覺めても本校當局の頭腦を壓してゐる、斷えず伸びんとする成長さかりの本校に取つて、それは必然の問題である。機會さへあれば、如何様に無理をしても敷地を擴げ、校舍を増築し設備を完全にしたいのである。

大正十五年三月には、幸にも隣地二百八十四坪を購入することが出來た。而して、其の以前から懸案となつてゐた新校舍建築の議が漸く具體化して來た。

大正十五年七月三十日の理事會に於て、『校舍改築ノ件、木造二階建四教室一棟、豫算約一萬圓、今秋起工』と決議したが、それは其の儘實行するにはまだ問題があつたらしく、同年十月十一日の理事會に於ては之を修正して『校舍改築ニツキテハ某氏ノ寄附ヲ受ケ入レ鐵筋コンクリート建ニ設計スルコト、可決』となつてゐる。而して之が實行案となつて、十二月十七日には彌々起工した。

ところが、此の日、聖上陛下には御病篤しと洩れ承り、朝禮に於て一同、陛下の御平癒を祈り奉つた。殿上におかせられては、名醫が有らん限りの智能を蒐めて御治療申上げたにも拘はらず、遂に力及ばず、同月二十五日に御崩御遊ばされ、大正天皇とお呼び申上げる事となつた。御治世僅かに十五年、まことに傷ましき極みであつた。當日午後一時から校内で奉悼式を執行した。御大葬は翌昭和二年二月七、八兩日執り行はせられたので、謹で休校し、七日には午前十時から校内に於て遙拜式を執行し、悼惜の誠意を表した。

かゝる次第で、國內は諒闇のうちに新年を迎へたのであつたが、其の一月十七日には共愛社理事柴田清策氏を失ひ、校内は更に憂愁の情を深くした。氏は、大正十年理事に就任されて以來、當時

の理事長森村堯太氏を助けて、本校経営の最も困難であつた時代に於て、理事の中堅として努力せられた。氏は、前橋に居住せられた關係から、何かと克く學校の世話をされた。殊に、森村社長永眠後は、殆ど本校経営の重任を一身に負うて努力された。且つ本校々醫としても、大なる助力を與へられた。かくも本校事業に對して多大の力を致された氏ではあつたが、遂に持病の喘息が昂じた爲に五十二歳を一期として天上に移られた。老年といふ程でも無かつたのに、まことに惜むべきこととて。本校としても、有力なる後援者の一人を失つて、轉た惜別の至に堪えない。

柴田氏の永眠に仍つて缺員となつた理事の補欠に就ては、かねて詮衡の結果昭和二年二月二十日の評議員會に於て、澁川教會牧師栗原陽太郎氏が満場一致を以て當選就任された。

其の頃、安中教會の金蘭青年會は、本校の現状と將來に對して深く同情を有たれ、熱心に祈ると共に同年二月中旬周校長に宛て懇切なる手紙に添へて、會員の醸金三十圓四錢を校舎建築費に寄贈せられ、且つ上毛諸教會に宛て下記の如き依頼状を送り、本校に對する好意を表せられた。

愛する貴教會の兄姉に訴ふ

神の聖旨に成る本縣下唯一の精神的女子教育機關たる前橋共愛女學校は創立以來三十年幾多の困難と闘ひ少なからざる貢獻を我上毛に爲し來り今や一大進展を爲さんとする時に當り財政上非常なる難局に遭遇し再び得可からざる周校長は寢食を忘れて憂慮し旨に健康を損せらるゝやの虞さへ有之と聞き我等主に在る兄弟は微力乍ら我等のすべてを捧げて神の聖旨たる此事業に盡すことに致しました、されば我等の愛する兄姉よ此事に就て我等と共に熱烈なる祈禱をさゝげて各自その持場にあつて主の聖旨の爲に全力を御注ぎ下さるやう切に御願ひ致します。

昭和二年二月十一日

安中基督教會 金蘭青年會

上毛各教會 御中

此の反響が何うであつたかは、文献の徴すべきものが無いから判明しないが、たゞ金蘭青年會が斯した深甚の好意を寄せられた事だけは、深く感銘してゐる。

かうした間にも、客臘起工した校舎の建築は順調に進捗してゐた。栗原理事は、此の建築資金の募集委員として、一月二十六日附知事の許可を受け、向ふ五ヶ年間に三万圓募集の目的にて、各方面に寄附を求めて活躍された。六月二十八日の理事會は、當に竣工せんとする校舎に、『共愛館』と命名することを決議した。七月には建築落成し、八月には内部の設備も完了したので、九月一日第二學期の始から使用した。新校舎は、間口二十二間、奥行五間一尺五寸、高さ三十尺、一階と二階の延坪數二百三十五坪、内部には八教室あり、屋上は運動場で、當時の本校としては、實に堂々たるものと思はれた。しかし、斯うした建築の背後には、理事は勿論であるが、校長の一方ならざる苦勞のあつたことを銘記しなくてはならない。

九月一日始業式に於ける周校長の訓話の一節に曰く

大正十五年十二月十七日に起工された共愛女學校新校舎共愛館は本日を用ひて使用されるに至つた。此の建物は僅かに八教室を有し、工事費設備費二萬三千圓に過ぎないが、共愛女學校に取つては此の校舎の建築完成は一つの奇蹟と云つてよい位である。一年前に何人も一年後の今日共愛女學校の生徒がこの立派な新校舎の中で授業を受けることは夢にも思はなかつたであらう。これ

には理事諸氏の苦心と決斷、請負者井上保三郎氏の義侠、共愛女學校の緣故者の努力、社會一般有志の同情等大に與つて力あつたことは勿論であるが、吾等は神の導きが豊かであつたことを感謝せねばならぬ。財界不況の今頃募金を爲すは容易ならぬことで吾等は募金委員長栗原陽太郎氏の勞を多とする者である。しかしながら困難は寧ろこれからが一層甚しいかと思ふ。請負人に對し工事費の中一萬數千圓の未拂は來年三月迄に之を決済せねばならぬ。のみならず特別教室、寄宿舎、講堂等順次改築するの必要に迫り又備品教具の充實も焦眉の急である。此等の完成に對して理事を始め同窓生、在校生の父兄又一般有志が必らず吾等を援助して有終の美を爲さしめると信するが、職員生徒も亦此の改造時代の共愛にあつて一致協力を以て學校を愛し新校舎の美しきが如く美しい精神を以て日々の務を完うせねばならぬと思ふのである。新校舎の落成は我が校に取りては一新時期を劃する事件である。生徒に取りてはまことに喜ばしきことであり幸福であるが、之に對する責任と自覺も亦一層大きくあらねばならぬ。

斯して、新學期の授業は、新校舎で始めたが、九月九日に開かれた理事會は、此の共愛館の落成式を十一月三日の明治節に舉行する事に決定し、準備滞りなく彌々當日になると、式は午前十時半から周校長の司會で、森川理事長が式辭を暢べられ、建築の経過報告は栗原理事によつて成され、縣知事閣下の告辭があり、まことに盛大であつた。當時共愛時報に報告された『落成式の記』には左の如くしるしてある。

十一月三日 明治大帝の御盛徳を稱へ奉る此の佳節に、更に加へて共愛館落成のためたい式が擧げられた。

麗かな秋晴の一日、美しく掃き清められた校庭、碧空に翻る萬國旗、聳えたつ此の大建築、喜びに溢れた人々の顔、はては雀の囀まで、すべてが幸福そのものの様な中に、又何とも云へぬ涙が油然として胸に傳はる。今日の此の佳き日を迎へるために、そして此の萬國旗の靜かに秋風に翻る中に、どれだけの苦闘と、どれ丈の犠牲と、どれ丈の信念と、祈りと努力とが語られて居るであらうかと思ふ時、誰か又一掬の涙なくして此の喜びに浸り得るであらう。唯無一物から全く今日の此の擧のなされた事を思ふ時、尊い威壓が胸に迫つて敬虔な緊張に心が震へる。

九時過からポツポツと來賓が見えられる。門の國旗が喜びを囁いてゐる。何の爲めか今日あけられる町の煙火のそれとないのに、此の祝ひの爲の如くに嬉しい。『御目出度ございます』と來賓からおつしやられると、『まあ御立派に御成人なされました』と子供の成長を賞讃された母の心の様に胸が躍る。市長代理の方も見へられる。自動車のけたたましい音と共に知事閣下も見へられて、場内は又更に喜びの度を加へる。市の有志、地方の有志、生徒の父兄、はては何々と受付の忙しさ。かうして太陽は大分高くなつた。十時半、愈々一同會場に着席、校長先生の司會にて式が始められた。

先づ第一に藤卷咲子姉の奏樂、靜かな樂の音に人々の心は喜びと敬虔と嚴肅との錯綜した感慨に閉される。次に一同讚美歌をうたひ、青柳新米氏の聖書朗讀並に祈禱、栗原陽太郎氏の建築報告及び請負者井上氏への感謝の辭が送られた。苦しい建築の過程を思ふ時、當事者の御苦心と又それ丈に美しい愛の氣息が窺はれて頭がさがる。次に聲樂家奈良春枝女史が特別今日の日を祝はれてアベマリアの獨唱をなすつて下された。朗かな御聲が堂中に溢れて美しい旋律が會衆の心を

果しない恍惚の境に運ぶ。かうして又式はプログラムの順序を追うて森川抱次氏の式辭、一二年生の合唱、知事閣下の告辭に移つて一同起立、今日の喜びを衷心から御祝ひ下さると同時に、猶將來に多くの望を持たせられる由を懇々として述べられ、私共も亦御言葉に背くまじく心に誓ふ。次いで前橋市長代理、父兄後援會代表として横川良助氏、同窓會代表として松宮しん姉、上毛基督教婦人會代表として半田かく姉等諸氏から祝辭を述べられる。皆様の衷心からの御祝ひと御勵ましの御言葉とを戴いて生徒の心は生々とした底力のある興奮を感ずると同時に共愛女學校が實によい後援者、同窓生、周囲の多くの方々の力強い祈りと鞭撻とに守られて居る事に心から感謝しないわけにゆかなかつた。それから一二年生の合唱、兩毛組合基督教會代表として柏木義圓氏の祝辭、言々句々皆の心に喰ひ入つて精根を奮ひ立たせずにはおかないその御熱心と眞心、精神的教育を目的として雄々しく、しかも根強く、世の浮華と戦ひ、輕佻と争うて、地上に理想郷を建設させなければならぬ責任を負ふ私共である事の自覺を更に深めさせて下さつた。其の他有志者祝辭として青木山平氏より御懇篤な御祝の御言葉を戴き、ついで一同頌榮を歌ひ終つて堀江彌八氏の祝辭、最後に深澤利重氏が挨拶を述べられて午後零時過ぎ此の長時間をさしたる倦怠の色もなく嚴肅裡に會は閉ぢられた。

此れより先共愛館露台に退いた聖歌隊は、會場の出口で心ばかりの祝ひの粗品を受け取られて出でられる來賓を美しい讚美歌の音によつて迎へる。

猶用意してあつたお食堂で御晝食をとられる方もあり、生徒職員は更に會場の後かたづけ、掃除等をなし、皆が眞摯な心と又今日の日を迎へるまでの校長先生の擔はれた御辛勞に對して感謝

をしつゝ、家路に急ぐ頃は、西に傾いた短かい秋の午後の日脚が斜に、そして靜かに共愛館を照して居つた。

因に本日の主なる來賓は知事閣下を始め、市長代理、警察署長、鈴木前橋高等女學校校長、高津仲次郎氏、井上保三郎氏、堀祐平氏、青柳新米氏、柏木牧師、その他官民有志父兄後援會員、同窓會員等無慮三百人程であつた。

猶、滿腔の好意を以て此の建築を請負はれた高崎の井上保三郎氏に左の如き感謝狀を贈つた。

感謝狀

夫レ教育ノ効果ハ教育者ノ學識人格ニ由ルト雖校舍教具ノ整備ニ至大ノ關係アルハ言ヲ待タズ四十年ニ垂ントスル歴史ヲ有スル我共愛女學校ハ將ニ新生面ヲ開カントシテ鐵筋混凝土永久的校舍ノ建造ヲ計畫スルニ際シ貴下ハ義俠的精神ヲ以テ工事請負ヲ快諾セラレ大正十五年十二月十七日起工以來技術者ヲシテ銳意其局ニ當ラシメ遂ニ豫定ノ如ク竣工スルニ至レリ而シテ其構造ノ堅牢ニ加フルニ外觀ノ美ヲ以テシ且工費ノ低廉ナル何人モ感嘆稱讚セザルハナシ惟フニ此ノ共愛館ノ完成ハ共愛女學校ノ教育能率ヲ増進シ益其特色ヲ發揮セシムルニ至ラン女子教育上貴下ノ貢獻又大ナリト謂フベシ本日落成式ヲ舉行スルニ當リ謹デ感謝ノ意ヲ表ス

昭和二年十一月三日

財團法人共愛社理事長
群馬縣々會議員

森川抱次

共愛女學校校長
マスタラー・オブ・アーツ
パチエラー・オブ・デビニティー

周

再

賜

井上保三郎殿

落成式は無事に盛大に終つたが、建築工費の支拂は未だ完了してゐなかつた。それを完済するのは、後日の一大苦勞であつた。

共愛共済會

昭和二年四月八日の共愛社理事會に、栗原理事から『共済會組織ニヨリテ將來ノ發展ヲ計ルノ件』といふ議案が提出されて協議したが、『大體ニ於テ可トスルモ尙精密研究スルコト』といつた様なことで決定は次回に延期された。此の問題は、同年六月二十八日に開かれた評議員會にも同理事から報告があり、懇談されたことが知られる。而して同年九月九日の理事會に於ては、之が『社団法人共愛共済會設立ニ關スル件』となつて再び提出せられ、協議の結果、『右設立ニ關シ理事評議員ヲ召集シ發起人會ヲ開ク』と決議せられ、十月十九日に理事評議員聯合會を催して之を協議したが、『共愛共済會設立の件、役員は理事會に一任す』といふ事になつた。そこで十一月三日に理事會が開かれて『共済會發起人ノ件』が第一に議せられたが、尙疑問の點があつたので、『縣廳ニテ所要人員最小限ヲ確カメタル上詮衡ス、但シ理事、評議員、父兄後援會役員、同窓會役員等ノ中ヨリ依頼シ責任者ハ森川氏』といふ事になつた。其の調査ができたので、同月十六日に理事會を再開し、『共愛共済會發起人ノ件、同届出手續ノ件』を協議し、大體確定したので、翌三年一月六日の理事會で更

に此の案を練り返し、『共済會具體發表』を同月十七日に開會すべき評議員會に於てなすべき役員、事を決議した。一月十七日には豫定の通り評議員會が催されて、『共愛共済會設立ニ關スル件』は、一切の書類を完備して提案せられ、全員の賛成を得て、『理事會ニ於テ議決サレタル社団法人共愛共済會設立ヲ賛成承認シ其定款、細則、内規等ノ原案ヲ承認ス』と決し、又『共愛共済會ノ實行方法ニツキ協議シ且極力之ガ成立ヲ援助スルコト』を定めた。が、まだ煮え切らないものがあつて、三月八日に理事評議員會を開いたが、出席者規定數に達せず正式の會とはならなかつたけれども、『共済會員募集ノ具體的方法ニツキテ』又『專任勸誘員ヲ置クコトニツキテ』其の他種々協議をした。而して四月二十四日の理事會で、漸く『共済會幹事を戸谷清一郎氏、事務員を井田義雄氏とし、五月より事務開始、右出張旅費は實費とす』と決定した。隨分難産であつた。以上の記事は、共愛社の議事録に由つたものであるが、『社団法人共愛共済會設立趣意書』は、五人の理事を筆頭に總數二十人の發企人名を以て、既に昭和三年一月附を以て、二月十五日發行の共愛時報に掲載されてゐる。之を見れば、發案者等は之が成立をあせつてゐたにも拘はらず、全社の共鳴を得ること困難にして、荏苒延引したものと察せられる。遅れたりと雖も戸谷主事は實行の人であるから、日時を移さず熱心に活動せられ、共愛時報紙上には『共愛共済會の設立に就て同窓會員諸姉に』と題する懇切なる長文の公開書を以て訴へらるゝなど、おさ／＼怠りなく盡力せられた。記録によれば、九月六日の理事會には、戸谷氏の報告があつた事がしるされて居り、翌昭和四年一月七日の理事會には、同月十六日に發企人會を開く事、四月迄の費用は一時立替とし、六月に森村氏より金五百圓出金の豫定なりなど記されてある。一月十六日の發企人會は決議通り開かれ、五月二十七日にも發企人

會が催された。しかし然うした發企人等の會で何事が談合されたか、又其の後の経過が何うであつたかは知る由もない。立派な規約も出來てゐたのであるが、本校の事情にびつたりしなかつた爲であるか、多く共鳴を得るに至らなかつたとかで、遂に非常な努力をした後、龍頭蛇尾に終つてしまつたことは、まことに遺憾な事であつた。發案者の熱心と關係諸氏の努力に對して、之だけの記録を残しておくことにするが、會が成立しなかつたから規約の本文は省略する。

女子青年會

基督教主義で有ると無いとに拘はらず、學生に基督信徒の多く有る學校では、校内に於ける學生の一團體として、基督教青年會を組織することが、明治の末年から大正年間へかけての風景であつた。上は東京帝大を筆頭として、全國の官公私立諸學校に及んだもので、基督教主義學校に於ては學校當局が指導をなし保護を與へてやらせた所もあるが、其の他は學生等が任意に組織したものであつた。本校に於ても生徒等の間に漸く機運が熟して、基督信徒たる生徒等が中心となり、教員有志の指導の下に共愛女學校基督教女子青年會を組織し、遅れ馳せ乍ら昭和三年五月二十四日之が發會式を舉行した。會則は左の如くであつた。

共愛女學校基督教女子青年會會則

一、名稱

本會ハ共愛女學校基督教女子青年會ト稱ス

二、目的

本會ハ基督ノ名ニヨリテ集リ神國建設ノタメニ會員相互ノ間ニ基督ノ信仰ヲ涵養シ且ツ之レヲ普

及スルニアリ

三、會員

本會ハ本會ノ目的ニ賛成スル有志者ヲ以テ組織ス、本會ノ會員ヲ分チテ左ノ三種トス

- 1、正會員 本校ノ生徒ニシテ福音主義教會ニ屬スルモノ
- 2、准會員 本校ノ生徒ニシテ福音主義教會ニ屬セザルモノ
- 3、賛助員 本校職員及ビ本校卒業生ニシテ本會ノ精神ヲ賛シ同情ヲ寄スルモノ

四、會費

會費ハ一ヶ月金十錢トス

五、事業

本會ノ事業ヲ發達セシメンガタメ左ノ部ヲ置ク

- 1、宗教部 靈育ノ方面ヲ司ル
- 2、聖樂部 聖樂ヲ司ル
- 3、社交部 會員ノ親睦ヲ計ル
- 4、仕事部 本會ノ目的ヲ達センガタメニ各種ノ仕事ヲナス
- 5、體育部 體育方面ヲ司ル

六、役員

本會ノ役員ハ幹事三名及ビ委員若干名トス、役員ハ正會員及ビ准會員中ヨリ選舉シ其ノ任期ハ一ケ年トス、役員ノ任務ハ左ノ如シ

- 1、幹事 本會ヲ總理シ庶務會計ヲ司ルモノトス
- 2、委員 各部毎ニ二名宛ノ委員ヲ設ケ其ノ部ノ事業ヲ計劃實行ス

七、顧問

本會ハ贊助員ノ中ヨリ數名ヲ顧問トシテ推舉シ會務ノ指導ヲ請フモノトス

八、總會

年會ハ一月下旬ニ開キ役員ノ改選事務ノ報告ヲナス、例會ハ各學期ノ始メ及び終リニ各一回之レヲ開キ各部ノ計劃及び報告ヲナス

九、修正

會則ヲ修正セントスル時ハ會員總數ノ三分ノ二ノ同意ヲ得ベキモノトス、但シ本會ガ女子日本基督教青年會本部ト關係ヲ持續スル間ハ第一條及び第三條第一項ヲ變更又ハ廢止スルヲ得ズ

本會ハ組織當時は正會員十餘名、准會員二百餘名、贊助員十數名であつたが、着々活動して、同年七月三日には日本基督教女子青年會同盟に加入の承認を受けた。而して同月二十六日より八月二日まで、静岡縣御殿場富士岡莊に開催の女子青年會夏期學校に五名の會員を出席せしめた。

かくて、九月十四日には該期の例會を催し、各部の實行計畫案を立てた。宗教部に於ては、共愛日曜學校と協力して、毎月第一と第三の日曜日には禮拜を執行し、第二と第四の日曜日には早天祈禱會を開催する事、毎學期一回名士を招いて講演會を開く事、宗教書を備付け會員の閱覽に供する事、聖書研究會を開く事等を定めた。聖樂部に於ては、宗教音楽の研究及び練習をなす事、會歌を募集選定する事、聖歌隊を組織して禮拜を助くる事を決した。體育部に於ては、各種競技の練習を

なし、運動會及び遠足を行ふ。又テニスコート及び砂場を設ける事にした。仕事部では、寄宿舎のおやつ菓子製造して賣る、應接室の掃除をする、校内の遺失物の整理をする、バザーの出品の製作をする等の事を決定した。社交部は、雨傘を備付けて俄雨の際に貸出す。會員の親睦を圖り友情を増すため各種の催をなし方法を稽える、會の新聞を發行する等の事をきめ、それ〴〵實行に移つた。當時の役員は、幹事は總務佐俣ゆり、會計清水里子、庶務中村はる、委員は宗教部堀江忍、佐俣松枝、聖樂部松本輝子、堀江喜興、體育部白熊美都江、武井モトメ、仕事部曾井百合子、牧野モト、吉田きよ江、社交部宮崎よも、笠原しげ諸姉であつた。別に贊助員たる教師は、各部の顧問として會務を指導した。

自治會

女子青年會の結成と前後して、各學級に生徒の自治會が組織された。會則は、學級の任意であるから必ずしも一定はしてゐないけれども、大概文句は違つても似たりよつたりであるから、こゝには第四學年B組のそれを掲げて参考に供する。

第四學年B組自治會々則

- 一、本會ハ第四學年B組自治會ト稱ス
 - 二、本會ノ目的ハ自治ノ精神ヲ養ヒ、級風ノ改善ヲ計リ、以テ校風ノ美ヲ發揮スルニアリ
 - 三、本會ノ會員ハ第四學年B組生徒トス
- 本會々員ハ常ニ本會ノ目的ノ達成ヲ心掛ケ、奉仕的精神ヲモツテ事ニ當ルベシ
本會々員ハ會費トシテ毎月五錢ヲ本會ニ納ムベシ

四、本會ノ役員ハ會長一名、副會長一名、委員三名トス(下畧)

五、本會ハ其ノ目的ヲ達スルタメ左ノ仕事ヲナス

- 1、教室其他ノ整頓、掃除、裝飾
- 2、級ノ氣風ノ改善向上
- 3、學校ニ對スル希望及要求ノ提出
- 4、奉仕的作業

六、毎月二回集會ヲ開キ會務ノ計畫及協議ヲナス (以下畧)

本會ハ其の名稱ノ如ク、各學級毎に生徒の自治的精神に由つて運轉したので、逐次其の成績をあげる事ができた。

猶本校には、以前から學校自治會と稱するものがあつたけれども、組織の不完全と會員に自治の精神が缺けてゐたのとで實績を見ることができなかつたが、上記の如く學級毎に自治會が確立したので、學級自治會聯合會を新たに組織して學校自治會に代ふることとした。其の規約は左の通りである。

共愛女學校自治會規約

- 一、名稱 共愛女學校自治會
- 二、會員 共愛女學校生徒
- 三、目的 生徒間ノ氣風ヲ向上シ、自治ノ精神ヲ養ヒ、校風ノ美ヲ發揮ス
- 四、集會 毎週金曜日中食後各クラス自治會代表者會合協議シ、土曜日朝拜後決定事項ヲ全會員

ニ報告ス

五、役員 會長(集會ノ議長トナル)

副會長(副議長、記録係)

委員(三名内一名會計)

此の二つの會を結成したことに由つて、やゝ生徒の風紀を維持し、校風を振起するに役立つかと思はれた。

그리스オールド獎學基金

ミス、 그리스オールド女史は、米國基督教傳道會派遣の婦人宣教師で、前橋市に定住して附近各地を巡教するのが仕事であつたが、教育事業にも興味を有たれ、隣接地に住居せられた關係から宗教宣布の傍ら、明治三十一年以來熱心に本校の授業を援助せられた。而して就任以來教へた生徒の誕生日を記載した名簿を作成しておいて、卒業生と生徒とに別ちなく、其の誕生日には必らず慶びの言葉をしるしたカードを送つた。それが爲に學校の内外に非常に喜ばれ、評判がよかつた。大正十五年になると、明後年は同女史が本校に教鞭を執られる様になつてから滿三十年に該當するといふことになつた。いづれ同女史は明後年まで勤続される事であらうが、然うすると此の克く忠實に滿三十年間に亘つて本校の授業を助けられた教師に感謝し、之を記念する意味に於て、治ねく同窓生及び有志者の間に獎學基金を募集し、一定額を得ることが出来たならば、其の利子を以て優秀なる生徒の學資を援助するといふ案が有志の間に成立ち、左の如き趣意書を作成して之を發表した。

그리스オールド先生在職三十年記念趣意書

御承知の通 그리스オールド先生はわが共愛女學校に永らく居られました。明後年大正十七年で在職三十週年になります。そこで之を記念慰勞する爲め左の條件を以て同窓生及有志に醸金を御願ひする次第であります。

- 一、 그리스オールド先生在職三十週年記念の爲「 그리스オールド獎學基金」を募る。
- 二、 右獎學基金は同窓生及有志者の寄附に仰ぎ金額の制限を設けず。
- 三、 獎學基金より生ずる利子を以て共愛女學校の優等生に對し獎學を爲す。
- 四、 右獎學基金寄附申込締切は大正十七年三月一日とす、寄附金完納期も同じ。
- 五、 申込所及送金 共愛女學校内 周再賜宛。
- 六、 右募金決算報告は大正十七年三月の同窓會總會に之を爲し、且同窓會に於て之が管理委員及使用規則を定む。

發 起 者

周	再	賜
佐	藤	き
高	橋	ゆ
半	田	か
下	城	子

此の發表と同時に、周再賜、杉山勇司、半田かく、半田ふじ、高橋ゆう諸氏の寄附完納金百二十五圓也の報告があり、甚だ景氣よく出發したのであつたが、其の後の経過は餘り思はしからず、寄

附申込も少額のものごぼつゝあつて金二百餘圓に達したけれども、それ位のことでは何うにもならず、取敢ず其の利子を以て年々卒業の最優等生に對し『 그리스オールド賞』を授與したが、昭和十三年本校創立五十週年を記念するに際し、其の記念事業費に金額を繰入れて該基金の會計を清算した。發起人の熱心にも拘はらず、之が共鳴を得られなかつたことは遺憾であつた。因に、 그리스オールド女史は昭和六年七月辭任歸國された。

教會と日曜學校

教會と日曜學校とは、素より本校の事業ではない、けれども、本校の職員と生徒中の有志が之を組織し經營し、本校々舎の一部を使用して其の集會を開いて來たのであるから、其の概歴を記録しておく。

本校はもと基督教主義の學校であり、職員多數が同じ信仰を有する者であり、生徒中にも基督教者の家庭から來てゐる者が多くあつたので、自然校内の者だけで日曜日に禮拜をしたいといふ熱望が起つて來た。で、昭和二年六月から校内で毎月一回禮拜式を執行することとし、説教は主として周校長が其の任に當り、二年中には一回町田正男氏、三年中には森川抱次氏が一回せられた。

かくて十二月になると、信仰の事に熱心なる教員町田正男、八幡伊鹿、加藤次雄諸氏に由つて日曜學校が開校せられ、本校生徒數名が助手を勤め、數十名の小學校程度の兒童が毎日曜日集合して精神的訓練が施された。さうしてやつてゐるうちに、漸次組織も整備され、内容も充實して、翌年九月の報告によると、教師七名、助手十二名、學級七、生徒百有餘名(内約半數は本校生徒)といふ様なことで、周校長以下教師から書記に至るまで、整然たる組織が完成されてゐる。

昭和三年の暑中休暇前になると、校内に一教會を創立しようとの議が有志の間にもち上つてゐたが、時機尙早といふ論もあつて其の儘になり、秋になると共愛同信會といふ名目の下に教會に似た事をしようといふ案が成立し、二十五名の會員と十二名の會友を以て十一月四日の日曜日に發會式を擧げた。同會の役員には、牧師は周再賜氏、執事は杉山勇司、町田正男、加納哲雄、佐藤きし、周千代諸氏。日曜學校長は周再賜氏等を選定した。同會の規約、信仰の告白、會員の約束等は左の通に定めた。

共愛同信會規約名稱及目的

- 一、本會を共愛同信會と稱す
- 二、本會は會員共に天父を禮拜し基督の教訓を實行し且其精神の普及を計るを目的とす

集會

- 三、本會の諸集會は當分の内共愛女學校講堂又は適宜の場所に於て之をなす
- 四、本會の集會を左の如く定む
 - 1 禮拜式 (毎月第一、第三日曜日)
 - 2、日曜學校(毎日曜日)
 - 3、祈禱會
 - 4、其の他の集會
- 五、毎學期一回禮拜式と共に聖餐式を守り併せて洗禮式を執行す

總會

六、定期總會は毎年一月中旬に之を開き左の事項を行ふものとす

- 1、前年度の狀況、庶務、會計、日曜學校其他の報告
- 2、當該年度の豫定
年度は一月に始まり十二月に終る
- 3、役員の選舉
- 4、其他本會に關する重要事項の協議
臨時總會は時宜により隨時に之を開くことを得
- 七、定期總會は少くとも一週間前に臨時總會は三日前に日時場所及目的を會員に通知するものとす

八、會友は議決權を有せず

役員

- 九、本會に左の役員を置く
 - 1、牧師(又は代表執事) 一名
 - 2、執事 若干名
 - 3、日曜學校長 一名

役員は兼任することを得

- 十、執事は庶務會計を始め會務を分掌す
- 十一、毎月一回役員會を開き事務の打合を爲す

十二、牧師は役員會の議を経て總會に謀りて招聘又は解任するものとす
 十三、執事及日曜學校長は定期總會に於て會員中より選舉し任期一ケ年とす
 十四、役員會は必要に應じて各種委員を依頼す

日 曜 學 校

十五、日曜學校には教師其他必要なる役員を置く
 十六、日曜學校職員は毎月一回教師會を開き諸種の協議を爲す

會 員 の 義 務

十七、會員は出來得る限り諸集會に出席し且應分の献金を爲すものとす

受 洗、入 會 及 轉 會

十八、洗禮を受け本會に入會せんと欲する者は本會々員一名を紹介人とし洗禮志願書を提出すべし

十九、兩親の信仰により幼兒に受洗せしめんと欲するときは兩親より受洗志願書を提出すべし

二十、兩親の信仰により幼兒受洗したる者にして本會に入會せんと欲する者は入會申込書を差出すべし

二十一、教會員にして本會に入會せんと欲する者は入會申込書を差出すべし

二十二、本會々員にして教會又は他の宗教團體に轉屬せんと欲する者は其旨願出で紹介を受くるものとす

二十三、本會の目的に賛同し加入を申込むものを會友とす

雜

二十四、本會の經費は會員の献金其他の寄附によりて之を支辨す

二十五、本會規約の修正は定期總會に於て之を爲す

信 仰 の 告 白

我らは天地の主にして人類の父なる獨一の神を信す

我らは人類を救はん爲めに其生命を捨て給ひし神の子イエスキリストと其福音とを信す

我らは新なる生命を興へ給ふ聖靈と其感化とを信す

我らは永遠の生命と義しき賞罰とを信す

我らは聖書を以て我らの救に必要なる經典なりと信す

我らは洗禮及聖餐を以て我らの守るべき禮典なりと信す

會 員 の 約 束

我ら神の召を蒙りて信仰に入りたる者はキリストを救主と仰ぎ其教訓を遵奉しキリストが我らを愛し給へる如く互に相愛し以て其肢たるの實を全うすべし

我らは主の日を守り相集ふて天父を禮拜し信仰に進み徳を建て各其分に應じ恒に勵みて主のわざを務むべし

我らは家庭を潔め各自の業務を勵み國民の義務を盡し社會の改善を計るべし

我らの中信仰を誤り道に背く者ある時はキリストの教訓に従ひ親切に忠告し之を導き容易に其人を棄つべからず

希くは神我らをして忠實に此約束を守らしめ給はむことを

受洗者の告白

自己の罪惡を悟り之を悔改めてイエスキリストを教主と信じ之に従ふ心ありや
己の身及何物よりもキリストを愛し凡そ神の聖旨に適はざることは之を爲さざる決心ありや
「信仰の告白」を會得し「會員の約束」を守り同信の友と心を協せ何事も神の榮光のためにする心ありや

生涯を神に捧ぐる印として洗禮を受くる心ありや
同信會とはいふものゝ殆ど教會として間然する所なき組織を以て歩み出した同會の日曜日の禮拜は、毎會六七十名から百名位であつた。

斯して昭和五年を迎へると漸く機は熟したと思はれた、其の一月十一日には臨時總會を開いて教會組織の議を提案し、一同の賛成に仍つて本會を共愛獨立教會と改稱し、今迄日曜禮拜に配付した週報を『一粒の麥』と改稱し、形は小さけれども完全なる雑誌の形體を具備したるものとなし、之を機關誌として、彌々教會としての使命に向つて邁進することに一同決意した。其の筋の教會設立認可は、昭和六年十一月十六日附を以て與へられた。此の教會組織に關し、共愛獨立教會牧師となつた周再賜氏は、共愛時報第二十二號卷頭に『共愛獨立教會』と題する一文を草して、其の意義を闡明してゐる。曰く

宗教は議論でなくして實行であり體驗である。價值判斷である點は藝術に似て居る。それ故に傍觀者はかれこれと批評するでせうが、信者自身に取りては神は親しい體驗であり何よりの頼り

である。何人も詩篇を読めば古代イスラエルの詩人が如何に信仰に活きたかを見ることが出来る。教育はあらゆる事業中の難事業である。物品の製造、植物の栽培とは異なり、又藝術品の創作でもなく實に人格の改造建設である。それ故教育に従事する者が自力を以てその仕事に當らうと考へることが出来るでせうか、寧ろ教壇に立ち運動場に立ちて、自己の無力淺學に恥づるのみである。宗教なしの教育は知識を授け技能を教ふるかも知れぬが、人格の陶冶はむづかしいと思ふ。斯る見地と確信から出發すれば、學校―殊に中等學校―は宗教を基礎として人格の訓育をするが最もよいと思ふ。わが共愛獨立教會は、共愛同信會の主義を繼承して來たもので、別に新奇な企でも何でもない。神を土台に教師も生徒もひたすらに精神生活をして行かうとするのが主旨である。獨立教會は普通の教會と稍や其趣を異にして居るのは此の爲である。

然らば何故獨立とする必要があるでせうか。元來教會は教祖イエスの精神を實現すべく努力すべき筈であるが、そこが人間の弱點と云ふか自分の説を最も正しいとして他人の説を排斥し、僅かの枝葉の點をも相容れない場合が往々ある。儀式や聖書の説明等を互に固執して、某の教派、某の教會と云ふ様に百數十の教派に分れて居る。學校をして斯る紛争に陥らしめない様にするのは大切なことである。

我が校にはいろ／＼の教派に屬して居る教員が居る。時には舊教の方も居た。救世軍、無教會等もある。日本基督教會、組合教會等の方は勿論居る。此等の人々は、主イエスとその十字架の外に何をも語らずと決心し、互に人を己に勝れりとする精神で専ら生徒の教育に従事して居る。此れを包擁し得るものは特殊なる獨立教會が最も適當と信する者である。即ちわれらは宗派心を

打破して、神を愛しイエスの精神を實現する様な宗教的氣分の教育團體を造るには、此の方法が最も適切と信するに外ならない。

従米の行懸りとか歴史とか云ふことを理由にして、某教會、某教派に屬しないのを謀叛人の様に考へる人があるならばそれは誤りであらう。宗派の弊に堪へない吾人は、凡この宗派がもつと寛容な精神を持つ迄は現在の方針で進むのが一番適當と信する。而して我が教會は、何れの教派とも喜んで協刀する考へがある。但學校今米の目的と矛盾しない程度で、わが教會は一意専心に主イエスと其十字架を説明しつゝあることを公言して憚らないものである。

共愛獨立教會創立當時の正會員は約四十人で、規約其の他は同信會當時のものを殆ど其の儘繼續した。諸集會は、従前と變化がなかつた。

斯して暫らく特異なる教會の營みを繼續したが、其の教會員の多くは曾て日本組合基督教會所屬の教會に屬した人々であり、又學校の經營に参加してゐる人々の多數も同教會の所屬であり、學校に支援を與へてゐる附近諸教會と其の教師等も大多數は同教會所屬であり、殊に組合教會の主義が共愛獨立教會の立場に觸れないと云ふことにより、竟に昭和十年六月十七日附を以て日本組合基督教會に加盟し、昭和十一年四月十二日には共愛基督教會と改稱した。當時の會員總數は百一名であつた。引續いて周校長が此の教會牧師を兼ねられ、昭和十五年十一月には本校教員赤間充治氏を迎へて副牧師とした。諸集會は、やはり校内の者ばかりであるから、従前と變りなく七十名位から百名前後を上下した。

かくて、昭和十六年十一月廿四日に至り文部大臣認可日本基督教團の創立せらるゝや、當教會も

附近の關係諸教會と共に、大勢に順應し教會員二百四十三名を以て同教團に加入し、日本基督教團共愛教會と改稱して、新たに教會規則を制定し、昭和十七年三月三十日附を以て、群馬縣知事より認可を受けた。宗教團體法の指稱に従ひ、周氏は主管者となり、赤間氏は副主管者となつた。

かうして、名稱は四度變り、組織は改まり、會員にも移動はあつたけれども、教會結成の精神に於ては、同信會以來微動だもしてゐない。今後とも變らないつもりで勵んでゐる。

創立四十週年

豫而本校學則改正の件、文部省へ認可申請中であつたが、昭和三年一月二十日附を以て認可されたので、本科一二學年は從來の儘であるが、三四學年に就ては之を第一部と第二部に分ち、第一部には家事裁縫を主とし、第二部には國語、英語、數學等を多く修めしむることとした。猶、補習科の様態を一新し、學課を修身、國語、家事、裁縫、音樂、教育の六課目とし、修了者中成績優良なる者に對して、小學校裁縫科專科正教員免許狀を授與せらるゝ様に其の筋へ申請した所、三月二十六日附を以て認可を與へられた。

同年三月二十日には、第三十七回の卒業式と共に創立第四十週年の記念式を舉行した。又、本年の優等卒業生天田ユキ子に對して、第一回グリスオールド賞を授與した。賞品は新約聖書と置時計であつた。此の卒業式に併せて行はれた創立記念式に於て、本校の創立並に其の後の維持につき一方ならぬ力を盡された恩人深澤利重氏に感謝狀を呈し、且つ教員中三十年勤續のグリスオールド、十一年勤續の杉山勇司、十年勤續の富井菊之助、八年勤續の吉田淑女諸氏に對して、父兄後援會と同窓會からそれ下、記念品を贈呈した。まことに意義の深い思出の盡きない式典であつた。

翌月二十日には、舊病室及び茶室の移轉改築工事が落成したので、之を思恩寮と命名して、舎監室、病室、補習科寄宿舎等に使用することとし、教師三名、補習科生徒八名がそこに居を移した。其の頃周校長は、共愛時報に左の如き所感を掲載した。短文ではあるが句々我らの心胸に迫るものがある。以て我等の校長が如何なる精神態度を以て、如何に自ら反省しつゝ、本校經營の任に當つてゐるかを窺ひ知るべきである。

近來我が國の教育界に、精神教育、人格教育乃至宗教々育の必要を感じ、之が實施を叫ぶ者が漸く盛んになつて來ました。甚だ結構なことであるが、歸する所教育者の人物如何にあると思ふ。人格教育は學說や理論では出來ない、活きた模範が必要である。わが共愛女學校は、四十年間清貧と逆境と戦ひ、屈せずして大膽にも人格教育を標榜して來た先輩に對し、大に感謝すると同時に、その成就せし跡のみ顧みて安心することは出來ない。物質の豊富は必ず精神的油斷を生ずる。昨年共愛館の落成に際し予は全校の精神的緊張を爲すべく警告したが、之が單に一の杞憂に終らば幸である。

共愛女學校の前途は益々多難である。僅に一校舎の完成を以てもはや能事終れりと誤信せばその禍恐るべきものである。然れども共愛女學校は、物質的完成を待つて然る後に精神教育を叫ぶべきではなくして、その不完全の間に尙且つ精神教育を爲すべきである。人である、人物さへあれば出來ると信する。現今教育界に如何に人格教育を叫んでも眞の教育者が輩出せねば徒らなる叫びである。之と同様に、わが校は四十年の歴史的背景があり、且つ物質的にも進展しつゝあつても、若し當事者、教師にその人を得なければ、徒らに識者の笑を招くに過ぎない。共愛女學校

の使命を思ひ反省しつゝ之を認む。(六・二一)

御大典奉祝と記念事業

昭和三年十一月十日は、聖上陛下御即位の御大禮を京都の御所に於て行はせらるゝにつき、全校慶祝の誠意を披瀝して、先づ午後二時より講堂に於て御大典奉祝式を舉行し、次いで午後三時に一同共愛館屋上に參集して、京都の方向に對して萬歳を三唱した。

同月十六日本縣に於ける御大典地方賜饌には、本校々長も陪餐の光榮に浴せられた。まことに感激の至りであつた。

御大典記念事業として講堂兼用の雨天體操場平屋建一棟を建築するの案が成立し、其の豫算は金五千圓で、父兄後援會から一千二百圓寄附し、其の他は學友會の特別會計即ち年々秋季に催すバザアの利益金最近四ヶ年分を提供して間に合せる事にした。相談は滑らかに出來て、間口八間、奥行十間、玄關四坪、合計八十四坪の平屋建で、前橋の小野里組の請員で十一月二十日には工事の契約ができ二十六日には起工した。昭和四年二月上旬竣工の豫定であつたが、工事は順調に進捗し翌年一月二十九日には完成して、森川、栗原兩理事並に周校長立合の上請負人小野里總澄氏から引渡を受けた。此の新校舎を共勵館と命名した。

従前、育愛館に於て學校の朝禮並に教會の禮拜をしてゐたのであるが、一月三十一日の朝拜を以て最後となし、二月一日には午前八時半から共勵館の開堂式を執行し、爾後同館に於て諸集會を催すこととした。

三月一日午前十時より第四十二回創立記念式並に共勵館落成式を舉行した。本校職員生徒の外來

賓約七十餘名あり、會衆一同に記念品を贈呈した。

記念事業は之で終らなかつた、同窓會の發起で石柱の鐵門と鐵筋コンクリートの塀、同じくコンクリートの道路の建設が続いて行はれた。それらは何れも六月末日迄には竣工して、本校の外観は漸く一新された。就任以來粉骨碎身克く一身を打込んで只管本校の發展の爲に盡瘁された周校長の歡喜想ふべしである。共愛時報第十四號巻頭にしろして曰く

御大典記念のため最も有意義なる事業が二つ當校に出來ました。其の一は、父兄後援會と學友會の協同で講堂を建て、二月から使用した事は屢々時報にて報導致しました。云ふまでもなく講堂は、わが校精神教育の道場である。此の講堂の竣工によりて、どれ位校内の氣風を一新したか量り知ることが出來ないと思ふ。廣くて明るくて屋根が高くて、僅かではあるが正面の窓はステンドグラスが落付の氣を漂はせ、又住谷天來氏の揮毫した大額「如神成圓」が掲げられ、父兄後援會寄贈の大時計等、すべて氣持よいものばかりである。のみならず、これが總て生徒や教職員がバザーに於ける汗水を流して働いた結果であり、又父兄と有志の心からの捧げものであることは、毎朝の集りをして一層意味あるものたらしめる。此の共勵館の竣工が教職員及び生徒等に取っては、共愛館落成以上の喜びであつたと云はれて居るのは、蓋し理由あることと思ふ。

更に六月末日を以て、同窓會發起の校門塀等鐵筋コンクリートで堅固優美なものが出來ました。塀の長さ約二十二間、高さ六尺、表面は御影の洗出し、腰はつか石の洗出し、門扉は巾一間のが二枚、三尺の一枚(此の重量百五十貫と云ふ)何れも調和色彩等に注意を拂つて造つたものである。更に附屬工事として、正門から長さ十二間中二間のコンクリートの道路も出來ました。此

の事業は、同窓生愛校の結晶であり、又母校を市民に紹介したいとの同窓生の精神の表現とも云ひ得る。由來校門建造の聲は四五年前から可なり強かつたが、此度御大典記念事業として完成されたのは此の上ない幸である。

予は、共愛女學校として企てられた此の二つの記念事業は、何れも適切であり、且つ生徒の心底に有意義なる永らく印象を残す大切な記念物であると信じ、心から喜ぶものである。

願くは神の恵、社會の理解と援助が益々加はり、本校をしてその使命を完うせしむる様祈るものである。(七月四日)

因に、右文中に在る共勵館の正面に掲げられた『如神成圓』と題する住谷天來翁の大額面は、四月二十三日來校して揮毫されたものである。

會では喜び迎へられたピアノが年と共に古びて屢々修繕をして漸く使用する様な状態になつたので、是非とも新しい物を一臺購入して、之は生徒等の練習用にしたといふ意向があり、其の購入方法を考慮してゐたところ、共勵館の新築落成と共に父兄後援會内に其の議が起り、七月十九日の同會總會に於て、其の資金を同會より快く寄附せらるゝの決議が成立つたので、取敢ず直ちに音楽擔任の藤谷教諭が上京して購入の手配をなし、更に四月二十四日周校長が同行して上京し、大寅二氏を煩はして現品の鑑定を請うて購入を確定した。それは、ドイツ國ドレスデン市ホフマン・キユーネ會社製グランドピアノ、定價二千七百五十圓であつた。新築の大講堂は本品を飾つて初めて完備した感があつた。

尙、本年六月一日には、他日本校名物の一つとなつたメーデーの最初の試みをなし、大森知事及

び夫人を初めとし多數の來賓があつた。又、十一月十日には、午後一時から共勵館に於て、本校の主催で縣下中等學校聯合英語大會を開催し、參加校九、出席者無慮五百名の大盛會であつた。共勵館の造營された事により斯うした催しができる様になり、従つて本校が前橋市民に認められ、更に漸く縣下に知らるゝに至つたと思はれる。

かうして、外觀からは日の出の勢で進展してゐる様に見へた昭和四年といふ年も、本校當事者の胸の内には我らの洞祭に餘る苦慮があつたことを見過してはならない。徳川光圀卿の『たゞ見れば何の苦もなき水鳥の、足にひまなきわが思ひかな』と詠まれた其の心持ちは、其の儘わが周校長の心持ちであつたと思ふ。昭和四年の暮に際して、周校長は『回顧と展望』と題して、其の苦惱の一端を暢べる。曰く

昭和四年も將に暮れやうとして居る。此の一年間にわが校の受けた惠は決して小さいものではなかつた。設備の方面から云へば、水道の敷設、共勵館の落成、御大典記念事業としての正門と塀の建造、グラウンドピアノの購入、運動場の塀約三十間の新造、第二記念館と育愛館を連絡した廊下の建設、その他僅少ではあるが、理科を初め無くてならぬ教具品の購入、校庭の植樹も幾らかした。行事として創立記念日、卒業式、バザー、校内競技會、遠足等何れも好結果を収め、メーデーや縣下女子中等學校英語大會等は初めての催しに拘らず好評を博した。又諸種の祝式には本校獨特の精神訓練を加味して、深き印象を與へることを期した。他方に於ては同信會、日曜學校、女子青年會の如き有志團體は何れも良き働きを爲し、その主催の下に種々の宗教的集會を有意義に爲して、本校の教育を直接間接に助けた。人事方面に於ては、教師生徒卒業生の家庭に

は、幾多の不幸があつたのは悲しい事であるが、不幸の中にも神の導きありと信ずる。教師の異動補充は幸にして適材を適所に得たと思ふが、人間の爲すこと元より完全とは云へない。又校外にありては、社會各方面、官民何れも本校に對して同情と好意を種々の機會に於て表はされたことは喜ぶべきことであり、われらには一つの獎勵ともなる。

されば昭和五年を迎へるに當つて、我らは一層の努力を以て神に仕へ、社會に盡すべきは勿論であるが、經常費の外に一定の財源に乏しいわが校に取つては、これをあれをと豫め指を折つて計畫を定めるわけにはゆかない。昭和四年を回顧すれば随分無理もあつた、無から有を生じた様な感がいくつもあつたのであるから、昭和五年においても又同様の攝理、奇蹟が行はれようと思ふ。新しい寄宿舎、大きい運動場、完全な特別教室、會堂式の講堂等の與へられる様にとは、吾人の日夜忘れられぬ願ひである。

然し昭和五年にこれらの望みの幾割が實現されるであらうか。昭和三年に三百八十の生徒が、社會一般的不景氣のためか、昭和四年には三百四十名に減じたが、昭和五年には一層減少するの傾向だと思はれる。教職員は此の難關を突破するの覺悟があるが、千有餘の同窓生を始め共愛の精神に共鳴の士は、共愛をして困難を切開きその理想を完成せしむる様力を添へていただきたいのである。

若し具體的に之を訴へるならば、吾人は諸兄弟が奮つて共愛女學校維持會に入られる様に切に望む。此れは手近にして實行し易いことである。維持會員は一口年額六圓を醸出する組織であるが、其の少額なることを侮ることが出来ない。共愛館建築に際し、その費用の五分の一を維持會

は提供したのである。これ文申して新しき年の展望としたい。何たる經綸のない、規模の小さい、抱員の乏しいものと世の笑ひを買ふかも知れぬが、吾人は物資に窮しても、物資にのみくよ／＼して共愛設立の大精神を忘却するものではない。此の困難の時代に處して、心を盡し精神を盡して、此の校の根本が枯渴せぬ様にしてゆきたい。昭和五年には見へざる神の導きによりて、昭和四年に勝る進歩のある様切に望む。(十二月十三日)

同窓生に懇へる

逆潮に直面して我が共愛女學校の運命を双肩に負ふ周校長の心のうち、さこそと思ひ量らるる。夫人にも語り難い心の思ひを神に訴へて、安き眠りの成り難き夜も幾度かあつたことであらうと察せられる。校長としては、天地の神の御加護の外には、卒業生たちの支援は絶対必須であつた。機會さへあれば訴へた。訴へずには居られなかつた、といふべきであらう。それ程切實に、かれらの援を必要としたのである。昭和五年三月の共愛時報第十七號には『卒業生に望む』といふ一篇を掲げる。曰く

わが校の卒業生で種々學校のために思ひ、學校の發展のために祈り心を碎く人が少なくない。男子よりも女子は多くの點に於て障礙があつて、母校のために思ひながらもどうすることも出来ない場合が澤山にある。私立學校の發展完備は、其の校の卒業生の熱心と力に頼ることが極めて大なることは申す迄もない。それ故女學校は男子の學校よりも發達が遅いのは誠に止むを得ない所である。

併し學校教育は、決して單に學校又は教師に一任すべきものでなく、家庭、保護者、卒業生、有志家が各方面から力を合せなければ、十分の效果を得ることは困難であらう。折角の良習慣も家庭で破壊され、卒業生の爲めに妨げられることもある。積極的に母校のために盡す境遇に置かれてゐない方にも、何かの方法又は行ひによつて母校の榮を表はし、又良い模範を示すことに依つて、教育の目的を助成することが出来るものである。今左に氣のついた點を少し述べて、卒業生諸姉の参考に致したいと思ふ。

(一) 常に適當の學生を紹介せられること。學校の目的物の大半は學生である。それ故適當の學生を得ることは、學校に取りては甚だ大切なことである。卒業生が自分の子女を母校に送るばかりでなく、知人、親戚、隣人の子女をも母校に入學する様に紹介するは、最も良い奉仕の一つである。

(二) 住所變更改氏改名の時は、出来る限り早く學校に報知すること。此の點について遺憾なことには、我が校の卒業生は大層無頓着の様である。これは現今住所不明會員が百人以上もあることは、何よりの證據である。幾年間も住所を不明のままにして置いたり、結婚なされても野の花には幾年も古い住所や姓が載つて居るのは、不體裁極まることと思ふ。

(三) 母校の卒業式を初め種々の會合に同窓生多數出席せられるのは何より喜ばしい。近來卒業式、バザー、クリスマス祝會に同窓生の顔がふへて來たことは良い現象である。只こゝに一つ希望したいのは、其の様な場合に卒業生諸姉の服裝が如何にも華美に流れない様に氣をつけることである。生徒に對して質素をいくら叫んでも、卒業生が必要以上にはでな風をしては矛盾な話である。服裝は元來自分にも他人にも爲めになる様にするのが目的で華美の服裝は有害無益であ

らう。世の中は一般に奢侈の風潮があるが、わが校は地の鹽を以て自任して居るとせば、世の風潮と戦つて輕薄を質實に導かねばならぬ。此の點について今後母校に御來訪の折、又いろ／＼の催しに御出席の場合にはつとめて質素の模範となる様に願ひたいものである。

消極的方面ではあるが、右三つの點について愛校諸姉が注意を拂はれ、われらと協力せられ母校を益々良い學校にしてゆきたいものである。(三月十二日)

かういつて訴へたもの、校長の胸の中には、猶收まり難いものもや／＼してゐたので、其の秋十月號の同紙上に『同窓生及び父兄に望む』てふ一稿を草していふ。

吾人は時報第十七號の説苑に「卒業生に望む」と云ふ題で所見を申上げたが、こゝで又同じ様なことを述べるきはあるが、現今のわが校の様子を見て更に一言するの必要を感じる。

共愛女學校の教育方針に最も理解あり同情あり共鳴して下さる方は、何といつても同窓生と父兄であらう。それ故他に訴へるよりも先づ皆様に訴へるのが最も取るべき途である。申す迄もなく、神の導きと同情者の援助によつて、わが校は着々と發展し内容も次第に充實して参りました。處が昨年から經濟界の緊縮のために全國民は非常の場合に立ち不景氣の聲が津々浦々に迄聞える様になつた。その爲め中等學校へ子女を入れることは比較的生活には急務ではないから之を控へ、又官公立學校の入學難が緩和された爲め私立學校志願者は激減し、何れの私立學校も入學者が大に減少したばかりでなく立ちゆかぬものもあつた。わが校も其の例に漏れず、昭和四年の入學者は六十名足らず、昭和五年は更に尠く三十名位でした。そこで折角改善進歩の途にあるわが校が非常の難境に立ち至つたのである。

全國民が苦闘しつゝある際にわれら丈その圏外に立つことを希ふものではないが、學校を維持してゆくに最少限度のものを與へられる様に熱望するものである。

卒業生諸姉が其の子女を母校に送ることは大に望む處であるが、一歩進んで知人朋友の子女にも勧める様に御願ひしたい。又父兄保護者の方々も其の様な考へで本校に子女を送り以て宗教教育を施し、新時代に適はしい教育を受けしめることは何より大切である。

是迄本校が歓迎されない理由が三つある。

(一)基督教主義であること、(二)私立學校であること、(三)費用がかゝると云ふこと。

右の中で(一)と(二)は時勢の進歩で今日左程問題にする人は尠い。只第三の點は容易に解決出来ない理由のあることは何人も認めるであらう。されど校舎、教具さへ揃へば其の後は必ずしも私立學校の費用が多いとは云へなくなると思ふ。現在でも他校に比して一ヶ月一圓餘の多額に過ぎない。

共愛女學校は時勢と共に進歩したい、昔の共愛は斯うであつたと云ふ様な先入主を持たないで來りて御覽下さる様に、何時にても御來觀を歓迎致します。(十月三日)

讀者は眼光を紙背に徹しなくてはならない。校長は唯通り一遍の判り切つたことをいつてゐるのであると思つてはならない。校長は實に烈々たる愛校の至情を以て之を草してゐるのである。否更に同窓生たちを想ふ歌々たる至誠を以て之をしるし、彼らの魂に迫らうと志してゐるのである。まことに、校長は『心の故郷へ』一篇に於て、同窓生諸姉を招く赤心を吐露する。即ち曰く

卒業生にとりては母校は心の故郷である。學校を卒業しても其の校に對して何等愛着の念を有

たない人は誠に氣の毒と云はねばならぬ、又學校側から云へば其の教育は失敗である。これは少くとも中等學校に就て云ひ得ると思ふ。わが共愛女學校の卒業生諸姉！共愛女學校は諸姉には忘れられない心の故郷であらねばならぬ。併しながら今迄共愛女學校は世運の進歩に立遅れ、上州最古の女學校で他校の模範たり先導者たるべき筈なるに反つて常に他の後に立ち、否世人は共愛を眼中に置かなかつた様である。これは愛校諸姉にとりては堪へ難き苦痛であつたであらう。處が一陽來復、共愛にも春は訪づれて來た、神の恵と社會の理解の下に躍進又躍進！學校らしい外觀を具へる迄に漕ぎつけたのである。

されどわが校の本領は外觀でなくして設立の精神にあると思ふ。物質的に恵まれたことは喜びの涙にむせぶと共にわが校の本領發揮に向つて進まねばならない。即ち細くまで人格中心の教育を旗印に掲げ、校内に敬虔の空氣溢れ、師弟の情誼厚く、又卒業生は常に母校を心の故郷として慕ひ、信仰を養ひつゝ、人生の荒浪に打負けることなく反つて進んで家庭を潔め國家社會に奉仕するに至らば、わが校は世の光であり地の鹽である。

これは云ひ易くして實現し難き理想であるが先づ母校を心の故郷とせよと叫びたい。吾人は微力ながら此の理想を實現せんが爲め、第一互に神を禮拜し求めることを高調するものである。共愛女學校を諸姉の心の故郷にしやう、これは吾人の願ひである。諸姉又之を諒とせられ、人生の行路に疲れた時には來りて共に祈り、神から力を得るようお勧めする。從來も此の氣持で居つたが今後は益々その精神でわれらは力め、又皆様は同様の精神で母校を訪ねらんことを。具體的に申せば、日曜日禮拜式には來りて神に感謝し、一つ心にて神を讚美し、又神から力を得たいも

のである。金曜日夕のたそがれ靜かな折には來りて共に祈り、又朝拜其の他の集會には諸姉が自由に参加せられる様に勤める。

機會あれば諸姉の心の故郷に歸りて、魂の更正と悔改めと祝福と力を受けられんことを。(九月廿二日)

一語一句を能く／＼噛みしめ、一文の意義を深く玩味して見よ、筆者の眞意を了得することができらう。共愛女學校の卒業生たちに取りて、母校と深く結ぶことは、必ずしも母校の爲のみではないのである。若し夫れ諸姉が眞に共愛女學校教育の主義精神の存する所を理解するならば、校長の言ふところの眞實なるを知るであらう、而して母校を思ふの情に禁へなくなるであらう。

逆境裡の進展

昭和五年になると本校の創立者であり理事の一人である深澤利重氏が多年の功勞を記念する爲に、同氏の肖像畫を講堂に掲ぐるの議が有志の間に起り、校長初め諸氏、賛成があつたので、教員金井龜吉氏に囑して横幅三尺に縦三尺八寸の油繪半身肖像を調製し、之を同年三月一日第四十三回創立記念式の席上に於て除幕した。式は午前九時から執行せられた、教員高野常政氏が司會し、理事長森川抱次氏が肖像畫除幕の辭を述べられ、深澤氏の令孫本校本科二年生の花井よし女が除幕をなし、校長の式辭に次いで深澤氏の講話があり、一同に對し深き感銘を與へた。

昭和六年一月十九日の理事會に、從來の本科を『共愛女學校高等女學部』に、補習科を『共愛女學校專攻部』に改稱するの件が提議せられ、決議となつて直ちに學則改正の認可申請をなし、三月十七日に至つて認可せられたので、新學期から改稱實施した。

敷地と校舎の問題は断えず學校當事者の頭腦をなやましてゐる、機會と資金とへあれば擴張する、増築する意向である。昭和七年一月になると隣接の畑地二百十四坪を借用できることになつたので、運動場として借りる事にした。之だけの地所でも本校としては大に便利を得たのであつた。同年五月十日、不圖した思ひつきで全校生徒に、婦人が喫煙するの可否について投票させたところ、全部否と投票した。平生訓育の効果と見るべきであらう。

同年七月には、校庭の一角に校長の住宅が建築された、延坪三十二坪七合五勺の二階建亞鉛葺で、之を信愛館と名づけられた。翌月は、寄宿舎の浴室と洗面所が改築された。之は平家造三十六坪、屋根は矢張りトタン葺で、之を清身寮と稱した。附屬として物干場も建設された。此の外食堂は從來疊敷であつたのを、テーブルと椅子に変更した。食堂と思恩寮との間は廊下で連絡され、凡てが便利になり、面目が改まつて來た。當時寄宿舎の賄料は一ヶ月金十圓であつた。猶、此の食堂は、翌八年八月に移動して清身寮に接続させ喜望館と名づけた。

斯うして次々と外觀が整備されてゆくを見ると甚だ好況の様に思はれるが、本校としては當時は周校長時代に於ける最も困難な時期であつたと思はれる。周氏は、昭和八年三月の共愛時報に『共愛女學校の現状』を暢べて、斯く言ふ

共愛女學校は現在百四十四名の生徒と十二名の教職員がある。これを昭和三年頃の盛況時に比すれば誠に數に於て少ないことは明かである。昭和八年四月には恐らく一層減少するであらう。されど共愛女學校の使命はその生徒數に比例するのではない、之が吾人の確信である。此の確信を所有するものが共愛女學校を所有し、共愛と苦樂を共にし得る人であらう。卒業生と雖も此

の確信ある者は母校を援助し、共愛の卒業生たることを感謝するが、此の確信なき者は冷淡で遠ざかつて仕舞ふ傾きがある。

然らば共愛の使命は何か。一言で云ひ表はせば、信仰ある婦人を社會に送り出すことである。共愛女學校の職員は人間である以上、經濟生活から一日も離れることの出来ないものである。百四十人位の生徒を以て學校を經營するは一見不可思議の様に思はれ、外國から補助金でも受けて居る様に考へられるは無理からぬ事である。されど吾人の屢々責任を以て明言した様に「共愛は創立以來四十五年間外國から一錢たりとも經濟的援助を受けた事がない」ことを今一度明言する。共愛は世の所謂ミツシヨン・スクールではない。徹頭徹尾日本人だけで苦心經營されて來た學校であり、純國産である。私立學校經營の經驗なき人は、今日の共愛女學校の忍耐を理解するは困難であらう。

經濟的係累を恐れる者は共愛女學校から離れ去り成るべく之に觸らぬ様にし、子女をこゝに送ることさへ躊躇する傾きがないでもないが、それは杞憂である。吾人は志なき者から無理に負擔を乞ひ又寄附を強要せないは勿論、今後も同一方針で進む考へである。

共愛女學校の設備は完全であるとは申し得ないが、一通りの必要な校舎教具は備つたのである。今後も漸次改良整備してゆきたいので世の志士仁人の心からの物的援助は感謝を以て之を受け且つその志に副ふ様に致したいのは言を俟たないが、一日も疎せに出来ないのはその教育方針の實行である。その方面の苦心は日夜吾人職員達の十字架である。伸びる者を伸ばし、弱き者を勵まし、個性に適した指導を誤りなくするは人間の知慧ではなかく、易くはない。淺學にして信仰

薄き平凡なる同人等は屢々自己の無能を歎ずるものである。

以上は共愛女學校の現状と吾人の心情の概言である。願くは世の識者が吾人の微衷を察し、此の事業に對し心からの同情と理解を以て援助せられんことを。(共愛女學校創立四十五週年記事、日所感)

斯うした校長の悲壯にも旺盛なる意氣のあればこそ、本校は逆境の裡にも進展の一路を辿り、着々校運を開拓し得たのである。

因に、不景氣な年の所以であるか何か知らないが、此の期間に於ては頻りに名士、來て講演を聴かせてくれた。主なる人々を算ふれば、金子白夢、外村義郎、高倉徳太郎、賀川豊彦、岩橋武夫、安田忠吉、中村正路、長谷川初音、龜谷凌雲、植村環、堀貞一、小崎道雄、田中龍夫の諸氏の名を擧げることができる。

深澤利重氏逝く

本校の大恩人深澤利重氏との別離の日が遂に來た。昭和九年十月七日午後七時であつた。病氣は腦溢血で數ヶ月前からわらわらかつたのが、最後に肺炎を併發してそれが致命症となつたのであつた。其の最期は信仰人たるに適はしく實に立派であつた。當人が平靜であつたのみならず、周圍も又靜穩で些しの取り亂した所もなかつた。夫人が「安心して天國へおいで下さい。妾も後から参りますから」と大聲で言はれると、氏は如何にも「得意らしく」其の白い鬚の中で唇を微かに動かされたといふ、たゞそれだけであつた。今息信三氏は「父の臨終は幸福だつたと思ひます」と記されたが、それは當に大潮の靜寂に於ける日没の如き大往生であつた。安政三年三月二十三日豊前國宇佐郡天

津村に誕生され、少年時代志を立て、長崎に遊學し、更に青年時代蠶糸業に志して其の研究の爲に全國を旅し、前橋に於て理解ある先輩に見出され、蠶業と共に信仰を學び、一旦歸郷したが、不可思議なる神の攝理に由て再び上州に來り、深澤家の養子となつて前橋市外關根の地に居を定め、蠶糸業界の巨人となりしのみならず、我が校創立の中堅となり、爾來四十七年間始終渝らず、縣下女子教育の爲に盡し、「一生七十九年を一刻も徒費せず、誠心誠意神の命と信する處に従つて勤勞し全幅の力を致し、保羅の所謂義の冠を疑ふ事なく、衷心些しの暗翳もなかつたからこそ、かくも平和に應召し得たのであつた。噫。

深澤氏の葬儀は、豫ての理事會の決議に本づき、深澤家と同家の屬せらるゝ前橋正教會の了解の下に十月十日、本校の校葬として執行された。その順序を記せば、先づ九日午後三時自宅に於て移棺式を執行せられ、それには村の學童は教師に引率され庭前にて参列し、靈柩車が發走する時には各團體を初めとして殆ど全村の人々が路傍に列を作つて見送られた。午後四時前橋正教會に到達し、午後九時から安置式の祈禱があり、本校からは周校長杉山教諭の外早坂教師が生徒代表を引率して参列した。翌十日午前八時靈柩を本校共勵館に迎へて安置した。定刻の十時になると、正教會から來られた三人の司祭によつて、初めに同教會所定の禱文に従つて一時間餘の儀式があり、次で周校長司會の下に本校の告別式を執行した。一同讚美歌(四九三)をうたひ、教員杉山勇司氏が聖書を拜讀して祈禱を捧げ、評議員桑島定助氏が故人の履歷を朗讀し、來賓木下尙江氏が弔詞を暢べ、本校生徒が讚美歌(五一〇)をうたひ、理事長森川抱次氏が學校を代表して弔詞を述べ、弔電の披露があり、親戚總代の挨拶があつて、式は十二時に終つた。滿堂の會葬者であつたが、尙火葬場迄見

送る者自動車十五臺に及んだ。同日午後二時半遺骨を同家の墳塋に收めた。まことに、校内は、慈父を失つた寂寥を嘗と感した。吁。吁。

深澤氏に對しては筆舌に盡し難き思ひがあるが、周校長は『深澤利重翁と共愛女學校—私の知れる限りに於て—』と題して、斯く記す、

噫！深澤翁は既に逝かれた、私に取つては之を思ひ出すだに云ひ知れぬ寂寞を感じる。

大正十四年九月私は群馬縣下に只一人の知人しか居なかつた共愛女學校へ赴任致しましたが、その時から深澤翁は一週二回位必ず學校へ來られて黙々見ては御歸りになる。理事會には時刻を遠へず御出席になり「皆様がよろしいと御考へになる事に對しては私は異議はありません」と仰せられるのが常であつた。盲者蛇をおぢないとか、私は上州の氣風も知らなければ共愛の歴史も更に知らない、傳統を破り習慣を無視して、良いと信ずることは森川氏と相談してはやりませんが、考へて見ると深澤翁の意見に副はない事が多くあつたに違ひない。然るに深澤翁の偉大さは其處である、翁は私に對しては一言も反對又は意見がましい事は決して仰せにならない。翁は終始誠意を以て私の申上げた事の成就し都合よく運ぶ様にと御盡力下さつたばかりでした。斯るは普通の人には出来ない事である。

翁は共愛を我が子の如くに愛し、共愛のことならば我を忘れて爲される、たとへその事が自分の意見とは異つても。

私は翁と交はれば交はる程、知れば知る程、その偉大さに對し尊敬を拂ふものである。翁の畢生の事業—四十六年間育て、來られた處の此の共愛—に少したりとも盡すことを得たならば、實

に吾人若輩の光榮である。古人言ふ、人生意氣に感ず功名又何をか論ぜん、と實に同感である。理事諸先輩の指圖を承け残る生涯を共愛女學校のため奉仕することが吾人の使命であらう。

深澤翁は至誠、無慾、意見ありて謙讓、意志強固であつて見識非凡、之等に關する逸話は澤山にあるが、敢て所感の一端を述べて追懐の意を表す。(共愛時報第卅二號)

恩人を品階することは多少躊躇せられないでもないが、暫らく御免を蒙つて腹藏のないところをしるさせて頂くならば、中年以後の氏には石橋を叩いて渡る底の消極主義な所が多分にあつたのではなかつたか。元本校々長であつた堀貞一氏が『深澤利重』に寄せて居られる一文の中に左の如きことがしるしてある。

明治三十二年小生前橋教會牧師に赴任せし頃は四五十名の生徒ありし様に記憶す。此の間常に深澤翁は確實の經營を尙び、全く保守的態度にて、寄宿舎の外には、三室かの教室あるのみにて頗る不便なりしを以て、三十四年頃初めて瓦屋根の教室を造らんと計畫せる處、翁は大に反對して、その集金の難きを申されし故、小生は三百圓位は自分獨人にて募集す、君には一錢の寄附も仰がざるべし、依つて同意文はされ度しと強請し遂に承諾を得たり。但し内心は六百圓を得れば建築費に不足すべしと想ひ、運動に先だちて警察には千圓を募集する旨届出をなしたり。その後實際に募集に着手したる處意外にも千二百圓を募金し得て、改築を完了せり。この時に深澤翁は前言を忘れた如く大に感謝され自らも募金されしを記憶す。云々

氏の面目が躍如として見る様である。周校長の談に、曾て育愛館の窓障子が紙張で断えず破れて張替へる不經濟を理由に、硝子にしようといふ議が森川理事長から提案された時、深澤氏は「私は

硝子障子にすることは反対でありますけれども、森川さんが理事になられる時何でも森川さんの意見に従ひますといふ約束でしたから賛成致します」といつて決議に加はられたといふことである。前理事長森村堯太氏は、銀行家であつたから諸事頗る圓滿にて、各方面に摩擦の起らない様に心がけられ、従つて態度は多少不鮮明な嫌ひが無いでもなかつた様であるが、森川氏は、社會運動の闘士であり、主義のある政治家であるから、態度は甚しく銳角的で誠に校長と共に積極主義を持し、思ふ所は率直に敢行するので、屢々深澤氏の意に反する事もあつた様であるけれども、よしそれが學校の爲であるならば、反對の場合でも賛成して協力するといふ氏の寛大と宏量とによつて本校の事業は進んで來たのであつた。

青柳新米氏も、其の『深澤さんと共愛女學校』と題する思出の一篇の中にかういふ事を記して居られる。

深澤さん程共愛を自分のものと思つた人は有るまい。私も随分多年深澤さんと共愛の事を共にしたが、特に共愛社を財団法人にする時や講堂新築の募金の時には、幾日も一一緒に奔走したのである。深澤さんは忙しいのに貴重の時間をさいて態々遠方の御宅から出て來て奔走して下さる、その真心には實に感激させられたのである。深澤さんのやうなのが本當の犠牲献身の働きと云ふべきだとつくづく感じたのである。

共愛で評議員會又は理事會などが開かれて會計をする時、不足などが有ると資産家でもない深澤さんは屢々私が此の不足の半分は出すとか、三分の一は私が負擔するから後は皆さんでよろしく願ひたいと云ふ寸法で自分から切り出されたから忽ち仕末がついてしまふのであつた。云々

深澤氏は然ういふ人であつた。然ういふ精神で本校を經營し、然ういふ精神の女子を作つて我が國家に提供したいといふ念願であつた。氏は曾つて之を語る、

私の實驗に依りますれば、主人公である男子は教育あり地位才能權勢も有る家庭にても、主婦たる妻女にして教育乏しく放縱逸樂虚榮を好む如き者であれば、其の家庭は風波多くして其の家に在る者は毎も氣持悪しく苦痛多きものなるも、之に反して主人公たる男子は教育なく我儘にて放縱の生活を好む如き者なりとするも、主婦たる妻女の賢婦人であり教育ある者であるなれば、其の家庭は毎に平和で安泰で、其の家に在る者は居心地よく楽しく暮し得らるゝのであります。云々

言や平凡に似たりと雖も、氏が多年の経験から出たものであつて、襟を正して傾聴すべき金訓たるを失はない。斯うしたことを語る資格有る人の無くなつた我が校内を眺めて、そゞろ秋風の身にしむ思ひがする。

私立學校經營の悩み

昭和九年十一月十日より數日、陸軍特別大演習の爲、聖上陛下には前橋に御駐蹕遊ばさるゝにつき、十日午後三時三十五分本校生徒も所定の位置に於て半数參列奉迎申上げ、森川理事長は縣會議員として、周校長は私立學校長として、孰も列立拜謁の榮を忝うした。同十二日午後にも、全員聖駕奉迎の爲指定の場所に參向した。同十四日には、生徒三十六名教師四名、觀兵式に陪觀を差許され、トラツク二臺に分乗して午前五時半に出發した。周校長は、觀兵式後賜饌の光榮に浴した。此の日、大本營前から市内にかけて旗行列が行はれたので、高崎の觀兵式に參列しない生徒は全部

參加した。同十五日には、前橋中學校に於て、中小學校生徒約五千名の天覽合同體操會が催され、本校生徒六十名參加した。又縣師範校々庭に於て教員の奉拜があつた、之には教員等參列の榮を得た。越えて同十七日には高崎に於て、中等學校生徒並に青訓生等約四万人の御親閲があつたので、本校からは生徒二十三名教員三名參列した。他の生徒は、聖駕奉迎の爲指定の場所に出向參列した。同十八日は、聖駕御還御奉送の爲、生徒半數指定の場所に出向參列した。午後三時には、公園に於て奉賽祭があり、之にも參列した。同二十日には、大本營の拜觀を差許され、全校にて拜觀に罷出でた。尙二十九日には、臨江閣に赴いて天覽の學藝品を拜觀した。

同二十日の理事會に於て、『共愛女學校設立者深澤利重氏永眠セラレタルニ付半田善四郎氏ヲ設立者ニ選任』の件を決議し、翌日半田氏の承諾を得て手續を爲し、同年十二月二十二日附を以て認可せられた。

昭和十年一月早々隣接地八十二坪五九を讓渡され本校の有に歸した。狭少と雖も擴張であつた。感謝すべきである。

本校として最も問題として來たものは、本校の構内地に最も密接してゐる宣教師社團所有の土地建物であつた。何分にも千六百六十八坪九合六勺の廣さを有つ土地であり、木造二階建の相當堅牢なる建物のことであるから、買へるとしても容易な金額ではない。それに加ふるに宣教師社團との交渉がそんなに滑らかに運べる事柄ではなかつた。こゝ數年間に亘る理事諸氏の一方ならぬ努力が報ひられて、同年二月二十八日即ち本校創立第四十七週年記念日の前日に登記手續を完了して本校の所有に歸した。苦勞をして手に入れたゞけに學校當局の喜悅も又大きかつた。殊に校長の感謝歡

喜は言葉にも筆にも盡せないものがあつた。周校長は、共愛時報第三十三號に、『ミツシヨン所有地の買収―多年の望を達したる報告』と題して、其の感謝と歡喜の一端を披瀝してゐるが、其の感謝歡喜の裏面には、更に將來の大なる苦勞の潜んでゐることを見過してはならない。校長は、該報告文の後部に曰ふ、『此の事については教職員生徒は勿論のこと卒業生共愛關係者一同に取つて大なる喜びを感じるニユースに違ひないと思ふ。刻下の共愛に取つては是非必要と云へないかも知れぬが、共愛館から僅か二尺、常盤館から數尺の距離にある土地をどうしても買収せねば將來の發展の見込がない事は一目瞭然である。共愛女學校生徒が熱望して止まないのは運動場の擴張で、現在の運動場は僅か二百餘坪の借地で周圍の様子から考へて擴張は至難と思ふ。且つ現今の敷地では校舎増築の餘地は殆どない。今回の土地買収について理事一同の御盡力は多大であつて殊に半田理事は大なる熱心と犠牲を拂つてその成立を容易迅速ならしめた事は特に感謝せねばならぬ。共愛女學校は何等恒久的財源がないからして建築や設備、校地の擴張等をする場合は實に局外者の想像し得ない苦心を理事者がして下さる。神の助けも亦至れりであつて只々感謝の外はありません。』と。此の校長と歡喜を共にし、亦其の苦衷に共感し得る者あらば幸である。

其の頃の周校長の心境を語るものとして、『私立學校の悩み』てふ共愛時報第三十四號卷頭の一文を紹介しておく。蓋し之は學校自體の偽らざる告白と信するからである。

私立學校の經營は第三者から推察することの出来ない困難が多くあるが、こゝでそのいくつかを挙げやう。

經濟的の悩み、官公立學校の經費は豫算によつて決せられ、多く取るか少く取るかが問題

で、一旦豫算として可決された以上は先づ安心であると云へる。處が私立學校はそう簡單には出來ない。勿論豫算を組み之に關する協議もあるが、豫算の中収入の主體は生徒の月謝で、此の外補助金、基本財産の収入と寄附金がある。補助金は年々申請すべきもので基本財産の極めて少い學校では（本校の如きはそれである）月謝の外最も主なる収入は寄附金であるが、年々寄附を仰ぐのであるから容易ならぬ努力を要する。經常費の外は臨時支出を要する場合が少くない。校舎の増築の如きは最も著しいものである。教具の購入、何か新しい試みをしやうと立案しても之を實現する經費のない場合が多いのである。されば私立學校は概して校舎教具等官公立に比して見劣るのが常で、理解なき世人は只外觀を以て判斷するが故に私立學校を劣れるものと速に評する場合が尠くない。

次に私立學校の教職員生徒が理想を見失ひ易く徒らに官公立學校の眞似をして私立學校本來の目的を貫徹し得ないことである。私立學校は何れも特有の理想と目的を以て建てられたもので創業者は堅忍不拔の精神で無から有を生ずるが如き體驗と信念の持主である場合が多い。教育の方針、校舎の配置、宗教々育の實施、無資格なれど有能なる教員の採用、年中行事の極めて印象深く學窓生活の思出を深めること等を始め、官公立學校では到底實行の出來ない眞似も出來ないことが頗る多い。本校の如き小さい學校でも十指に餘る程の種々のことがある。然るに私立學校の誇であり幸福であると考へることをせず、反つて自ら進んで公立學校の模倣をし、特長を失ふが如きは慨歎すべきである。例へば私立學校に於ける教師と生徒の親密なことは公立學校の到底企て及ぶ所ではないが、時々生徒は教師生徒間の隔離を望むものがある。朝拜の如きは此又大なる

特色であるにも拘はらず、之を苦にする人もある。翼ある鳥がその便利を知らずして反つてその翼を失ふを希ふが如き愚さである。

私立學校の生命はその理想にある。即ち私立學校は將來に生きて居る。一代にして完成實現し得なければその子孫や後繼者が代つて之を完成すればよいので、従つて卒業生の愛校心はその校の資源であり動力である。その學校に居ながら愛校心を持たぬもの、卒業生でありながらその母校を悪く思ふ者が多ければ多い程その學校は振はない。吾人は我が校の將來について幾多の理想を持つ。現状が如何に不完全であつても敢て失望しないのである。

私立學校の教育は一家總動員でせねばならぬ。教師自身は勿論のこと、その夫人もその子女も悉く學校に對して多大の關心を持ち、指彈さるべき缺點のないことが必要である。此は最も難事の中の難事で、私立學校の成績如何は大に此の點に存するので、最も大なる悩みの一である。

私立學校の特異性を認識し得る人は果して幾人かあらう。一口に私立學校と云ふもそこに幾多の種類があり段階のあることを知らねばならぬ。而して少くとも現代に於て最も良き私立學校は最も設備の完全なのではなく實は最も惱めるものを指す。（十年七月一日稿）

昭和十年頃の寮生活

本校の一つの特色は寄宿舎生活である。寄宿寮に入らなくては眞の訓練は受け得られない。昭和十年七月に其の寮生活の状況を概報してゐるものを左に掲げる。

舎生は全部で三十五人、其の中三人は各々前橋、伊勢崎、富岡の高女を卒業した方々です。其の外六人の若き女先生が双葉寮にゐらつしやいまして私共と一緒に生活してゐて下さいませ。朝

は五時半の起床ベルによつて皆床を離れ身邊の整理がすむと其の日の當番の者は各々受持の掃除にとりかゝります。マスクをかけてきちんとした姿で喜んで庭を掃いたり、部屋掃除をしたり、廊下を拭いたり、湯殿掃除をしたりします。六時半になると静肅のベルが鳴ります。歩いてゐる人も掃除をしてゐる人もしばし黙静をさへげます。やがてラジオ体操です。新鮮な空氣の中でさん／＼と照る日光を浴びながらピアノに合せて運動する時は實に氣持がよいのです。其の後朝食です。テーブルに着きますと、朝は先生方が晝と夜は上級生が代る／＼食前の感謝の祈をさへげます。喜望館と云ふ食堂の名稱にふさはしくみな嬉々として愉快に話したり笑つたりしながらいただきます。間食は午後三時から四時までの間だけ食べたい人は食堂でお母様から送つて來たものや土曜日に買ひ込んで來た御馳走をお友達と一緒に至つて交際的に食べてゐます。其の外はデザートとして食後に果物やお菓子をいたゞくだけで間食はしない事になつてゐます。一週々々の献立を四年生が作りますが、之は舍生一同の發育保健に大切なものである事を思ひ、五月には榮養技師をお招きして二日間にあつて講演をしていただきます。其の他榮養研究所製作の献立等を参考にして工夫し研究してゐます。毎日午後六時になると夕拜を致します。火曜日は校長先生、水曜日は讚美歌練習、木曜日は先生方又は來賓のお話を伺ふ事になつてゐます。金曜日は祈禱會、土曜日は各部屋でお集りをします。縁に萌えた芝生の上で、藤棚の下のベンチに腰を下ろして、或は屋上にて赤城、榛名の雄姿を眺めながら、お集りがすみますと此の晩だけは自修時間がありませんので皆んな遊びます。先生方の部屋で或は合監室で又は校庭のベンチに出て語り合つてゐる仲よしもあります。校長先生のお宅で先生御夫妻と共にトランプをしたり、アツ

ブダウンの遊びをしたり、アルバムを見せていたゞいたり、面白いお話をしたりして、何の遠慮もなく氣がねもなく先生／＼と云つて其の腰にまつわりついて遊び興じてゐる様はまるで一家團樂の光景です。自分のほんたうのお父様にも、あんなに出來ない子供さんさへあるのではないかと思はれる位です。

土曜日の晩をのぞいては夕拜後から九時まで自修時間で、自分の部屋で靜かに勉強する事になつてゐます。

舍生は實によく洗濯をします。洗濯場に洗濯表をはりまして、洗濯をした日には○をつける事にしてゐますが、一ヶ月の統計によりますと、一番多い人で二十回位、少ない人でも七八回はします。家に居たら自分の洋服などとても洗濯しないだらうと思はれる小さい一年生でも、お友達と一緒に何の苦もなくうれしうに話しながら洗濯してゐます。

又夜は齒をみがいて寝る事になつてゐまして、洗面所にハミガキ表がありまして、磨いた夜は○をつけ忘れた時は×印をつけてゐますが、始めの中は×印が多かつたのですが、此の頃では病人位で皆よく磨きます。

學期の始めには舍の早天祈禱會を致しました。「新しい妹達を澤山此の舍に與へられて感謝です。どうぞ一日も早く共愛の精神がわかり心を合せてほんとうに神様のお喜びになる舍となす事の出來ます様に……」かうした祈が上級生によつてさへげられました。又五月の末には近くの立派なバラの庭園を見せていたゞきに行きました。共愛にあんなきれいなバラの園が出來たら是非皆様にもいらつしやつていたゞきたい。信愛館のバラのアーチも其の内に美事になる事せう。

學期の末には何か良い映畫を舍で見てもみんなで楽しもうと思つてゐます。宛として見るが如く、まことによく描寫されてゐる。我が共愛の學園の生徒たちは、かうして圓滿な發育を遂げて、やがては御國の爲に献げらるべき善き精神と人格とを作り上げてゐるのである。

服 制

本校生徒の服制のことを書き洩したが、聽く所によれば、創業時代に於ては女工さんと間違へられた様な風體をしてゐたこともあつたが、その後年と共に變遷して、追々に改善されたらしい。堀校長の時代から川合校長の時代へかけては、まだ服制はなかつたが、頭髮は引つ詰めに結つて、木綿の筒袖に海老茶の袴が多數を占めてゐた。下つて青柳校長の時代になると、ある時期には、美しい教師等が美しい衣類を着用したさうで、それは格別競争の意味はなかつたにしても、生徒等には直ちに反響して、袴は海老茶であつたが、お下げ髪に銘仙の着物などを常用するといつた様なこともあつたといふ。其の頃には、本校の基督教主義を毛嫌ひする者もあつたけれども、漸く本校の特色ある教育主義を認めて、『やつぱりヤソ教の共愛女學校が良いわいネ』と評價する者も相當あつたが、又一面に於ては、『共愛は縣立よりも金がかゝる』といふ批評もあつたといふ。何の爲に金がかゝつたのか調べて見るに、どうも服裝のためらしい。而して、お下げに長袖で袴をぞべりと着けた姿は、當時の風景としてそれで好かつたのであらうが、それでも尙斷然目立つてゐたらしい。生徒等が平素登校の途上で、他校に通學する友達と出合つて、『今日あなたの所では何があるの』と問はれた様なこともあつたとか、其の頃でも學校當局では『質素に々々々』にいつたので、殊更に華美といふ程の風態ではなかつたにしても、世間一般から見れば際立つてゐたから、自然本校が

縣立よりも費用が餘計にかゝると言はれたものらしい。

周校長が就任されると共に、本校は、日に月に改新の巨歩を踏み出したので、それに關聯して生徒等の服裝も漸々に改められた。凡て華美冗漫を避け、簡便質素を旨として、結髪も服裝も細心に注意せらるゝことゝなつた。制服に就いて考慮せらるゝに至つたのは、周校長が就任されてから三年目のことであつた。昭和三年の春にはジャムパーが着用されたが、其の年の秋に至り冬服からセーラー服が制服として採用せられ、同四年の春には夏服もセーラーとなし、更に同八年の冬服からあのよく目立つ純白の襟カラーをつけることゝなつたのであつた。こゝに至つて漸く本校の服制が定まり、全校生徒の學園に對する意識も明確になつたと思はれる。

回 顧 十 年

周校長は、昭和十年十二月、就任滿十年に達した時、『回顧十年』てふ一文を草してゐるが、想へば校長としては、多忙な惶しい勞苦の十年であつた。様々な校内の改革と、土地の擴張と、校舎の建築と、人事の變化と、實に多くの事が交錯した此の年月、校長の顛頂の彌々輝きを加へたことに無理はなかつた。周氏はしるした。

共愛へ來て未だ二三年位にしかならぬ様な氣がするのに、最早滿十年も経つたとは驚いた。三四年も勤めればよい積りで參つたのでしたが、遂に無期延期になつて仕舞つたわけである。共愛の十年間の進歩を眺めて見ると、敷地建物備品等は何れも二倍三倍に増加され、卒業生は六百餘名を出して居る。貧しいながら大に恵まれて來て居るわけで、何と云つても神に感謝せねばならぬ。

諸氏等の進歩の原動力は何かと云ふと森川理事長を初め理事諸氏の御盡力の結果で、理事と申せば、故深澤利重氏、故柴田清策氏の功を忘れてはならない。現在の理事諸氏の事を一々具體的に述べる事を差控へなければならぬが、其熱心に對し本校の緣故者が之に共鳴し援助を惜しまなかつたことは勿論である。私は其間に立つて「忠實なる番人」として出来る丈け働いた事も自白せねばならぬ。

十年間の愚なる者の經驗の一端を述べて見ると、如何に精神教育は云ひ易くして實行し難い事であるか、宗教々育も亦同様である。只形式の禮拜や通り一遍の講釋ならば何のことはないが、失望せる者を獎勵し、苦める者を慰め、生れつき人並でない者を一人前に仕上げ、加ふるに優れる者は更に伸ばし、求める者に與へる等が即ち宗教的精神教育で、凡人の到底企て及び難い事である。世に宗教々育を論ずる者が漸くその數を増し、文部當局も亦宗教々育禁止令緩和の必要を認めるに至りましたが、吾校四十幾年の苦節が酬ひられた様な氣がする。宗教なき教育は知慧ある悪魔を造るに等しいと何人か云つたのは味ふべき言葉である。宗教々育は至難の業である。神の助なくば成し得ぬ事である。

女子教育の事業に對して私が極めて不適當なることも今更しみるゝ感じました。改革的、破壊的、冷淡なる、自由を心から愛する私が最も因循姑息を喜び、從順を第一義とする保守的な、依頼心の強い女性を教育するとは如何に考へて見てもはまり役とは考へられぬ。そこで地金を出さない様に、自分の主張を出来る丈け抑へて、日本の家庭、女子の務め等に差支のないばかりではなく、役に立つ様な卒業生を出さうと心を砕く事一通りではない。其處に戦ひがあり苦勞があつた

のです。されば私が十年間の判斷の標準は、神の爲になるか、共愛のために適はしいかの二點であつた。人の意見も過去がどうであらうとも、自分に有利か不利かはみな棄て、只神のため共愛のためと云ふ尺度で計るのでした。私の仕事は荒削りであり地ならしであることは一目瞭然で、先づヨハネの様に「我より後に來る偉大なる者」のため、道を開き地ならしをして置けばよいと考へて居る。人間として野暮で禮儀知らずの野生で、角があつて圓滿にはなかく、出來難い、癩癩持ちで短氣である。斯る變な人物を神が用ひ給ひ、理事諸氏が一切を委せるのであるから、感激奮勵して自我を抑へ、てやつて來たのである。使命終らば感謝して共愛の皆様にお詫びして新しき生活に就くべきであるが、如何に困難が來ても羊を棄て、逃げる様な牧人とは成りたくない決心である。

此の十年間に同勞諸兄弟の數が頗る多かつた、無慮數十人に上つたと思ふ。共愛の教育を築き上げたのは、現職教師諸氏の外に、元教師であつた此の幾十人の恩を忘れてはならない。彼等は薄給に甘んじ致々として教授し、受くること僅かにして求められる處莫大であつた。不幸にして家事上の都合、健康上の都合、人員の都合、其の他種々の都合で當校を去られたが、或る方はより大なる奉仕の機會を與へられて活動しつゝあり、或る人は専ら家庭の人となつて良き市民として母として働いてゐらつしやる。而して折節の來信は、何れも共愛に在る數ヶ月乃至數ヶ年の生活を追憶感謝して居らるゝは、此れ亦神の榮光の顯はれん爲めであると思つて慰められ勵まされる事が多い。

回顧して語るべき事多々あるが、共愛のために神備へ給ひ、漸々と完成して行く跡を顧みて、

不思議に感じ奇蹟的經過に驚くのみである。『來りて神の大なる業を見よ』と叫ばざるを得ない。

(十二月一日)

それは、よし惨澹たる勞苦の十年間であつたとしても、二倍になり三倍になり、嚴然學校としての形體を具備し、内容を調整して來た本校を見らるゝだけで、校長の心を慰むるものは十分にあつたであらうと思ふ。とにかく本校は、周校長の下に、此の十年間に、學校としての一人前になつたのである。

創立五十年記念事業

昭和十一年一月六日の理事會に、協議事項として下記の如き案が提出せられた。

一、共愛女學校創立五十年記念事業

(一) 寄宿舎及特別教室ヲ改築スルコト

(二) 右建築費一万五千圓ヲ五ヶ年間に募集スルコト

(三) 募金責任者ハ理事會及同窓會トス

創立五十週年は、昭和十三年に迫つてゐた。勿論此の案は異議なく通過し、直ちに實行に移された。同年七月發行の共愛時報には、早くも『共愛女學校創立五十週年記念事業趣意書』が發表されてゐる。それには、斯くしるしてある。

我が共愛女學校ハ明治二十一年ノ創立、上州ニ於ケル最モ古キ女學校デアリマス。創立以來終始一貫基督敎主義ヲ以テ人格教育ヲ爲シ、卒業生ヲ出スコト千六百餘名ニ及ビ堅實ト信念固キ人物ヲ社會ニ家庭ニ送り以テ我が校ノ使命ヲ達シツツアリマス事ハ誠ニ感謝スベキコトデアリマ

ス。

我が校ハ昭和十三年ヲ以テ創立五十週年ヲ迎ヘルデアリマス。半世紀ノ歴史ハ決シテ長イトハ申サレマセヌガ、創立當初カラ日本人有志ノミニ依リテ支持シテ來タコトハ誠ニ尊イ努力デアリ又一面ニ其ノ經營ノ苦心ヲ物語ルモノデアリマス。

最近十年間ニ我が校ハ多クノ點ニ於テ改良進歩ヲ遂ゲマシタ。コレハ神ノ惠ノ加ハレルハ申ス迄モアリマセヌガ、理解アル同志者各位ノ同情援助ニ負フ所ガ亦實ニ大キイノデ滿腔ノ感謝ヲ致ス者デアリマス。現在校地二千八百坪、校舎寄宿舎等十棟八百五十餘坪ノ外某理事ノ特別ナ努力ニ依リミツシヨシノ地所千七百餘坪ノ讓渡ヲ受クルニ至リマシタコトハ大ナル喜ビデアリマス。

我が校ノ教育方針、校風ノ置シイ事等ハ今更説明スルニモ及バナイコトト思ヒマスガ、シカシ理想ニ到達スル迄ニハ中々未ダ距離ガアリマス。其處デ創立五十週年ヲ記念スルニ當リ適當ナル記念事業ヲ企テ以テ校運ノ進展ヲ圖リ異彩アル教育機關トシテ能率ヲ増進致シタイト思ヒマス。記念事業計畫ハ大體左ニ記セル通りデアリマスカラ理解アリ義侠ナル皆様ノ御賛同ヲ仰ギ應分ノ御援助ヲ願ヒタイト存ジマス。

記

一、前述ノ趣意ノ下ニ廣ク有志ノ獻金ヲ希望致シマス。

二、記念事業ノ内容ハ(一)寄宿舎一棟、(二)特別教室一棟ノ新築デアリマス。之ニ要スル資金約一万五千圓。

三、御寄附ノ金額ハ隨意トシ成ルベク昭和十三年迄ニ完納願ヘレバ誠ニ好都合デアリマス。

趣意書の發表と共に、着々寄附金は集つて來た。而して、該記念事業に關する協議は、同年十二月三日の理事會に於て、十二年五月十八日の理事會に於て、更に同年七月十七日の理事會に於ても、熱心に續けられた。彌々方針が確立したので、寄宿舎と作法室とを請負事業として建築する事とし、昭和十二年七月三十日森川理事長と木村理事立會の指名入札を行ひ、其の結果九千三百圓にて小野里組に落札し、早くも同八月二日には工を起した。工事は些しの滯滞もなく進捗し、九月五日上棟式を執り行ひ、最初竣工の豫定は十一月末日であつたが、同年十一月十二日には全く工を竣つて請負人から本校へ引渡された、受取るに就ては學校長の外に森川、木村、高橋三理事が立會つた。此の寄宿舎は、二階建瓦葺南向で、東西二十一間南北平均三間、總坪數百四十一坪餘、階上にベランダ六坪あり、階下に三十五疊敷の大法室あり、勉強室は五室、寢室は十室あり、勉強室には一人宛専用の書棚、机及び椅子を備へつけ、收容定員は四十人で、建築設備共に快適な寮舎である。十一月十七日午後二時から教職員並に全校生徒は、此の新築の作法室に參集して感謝會を催した。其の席上に於て、此の新築寄宿舎を「愛光寮」と命名し、神に感謝すると共に工事請負人小野里龜澄、工事監督江角保教兩氏にそれ／＼感謝狀を贈つた。

周校長は、此の寮舎新築落成の歡喜を暢べると共に、寄宿舎に對する感想を斯く記してゐる。

諸共愛女學校の教育には寮舎が必要なることは吾人の屢々論じた通りで、現在も全校生の六分の一は寄宿して居り、創立當時は勿論、其の後も永らく寄宿生中心の教育方針であつた。歴代の當事者等も此の點に着眼して、常盤寮を初めとし、桂寮、二葉寮の如き大きな寮舎を建て、又病室、

茶室(現在の思恩寮)を設けた。最近十年間は新寄宿舎の建築をしなかつたが、修繕、改造等をして専ら寮舎生活の改善に對して少なからず苦心して來た。幸に神の祝福を受けて此の度の如き喜びが興へられた事は、卒業生殊に會て寄宿舎に居られた方々には、我が事の様と共に喜んで下さる事と思ひます。

此の場合に於て一言學校生活に於ける寄宿舎の重要性を述べたい。寄宿舎は單なる下宿ではない、従つて速くて通學不便だから寄宿に入ると云ふ考へ方は根本的に間違つて居る。寄宿舎は教室にも勝る大切な人格教育の道場であつて、家庭では何うしても出来ない時間の嚴守、自分の事は自分でする、共同生活の訓練、宗教的訓練、愛校心の養成等は寄宿舎でなければ味ふことの出來ないものである。父兄母姉、保護者も願くは學校教育の眞精神を諒解下さつて、事情の許す方はどし／＼入舎せられん事を切望する。(十二月八日)

創立四十九週年記念日

上述の如く、五十週年記念の事業計畫が順調に進行してゐる間にも、周校長の身心は休まる暇もない。激烈なる活躍の連續、疲勞を忘れての猛闘であつた。さうした匆忙の裡に創立第四十九年の記念日が來た、昭和十二年三月一日である。當日は例年の通り午前十時から祝賀式を執行し、校長の司會で理事長森川抱次氏が式辭を演べられたが、同時に本年七十七歳の喜壽に達せられた教員杉山勇司氏の爲に喜壽の祝式を併行し、父兄後援會代表、同窓會代表、職員代表、在校生代表、友人等の祝辭と共に記念品が贈呈された。此の異色ある杉山勇司氏が滿二十年間本校に奉仕して、我が校内に於て喜壽を祝し且つ此の日を記念することができたことは、まことに慶ばしき極みであり、

本校として誇り得べき一事であつた。

本校の創立五十週年が彌々一ヶ年後に迫り、此の記念すべき日を迎へた周校長自身も、就任してからそろそろ十年にならうとして、繁劇の裡にも萬感交々であつた。校長は、其の夕心からなる感想を『創立記念日斷想』として記してゐる。曰く

今日は共愛女學校創立四十九周年祝賀式を舉行したが、これから一ヶ年たてば創立五十周年の記念をするわけである。在校生徒、教員、卒業生は勿論理事諸氏を始め共愛關係者、緣故者一同多大の關心を以て、或は感謝し、或は喜び祝し、或は回顧し、又將來を望みて責任を感じ決心を固め、眞心をさゝげ、レプタをさゝげようとするであらう。

私の知つて居る丈でも、卒業生の中の或る者は小遣錢を節約して献じ、或る人は過分かた危ぶまれる程精神を込めたお金を献じ、偏に母校の隆盛完備を心懸けて居る様な状態である。又或る卒業生は貧しくて何も寄附が出来ぬと云つて母校を訪問することさへ差控へて居られると云ふ、種々様々の女らしい決心や行爲、又間違つた態度もあるが涙ぐましい景況である。

母校は母校である！寄附出来る出来ぬは問題ではない。千數百の卒業生の日夕の祈禱、心の故郷が共愛であつて欲しい。然らざれば吾人の努力は空しく、吾人の犠牲も亦無駄である。

燃ゆるが如き愛校心なくば、如何に校舎が立派に建てられても、もはや死せる形骸である、つぎはぎの校舎でよい、在校生、卒業生の區別なく共愛を心の故郷と信じて居れば立派な學校である。

予は元來少しく偏屈な人間で、人が熱すればこちらはいよ／＼冷靜となり可笑しくもなる、自

ら涙を流すことは數へる程しかない。處が共愛へ來た大正十四年のクリスマスの朝、モーニングクアイアが歌つた時、思はず涙を流して止めることが出来なかつた事を記憶して居る。今その理由を白狀しよう。

大正十四年の共愛女學校！知る人ぞ知るで、予は就任前こつそりと様子を見に來た事があつた従つて貧乏學校であることは百も承知で、覺悟の上で赴任したわけである。處が來て見るといよいよその内容の貧弱に驚いた。『經濟上の事は心配させない』との約束であつたが、なか／＼どうもそれは無駄な約束でした。これでは逃げ出さうかと、いさゝか腰を上げかけたのであつた。が、あのクリスマスの歌を聞いた早朝一種の力が身にしみて、『お前はこゝで死ぬべきだ』と云ふ様な命令らしく感じた。情ないやら、失望やら、一生棒に振つた様な氣がして、一生こんな悲しかつた經驗は他に記憶がない位でした。思ふ存分泣いた。『泣きたけりやもつと泣け、もがいたつて駄目だぞ』と云ふ様な吐りを感じた。此れで私の運命とか使命とか云ふ様なものは決つた。以來私は、共愛に接木された様な氣がした。接木がその接木の臺木から離れたら生命はない。私と云ふ人間も共愛と浮沈を共にするのだ。爾來失望の時いやになつた時もあるが、結局接木したと云ふ感が強くて大勢を動かすことは出来なかつた。神の恵は大なるものである、我が校に對して理事諸氏は云ふに及ばず、多くの方々の援助は想像も出来ない位大なるものであつた。ペテロが三度主を知らずと云つた様に、私も神の命令に對して逃げ出さうとした事を思ふて慚愧に堪へない。皆様！職員、生徒、卒業生、共愛の緣故者たる皆様！私は就任當時職員會の歡迎會に於て私は死せる馬骨だと申した（昔或る人は死んだ馬の骨を五百兩で買つた、人之を笑つた、處が一週間

た、ぬ内に一日千里走る様な良馬を多く賣りに來たと云ふ、死んだ馬の骨でさへ五百兩で買つたと云ふ評判が廣まるや、それなら生きた馬はどんなに高く買ふだらうと云つて、皆良馬をつれて來たと云ふ話である。共愛のために本當に良馬たる人間が續々顯はれなくてはならぬ筈だ。

世は亂世である。戦と戦の噂の世である。それなのに上州の一角で靜かに教育事業に従事するは何たる仕合せであり光榮であらう。此の感謝の念を以て或は教へ、或は學び、或は經營して朗かな學園を造る我等は幸福その者である。神は我等を見棄て給はない。

創立記念の夕感想の一端を書いたのである。(三月一日夜)

創立五十週年

昭和十五年三月一日、遂に本校創立五十週年記念の日が來た。半世紀の歲月は決して短かしくしない。本校の如き學校が五十年間に亘つて大過なく經營せられ、順調に進展して來たといふことは、たゞそれだけで驚くべき事柄である。それに就ては、共愛時報第四十二號紙上に於て、周校長の指摘されてゐる様に、創立と經營とに於ける先覺者等の、敬服に値する先見と勇氣と信仰とがあり、又キリスト信仰の精神主義を基礎としての人格修成を目標とする特色ある教育方針があつた。即ち本校の基礎が『砂』でなくして『岩』であつたといふことが、本校をして五十週年を通じて發達の一路を辿らしめ、尙生々進展の可能性を保持せしむる所以である。如何なる行事を執り行ふかに就ては、理事會に於て將た職員會に於て幾度となく協議が繰返され、漸く決定したのが左の如きものであつた。

三月一日(火)午前十時、創立記念日記念式 本校に於て

- | | |
|---|---------------------------|
| 同 | 午後一時、全校故深澤利重氏墓參 |
| 同 | 十八日(金) 午後一時 感謝祈禱會 本校共勵館 |
| 同 | 十九日(土) 午後一時 音楽と劇の會 同所 |
| 同 | 二十日(日) 午後一時 學校關係永眠者追悼會 同所 |
| 同 | 廿一日(月) 午後一時半 童話大會 臨江閣別館 |
| 同 | 廿二日(火) 午後一時半 五十週年記念式 共勵館 |
| 同 | 十九日より二十二日迄 生徒成績品展覽會 |

三月一日の本校創立記念日當日は、理事、父兄後援會役員、同窓會諸姉の少數者が會せられ、午前十時から内だけの小やかな祝式を執り行ひ、午後一時から全校の職員、生徒等が本校創立の恩人深澤利重翁の墓參をした、好晴春暖の午後をまことに想出の深い半日であつた。

三月十八日午後一時から共勵館で、五十週年の感謝祈禱會を催した。教員阿部季夫氏の司會で、杉山勇司、町田正男二氏の獎勵があり、出席者二百五十名であつた。周校長が病氣の爲缺席されたのは遺憾であつた。

三月十九日午後一時から同じく共勵館に於て音楽と劇の會を催した。司會者は阿部氏で、周校長の挨拶があり、直ちに音楽と劇に移り、老練な教師の指導下に訓練された生徒たちの熱演は、耳を樂ませ眼を喜ばせ、半日の想出深き清興であつた。周校長の挨拶にて四時過會を散じた。

三月二十日午後一時から共勵館で、本校關係永眠者の追悼會を催した。司會者はやはり阿部教諭であつた。杉山勇司氏が聖書朗讀して祈禱を捧げられ、町田正男氏が永眠者の芳名を讀み上げら

れ、周校長と森川理事長とが追悼の辭を述べられた。眞に感銘の深い會であつた。半田理事の挨拶を以て會を閉じた。出席者は二百六十名であつた。

三月二十一日午後一時半から臨江閣別館に於て童話大會を開催した。此の日は特に講師として東京から久留島武彦氏が來援せられ『イタリーの桃太郎』といふ題でまことに興味深い童話をせられ、前橋全市の兒童たちを腹の奥底から喜ばせた。特に之が本校創立五十週年の催しの一つであるといふ意味に於て、著しい印象を市民に遺したことは嬉しかつた。

三月二十二日午後一時半、本校共勵館に於て、創立五十週年記念式を執行した。周校長が司會し早坂教師の奏樂、一同讚美歌七十九番をうたひ、住谷天來氏が聖書を朗讀して祈禱をなし、一同國歌を奉唱し、校長は勅語を奉讀し、森川理事長は式辭を暢べられた。亞で講師久留島武彦氏は『誓の岩』と題して講演し、會衆一同に多大の感銘を與へられた。それが終ると、本校聖歌隊の合唱ありて、祝辭に移る。知事閣下、前橋市長以下十三名の懇切なる祝詞は、それらの意味に於て我らの心を打つた。

上記の如く、創立五十週年に際して、記念の事業と行事とは所期のごとく成就した、是れ人爲にあらず、全く神の恩寵といふべきであらう。全校唯深き感謝と感激と歡喜とを以て、來るべき五十年への力足を踏みしめた。

五十週年の營みを終了した時、周校長は『次の五十年を望みて』と題して、左の如き一文を發表した。熟讀に値する文字であるから、其の全文を收録する、

吾が校に於ては去る三月に五十週年記念行事を舉行し、半世紀の困難なる光榮ある歴史の幕を

閉じた。五十年間のさまざまの犠牲、多くの人物が登場されましたが、その功過は神のみ知り給ふことである。人の譽を求めずして働いた幾多の人があつた事、隠れたるに見たまふ神のみ知り給ふ幾多の貢獻のありしことは想像に難くはない。總てが感謝である。神の智慧と恵の豊かにありしことを吾人は感謝する外はない。

諸吾人はすぐに次の五十年の第一歩を踏み出さねばならぬ。只無方針、無理想に踏み出すべきではない。一體吾が校は何處へ行くべきか。卒業生、縁故者一同の飽きざる援助を望むことは申す迄もないが、吾人は高く目標を掲げて進まなくてはならぬ。第一に擧げなくてはならぬ目標は『信念ある謙遜な婦人』を養成したい事である。世間に學校は多くあり、而して其の大部分は知識に偏して居るが、吾人は信念ありて而も謙遜な婦人こそ家庭の礎であると信じ、之れが訓育を以て學校の本領とすべきであると思ふ。

第二は、『身體壯健にして反省の出来る婦人』を造りたい。近來體育に對する世の觀念が大分變つて來た。選手競技の如き虚榮心の満足から着實な運動本位に變つて來た。吾が校は傳統の方針を堅持して、何處までも虚榮や一時的の興奮でなく、耐久力と體力の養成を第一義とする運動體育を奨勵して参りました。力あり特別の技能あるものは稍もすれば反省の徳を缺くが、宗教的氣分は『反省』が大切な役割を演じて居ると思ふ。故に反省の出来る婦人を造らねばならぬ。

第三には、『才能ありて奉仕的婦人』である。才能あれば利を求むることの切にして、他を劣等視することは往々見受けられるが、才能ありて而も奉仕的なるは極めて困難なことである。

信念ありて謙遜

壯健にして反省的
才能ありて奉仕する

此が來らんとする吾が校の五十年間に於ける標的では無からうか。
斯る目標を實現するには、何と申しても教師其の人を得なくてはならぬ。
あゝ人なる哉、人なる哉である。

吾人が切に神に願ふ所は、人物の與へられんことである。
人物さへあれば、設備等は問題とするに足らず。

共鳴の士の來りて共に此の事業のために盡されんことを望む。
來る五十年間の共愛の歩みは、教師其の人を得るか否かによつて決せられると思ふ。

日支事變と本校

昭和十二年七月七日、蘆溝橋の銃聲から遂に日支事變が勃發した。甚だ遺憾な事であるが、止むを得ない。振りかゝる火の子は拂はなくてはならない。東洋の完全平和の爲には、爲すべき事は爲さなくてはならない。吾が國は大東亞新建設の爲に起ち、皇軍は東洋平和の『禍根を芟除』する爲に進撃を開始した。

此の時に當り、異常に鋭敏なる本校々長は、國家の重大時局に對して透徹したる見識を有ち、克く學校指導の方針を確立して誤らず、一般に先んじて國策に即應するの態度を執つた。其の鮮やかなる指導振は、從來の本校を知る者をして驚嘆せしめた。周校長の熱誠は其の精神指導を單に校内に於てのみならず、更に廣く校外に在る同窓生にまでも之を及ぼさんとして、心勞し且つ努力し

た。校長は、『滅私奉公の時』と題する左の如き一文を發表して、彼等を指導せんと試みた。

過日或る村へ參つて卒業生を訪問した時に斯んな話をきいた。各地の愛國婦人會や國防婦人會を始め非常時に働く婦人團體の幹部に、共愛の卒業生がなか／＼多くある。或る打合會の如きは十數名の中で共愛卒業生が半數以上、まるで同窓支部會の様だ、と云ふ話でした。大層愉快な事である。今こそ祖國の爲に立つべき時である。仕事の種類は問ふべきではない。勝敗の大切な要素は婦人の覺悟にある。昔の例を引かなくても彼の世界大戰に於ける獨逸を始めとし、各國共婦人の力を無視することが出来なかつた。

如何なる仕事も大切だ。殊に人の目につかない小さい仕事こそ大切である。手柄にならぬでもよい。利益ではない、奉公である。

同窓會員諸姉は孰も共愛で滅私奉公の精神を叩き込まれた人だ。人一倍その精神を持つて卒業されたのであるから、母校のために滅私奉公された事もあらう、其の他種々の場合に盡された事もあらうが、今は國家總動員の大切な時であるから力一杯頂いて頂かなくてはならぬ。

更に事變中のみでなく、事變後の建設的努力が實に困難なることを覺悟せねばならぬ。堅忍不拔、刻苦勉勵、大なる理想と抱負が無くてはならぬ。仕事は千差万別であるがコツ／＼と忠實に至誠を以て盡されんことを。

斯して諸姉の貢獻こそ五十年の歴史を有する共愛の花であり實である。
諸姉の健康を祈る。

日支事變第一週年が來ると、昭和十三年七月上旬、本校に於ては、國策に従ひ教職員約二十名を

以て共愛國民貯蓄組合を結成した。それと同時に生徒側では、愛國貯金といふ名稱で郵便貯金をする事にし、全校生徒が参加した。猶、七月七日日支事變一週年記念日には、全校が日の丸辨當を食し、其の日を心に記へ事變の意義を咀嚼した。

昭和十四年二月十九日には、東京に於て全國私立中等學校聯合會が開會せられ、左の如き宣言書を決議して發表した。本校も又、私學の一として此の決議に参加した。

宣 言 書

今や我が國は東亞新秩序の建設に任じ長期に亘る努力を以てその遂行に邁進せざるべからず。洵に前古未曾有の難局と謂ふべし。

我等全國民は銳意國民精神の昂揚に努め協心戮力して國策の遂行に志し殊に國家經濟の充足と物資の節用とにつき萬全を期せざるべからず。従つて教育の施設經營も亦之に順應して變革を要すべきや明なり。惟ふに我が私學の存在は正に此の國情に適應せるものと謂ふべし。即ち其の經濟は獨立自營を旨として能く國家經濟に貢獻し其の學風は堅實剛健にして實踐躬行を貴び而して教育事業の成績に於ても官公學に比して軒輊なきのみならず却つて往々特長異彩の見るべきものあり、是れ自ら非常時教育の旨に適合せるものと謂ふべし。然るに世未だ私學の眞價を認めざるもの多く徒らに官尊民卑の陋習に泥み子弟を官公學に群集せしめ百弊茲に醸成する事を覺らず實に思はざるの甚しきものに非ずや。我等私學當事者はこの事態に鑑み一層奮勵努力して益其の成績を發揚し一世の迷夢を覺醒して以て大に國本啓培の途を講すべきなり。今茲に本會の總會に當り我等の庶幾する所を披べて以て天下に宣す。

昭和十四年二月十九日

全國私立中等學校聯合會第廿回總會

昭和十三・四年に於ける寄宿舎

昭和十三年十二月の共愛時報には、かく報告されてゐる。

大正十四五年頃は寄宿生七十五名程居りましたが急激なる交通機關の發達、殊にバスの發展のため寄宿生漸減、三十人程になつた年もあつたが、愛光寮が出来た爲か今年は急に増加しました。現在寄宿生の數を申せば

愛光寮 四〇 二葉寮 二 信愛館 五 思恩寮 九 其他 一 計 五七

文字通り超満員で、もう一つ愛光寮が欲しい位です。寄宿舎生活が前よりも進歩した點を擧げると榮養食を多分に加味した事、朝寝しない事、皆靜かに勉強する事、掃除をよくする事、洗濯をよくする事、就寝前に齒を磨く事、土曜日外出の時菓子十錢以上買はない事、土曜日晩修繕時間のある事、夏は夜寝る前に足を拭く事、間食は必ず食堂でする、そして四時以後は間食しない事、食事は愉快に緩くり食べる事等々。

而して、昭和十四年七月の報告には、『寄宿舎近況』と題して、左の如き興味ある記事がある。

此の間麥が刈られたと思つたらもう田圃に水が入つてすつかり稻が植ゑつけられて毎晩／＼蛙がよくなく、牧ちゃんや靜ちゃんがお週番をしてゐた頃もこんなにして蛙が啼いてゐた。そして寄宿舎の庭に美しい月見草が咲いてゐた。巢立つて行つた人々は今頃何を考へてゐるか知ら。今年も亦夏が來た。葵の花もとう／＼上の方まで咲いて來た。寄宿舎は四月に二十餘名の新入生を

迎えて以来それはく賑かだ。愛光寮四十名、シオン寮八名、平安寮十二名、信愛館四名、それに信和寮七名、合計七十一名、朝鮮から三人、臺灣から七人、流石のネズミちゃんやネコちゃんもいつまで甘へてばかり居るわけにゆかない、二年生気取りで小さい人の世話をしてくかねばならなくなつた。とにかくあの短い洋服を着たSさんがはるく朝鮮羅津から入舎したのもつこの間の様にしか思へなかつたのに、もう四年生、一かどの上級生振を發揮してゐるし、デコちゃんも四人の一年生をかへてお部屋の整頓から清掃、障子のきりばり、おねむり娘をおこしたり、肝油をのませたりの多忙振り、週番は毎日天気豫報をながめては澤山並んだ洗濯物の竿を日向にかつき出す皆さん、今日は久し振のお天気です、お布團はベランダにほして押入の戸や窓もみんな開け放して登校のこと。ぬれた傘やズツクはほじませう、等々……」梅雨期の週番は仲々いそがしい。

食堂には十臺のテーブルが置かれて十人の先生と一緒に食卓を囲む、人蔘も大根も葱もみんな一つのこらす食べさせられる。残したら早速表に記入、偏食黨は毎日くんの献立がすいぶん氣になるらしいけれども赤く塗られた屋根、クリーム色の壁、窓邊に作られたベラとブドウの棚によつて西陽をすつかりさけた涼しい食堂は、その名喜望館の如く我等舎生にとつてたのしい場所である。

陽春四月大勢の新生を迎へた爲、愛光寮もシオン寮も満員、仕方なしに分家した我が平安寮、ところは清流廣瀬川のほとり、川をへだて、なつかしの愛光寮、双葉寮、信愛館が見へ、遠く赤城をのぞむ絶景の地、メンバーはユリベにネズミ、井野軍の豪傑揃ひで十二名、本家の愛

光寮とは違ひ仲々平安寮は不便だ、が、その爲よけいに完備した愛光寮の有難さがしみくわか
る。しかしその昔ユリベならぬ佐保のユリチャンを大將に幾人かの學生がこゝに分家した事を
聞かされて吾等も先輩に負けずに自重してやらうと意氣こんだ。

先づリヤカーで運んだ荷物や机も初めのうちは何だか馴れないせいかごたくしてゐたが、だ
んく日がつにつれてきてきちんとしておちついたお部屋になつた。

チリくどけた、ましい目覺時計と共に飛び起きて平安寮の一日の生活が始まる。お當番の人
がせつせと水がめに井戸水をくみあげる、長い廊下を拭くもの、はたきをかけるもの、しばらく
は甲斐くしく立ち働く、さあ御飯におくれない様にとベルを鳴らして戸閉をして玄關の鍵を
かけ、一同相生橋を渡り、朝のすがすがしい空気を吸ひながら滔々と流れる廣瀬川の水面をみな
がら校内寄宿舎につく。早いと思つて来て見るともうラジオ體操が始まつてゐたり、遅いと思つ
て急ぎ足にやつて来るとまだく時間があつたりする事もある、しかしあの美しい芝生でみんな
一緒になつて體操をする時は實に氣持がい。

夕拜を終へ夜の二時間の勉強時間を食堂ですませて九時になると月見草咲くほの暗い校庭を通
りぬけ平安寮へ歸つてゆく、夏の星が空にきらめいてゐる。氣持のよい風が吹く。

かうして一日がくられてゆく。平安寮の生活も仲々面白い、だが愛光寮の様な理想的な寄宿舎が
校内に最う一つあつたらなあ、とみんなが思つてゐる。

二つの大損失

昭和十四年五月十一日は、本校に取つて眞に悲むべき日であつた。其の日は、朝町田正男教諭が

永眠せられ、夕には森川理事長の夫人が逝かれた。一日のうちに二つの不幸に遭ふとは何たることであるか、全校深き哀愁に鎖された。

町田教諭は、明治三十四年八月一日本縣佐波郡島村に於て、父勘十郎、母もと子の間に四男三女の末弟として生れた。島村小學校を卒へ太田中學校に入學したが第一學年の時父を失ひ、爾來慈母の鞠育の下に中學を卒業し、進んで東京外國語學校にロシア語を専攻し、學業優秀の故を以て特待生とせられ、更に東京帝國大學文學部選科に學び大正十五年三月卒業した。同年六月一日本校教諭の職に就き、其の清高なる品性と堅實なる信仰と深き學殖とを以て、良く學校長を助け、校内に重きを爲した。氏は、早くより基督教を信仰し、東京遊學中は靈南坂教會に屬したが、前橋に居住するに當り昭和五年群馬教會の創立に努力し、其の後同教會の中堅として終生渝らず盡された。氏は大正十三年七月救世軍士官中村悅太郎氏の女きむ子（東京音樂學校出身）を娶り、良き家庭を營み三男二女を儲けたが二男一女を失ひ、一男一女を愛妻と共に遺された。同年一月下旬頃から風邪の氣味とて臥床されたのが、遂に起つこと能はず五月十一日午前八時永眠された。享年三十九才であつた。十二日火葬し、十三日午後二時共勵館で葬儀を執行し、約百六十名の會葬者があつた。本校としては無くてならぬ人物であり、氏に期待する所多大なるものがあつたのに、突如として氏を失つたことは眞に遺憾であつた。學校長としても片腕を擽ぎ取られた様な感じがしたことであらうと思ふ。

森川理事長夫人志満子刀自は埼玉縣兒玉郡賀美村金久保須賀幸七の三女、明治三十一年春後關として森川家に嫁せられたが『資性溫厚にして剛毅、勤勉であつて而も儉素』生來頗る壯健で、主人

の不在勝の家を守つて事業を營み『能く日夜多人數の従業者を監督し、自ら率先して働いた。二年毎に出産する多くの子女を養育し乍ら、殆ど寸暇なしに活動した』森川氏が基督教を信じた時は頗る不満であつたが、其の真相が解ると自ら進んで入信した。不良青年、出獄者、自由廢業婦人等を引取つて世話した。親戚の子女の面倒も見た。多人數の衣類を殆ど一人で調へられた。子女の教育は嚴格で、よく家事を手傳はせて働く良習慣を養成した。近隣とよく親み、困窮者には同情を寄せた。森川氏に取つては實に好き内助者であつたが、昭和十四年五月十一日午後五時三十分六十九歳を一期とし、古稀の老夫を遺して歸天された。實に惜むべきことであつたが、是將天命なれば致方もなかつた。

必要なものは與へられる

創立五十週年記念の追加事業として、昭和十四年六月二日、新校舍平屋建六十餘坪二個教室一棟新築の工を起して八月十五日に竣工し、九月十二日之が命名式を舉行して親和館と稱した。之が工費は金六千三百九十九圓八十四錢であつた。唯斯う書いたゞけでは何でもない様であるが、當事者の苦心努力は容易ではない。即ち周校長は、六月二十六日附『必要のものは與へられん』てふ一文に於て、其間の消息を語つてゐる、曰く

昭和十三年と十四年には入學申込者が定員より遙かに超過した。それで十三年には百十六名、十四年には百十四名の一年生を入學させた。されど此れがために忽ち校舍と寄宿舎の不足を感じ、寄宿舎の如きは人家二個所を借りて假りの寄宿舎を作り、それ／＼平安寮と信和寮と名を付けた。處が教室の方は其の様なわけにはいかないのであるから、どうしても新築せねばならぬ。

此の新築の案が幸に理事會を通過し、官廳の建築許可を得たので六月二日に起工し、十八日に上棟して目下工事を急ぎ、九月の新學期に間に合ふ豫定である。

思へば近年共愛女學校は建築又建築で、或人は此れは建築病にでも罹つたのぢやないかと冗談を云つた位で、此の貧乏な學校でどうしてそんなに建築ができるかと不思議がる人もある。今度の如きは五十週年記念事業の寄宿舎が竣工して間もない事であるし、募金は時節柄不可能だし、困り抜いた。併し一方には此れ丈けの生徒を如何に收容し得るか。吾人は只天を仰ぎ長嘆息を漏すのみであつた。

されど『天は自ら助くる者を助く』と云ふ言葉を思ひ出した時、不可能だかも知れないが兎に角最小限度の二教室増築を立案して見た處、七八分通りは出来さうだ。此れならばと原案を作つて理事會に提出した處、皆様の賛成と激勵を得て、少しは冒険だが着手することが出来た。

必要なものは與へられるとの御言葉の通りである。感謝の外はありませぬ。猶、本校に附屬の幼稚園を設置することに就ては、周校長としては餘程以前から腹案の中にあつたらしいが、實際問題としては昭和十四年九月の理事會に於て協議し、具體案を作成すべきことを決定した。而して之が成案を得たので、同年十二月一日には、共愛幼稚園と稱して開園の運びに至つた。本校學友會社會事業部の事業となし、園長は校長自身が兼任され、赤間充治氏が主事として専ら其の衝に當り、取敢ず保母二名を以て開園し、二十五名の園兒を得たが、昭和十五年四月には四十五名の園兒となり、保母も増員して三名とした。其の後園兒は更に増加して六十餘名に達してゐる。

周、杉山兩氏謝恩會並に杉山氏の永眠

昭和十五年になると、周校長は在職滿十五年に達し、杉山勇司氏は八十歳を迎へられた。兩者多年の功勞は、十二分慰勞感謝に値するものであることに誰しも異論はない。乃ち本校同窓會、父兄後援會及び學友會等が主催となり、會員が心からなる贖金をなし、四月二十日の吉日を卜して校内に於て記念祝賀會を營み、記念品並に金一封を贈呈して、薄か誠意の在るところを表象した。

是より先、此の感謝記念會の計畫されてゐることを仄聞せられた周校長は、同年二月二十九日五十二週年創立記念日に於て『荒野に立ちて』と題する一文に、簡單ながら其の偽はらざる心情を披瀝して居られる。左に其の全文を収録する。

女子教育界の現状は、沙漠か荒野の様な氣持がする。女子教育の目的は何か、その方法は、何人がその任に當るべきか、教科目は如何にすべきか。斯んな問題でも一體女學校に働いて居る幾千の女子教育家が考へた事があるでせうか。醉生夢死と云ふ熟語があるが、女學校の教員たる自分、或はその生活をして居るのではないでせうか。自分は今荒野に立つて居る様なものだ、荒涼たるものである。

X X X

荒野に立つて居ることは、淋しく不安なものだ。淋しいと云ふは孤獨の淋しさでなく、不安は生活の不安ではない。確乎たる信念なきの寂寞であり、與ふべきものなき時の不安である。女子教育はかくあるべきものだとか考へたり言つて見たりした處で空を打つが如し、與へようと思つたつて受取手が無ければ如何とも仕方がない。一般の風潮！敢て一般の風潮と云ふが、一般の風潮

は恐ろしいものだ。吾人は一體學生に何を與へようとするのか。

× × ×
今年が私共愛へ來てから滿十五年になると云ふので、卒業生の有志が發起して何か慰勞會を開かうと云ふのである。荒野に立つて居る自分は、ヨハネの様に未だく叫ぶべき事があり、慰勞される程勞して居らぬのであるが、感ずる所ありて人々の勞を獨りで代表して慰められる矛盾をやつて見る氣になつた。併し荒野は依然荒野であり、女子教育界は依然として未開の荒野である。女子教育の眞意義が明かにされる迄、荒野が良き耕地に化する迄は、吾人は眞の教育家の出づるを待つものである。

× × ×
我はその人にあらず、我が後に來らんものこそ眞の教育家である。道路を直して來んとする本物の教育家の働きを間接になりとも助ける事ができれば幸である。十五年間の仕事を考へれば僅か一本の樹を伐り倒し一坪位の砂利を運んだ位に過ぎない。前途尙際限なき荒野が横つて居ると、読み去り読み來つて、勞に誇らず功に高ぶらざる謙虚なる校長の心事、惻々として我らの心に迫るものがある。斯の心で、我らの校長は、本校の爲に十五年間盡瘁されたのである。『何の學校でも、學校には休業の日があり、校長には休暇がある。併し此の學校は休業になると多く工事をするので、學校も休まず、校長にも休みがない』と誰か語られた。年中無休で奉仕し、晝夜兼行で活動しつゞけられ、尙働き足りない様な顔して居られる、それが本校々長周再賜氏である。特殊學校のそれは別として、女學校長としては、是れ程迄に働く者はあるまい、周校長は恐らく日本一で

あらう。此は唯編者の一家言ではない、眞に周氏を知る者はそれを語つてゐるのである。

猶、杉山勇司氏は、上述の如く八十の賀會を催され、學校の内外より愛慕され、校實とも謂ふべき人であつたが、同年十月七日に至り恰も枯木の倒るゝが如く突然歸天された。生徒たちには『おぢいちゃん』と慕はれ、同窓生たちからは『杉山先生々々々』と敬はれ、寒巖に倚る枯木のごとき容姿にも無限の温味を藏し、接する者をして春風に觸るゝの思ひあらしめ、學校を暖かいものにし、氏あるによりて母校を思はしむるものがあつた。然うした存在の氏が、永久に去られたといふことは、限りなく寂しいことであつた。何人も此の空虚を満すことはできない、又誰も氏に代ることはできない。別離の情は綿々としてつきない。

杉山氏は、文久元年九月十五日川越藩士の家に生れたが、藩侯が前橋へ轉封になつたので前橋に來られた。明治十一年一月八日小學校全科卒業、其の時『殊勝に付泰西國法論一部群馬縣より授與』された。同年本縣師範學校四級卒業と認定され、同八月群馬縣四級訓導に任ぜられ勢多郡横室小學校勤務、同十四年依願免職された。明治十一年二月より同十四年迄保岡亮吉氏に就て漢學を修めた。明治十三年十二月本縣小學校教員學力試験法乙科適合と認められた。明治十五年九月から同十九年七月迄基督教の傳道に従事した。明治二十四年八月四日群馬縣小學校訓導に任ぜられ、大正四年八月迄前橋市内の敷島、中川、桃井諸校に勤務した。明治四十四年二十年以上前橋市の教育に従事した功勞者として市教育會から花瓶一個贈與された。大正四年九月私立前橋育學校教育主任を依囑せられ同六年迄勤務した。大正六年四月前橋市制施行二十五年記念に際し市より銀盃一個贈與された。同年四月本校教員囑託となり死に至る迄勤続された。大正十年國勢調査委員を命ぜられ

た。同十一年四月其の慰勞として市より大理石製置時計を贈られた。同月市立敷島小學校創立五十年に際し市より銅製花瓶一個贈與された。同月群馬郡國府村高等小學校創立三十年に際し創立功勞記念として銅製火鉢一個を贈られた。大正十二年三月國勢調査記念品を下賜された。昭和十二年四月廿三日群馬縣教育會創立五十週年記念式に當り多年の功勞を以て縣知事より表彰された。昭和十三年三月廿二日本校創立五十週年祝典に際し功勞多大なるを以て共愛社より表彰された。氏は寡慾恬淡、直情徑行の人で、權勢に仍て態度を變ぜず、敢て暴言を吐き、曲事を行ふ人ではないが、他校に在つた時は、屢々正々堂々の行動に於て誤解せられたり、忌避せられたりする事があつたけれども、本校に於て絶えて其の事なく、克く精勤勉勵して終を全ふされた。之に就ては、氏の老熟したと云ふこともあらうが、又周校長の統領の技倆に負ふところがあるか、又は校長の人格が氏を推服せしめ得たものであらう。周氏が十有餘年に亘り杉山氏を部下となし得たといふことは、群馬縣の教育界に於て、蓋し異數の事と認むべきであらう。而して、之に由て、周氏の並々ならざる人物であることも、認めらるべきであると思ふ。

御盛儀と愛國農園と負債整理

昭和十五年十一月十日には、皇紀二千六百年記念の式典が宮城前大廣場で催され、朝野の臣民約五萬人が陪席の光榮を得たのであるが、本校の森川理事長も又蠶品種審査會委員の資格を以て特別席を賜はり、蠶糸業功勞者として勅定の綠綬褒章を授與された。當日は本校に於ても祝賀式を執行して後、四年生は前橋市の祝賀式に參列した。猶、同月二十日には、教育に關する勅語渙發五十週年記念式、紀元二千六百年記念式、中等學校長會等を教育會館に於て催され、周校長も參列された。

昭和十六年四月二十九日其の筋の命により、從來校内にあつた學友會其の外の會を全部解消して新たに全校生徒職員を網羅して學徒團を組織した。爾後國策に従ひ本團の一本立にて指導されてゐる。

昭和十六年六月四日、一千八百四十圓を以て畑六畝四歩の園藝實習地を設けた。又、昭和十七年二月二日の理事會に於て、愛國農園の事を決議し、同窓生其の他の蠶金により一万四千三百十圓を以て畑四反七畝二十一步を購入し、内二反六畝二十二歩を愛國農園に、二反二十九歩を運動場にした。

猶、本校に周校長が招聘される時には、學校は小さくて貧乏であるけれども、借金は無いといふ話であつたさうであるが、實際に赴任して見るとかなりの負債があることが判明して周氏を驚かした。何年頃からあつたのか判らない、多分今教員室其の他を含んでゐる一棟を建築した時にでも借入れたものでもあらうか、金一万一千圓と金四千圓の二口合計金一万五千圓也の借金が立派にあつた。周氏の作つたものではないが、學校の負債である以上、學校長として勿論棄て、おくわけにいかないで、氏が就任二ヶ月目の大正十四年十一月頃からそろ／＼整理の手をつけ始めた。しかし負債には利子がつくので、支拂つても支拂つても金額は減少しない。苦心に苦心を重ね、努力に努力をして、漸くの思ひで昭和十七年五月二日、約二十年間かゝつて完済した、全く周校長の苦勞に負ふところであつた。最初の負債は正に金一万五千圓也であつたけれども、此の二十年間に支拂はれた金額は、金三万九百三十八圓四十一錢也であつた。實に驚くべきであつた。此の多年の負債を皆済した翌日、周校長、深澤信三氏外有志數名は、故深澤利重氏の墓參をなし、校債償却の奉告を

した。校長としては、肩の重荷の下りた感じがしたであらう。

昭和十七年度に於ける宿寮

宿寮の生活は、本校創立以来、本校の名物といふべきもので、本校の特色ある、訓練はこゝで行はれるので、編者は繁を厭はず、寮生活の様を寮内の者が書いたのを引照しておいたが、更に最後に寮生の一人が記してくれた一文を抜載して、寮の様とその生活の現況を紹介することゝする。

若し夫れ本校を訪ふ者は、正門を通過して共愛館の東側に出るであらう。その左「寄宿舍入口」から右に入つてゆくと、そこに舎監室や舎監の先生のお部屋を含む思恩寮がある。赤い屋根の細長い寮で年によつては特別に専攻部生のお部屋となることもあるが、生徒は九人が定員である。其の寮の前に藤棚があり、右手はお風呂場の清身寮、続いて洗面所とお勝手で、突當りの食堂と接してゐる。バラのアーチをくゞり、昇降口の奥は、最も新しい愛光寮、一號室はお作法室になつてゐるが、二號室から六號室迄八人づゝ四十人の生徒が共に生活してゐる。各室が勉強室と寢室とに分れて居り、凡ての點に於て理想的な寮として近縣に誇つてゐる。

踵を返して食堂希望館を通り抜けて双葉寮に入ると、又特別な趣がある。廣い廊下を挟んで兩側にお部屋があり、ちよつと覗いて見た者でも、非常に親しいなごやかな感じをもたせられる。お部屋は四人づゝ八つ、中におばあさんのお部屋が一つあるから、生徒は全部で二十八人である。

これが寄宿舍の大體の様子であるが、一旦此處を出て新運動場の方へ歩を進めると、幼稚園になつてゐる共和館の二階一名獨身アパートと名づけられてゐる所に、六人の先生がお宿りになつてゐ

らつしやる。更にその裏の松蔭荘といふ小さな家にも、先生と生徒が起居を共にしてゐる。

かうして神様の愛護を信する寄宿舍に、凡そ八十人の生徒を收容して、偉大な精神をもつて育てることが出来るといふことは、共愛の誇であり特長とする所である。

さて、それではどんな生活が、こゝに營まれてゐるであらうか。

「カラン、カラン、カラン」東の空がほんのりと紅にそまり出した頃少女達の夢を破つて起床ベルが鳴り渡る。と、床を上げ身仕度をするのも束の間、それ〴〵の持場へと散つてお掃除を始める。

六時のベルを週番が鳴らす頃は、大抵洗面も髪結もすませて各自の仕事に取り懸つてゐる。やがて静肅の時間、朝の敬虔な祈りを捧げ、續いて芝生に出て元氣よくラジオ体操をする。終ると聲も高らかに歌をうたひつゝ、校庭を行進して食堂に入る。

豊かな朝餉を感謝のうちにすませると、いよく登校ベル、各室つれ立つて二列の正常歩で行く。放課後は、お洗濯に、又は勉強讀書に、寸暇をさいてのお便りに、目のまわる様な忙しさ。其の間にも四時には丁寧にお掃除をし、お風呂のある日は皆で楽しく入浴する。

やがて五時に夕食のベルが鳴ると、待つてましたとばかり生徒が集つて来る。共和館の先生も、カラコロと下駄の音を響かせていらつしやり、一緒にテーブルにおつきになる。十一の各テーブルに先生が一人づゝ着かれ、先生を中心に食卓を圍む。一日の様々な出来事に花が咲くのも此の時である。食後のお便りが呼ばれる時の氣持、何ともいへぬ感じである。

しばらく休んで六時の夕拜、これこそ寄宿舍で一番重きを置いてゐるだけあつて、私達に與へる影響は大きい。校長先生は火曜日に寄宿舍でなくては聞く事のできないお話をして下さる。月曜と

木曜は他の先生方、水曜日は讚美歌練習、又夏の夕は此の水曜の夕を利根の河原へ行くこともある。金曜日は記念館の二階で祈禱會が守られ、土曜日は楽しいお部屋の夕拜である。

夜に入つて、二時間の勉強時間は誰も彼も豫習復習に一所懸命である。中間に十五分の休み時間がある。いよ／＼二時間目の終に近づくと下級生の中には眠氣さす者もある。終了のベルと共に机の上を整頓して、いち早く床にもぐつて仕舞ふ者もあるかと思へば、僅かな時間をも惜まれて何かこそ／＼やつてゐる者もある。しかし消燈のベルが鳴れば、一齊に電氣を消して床に就く。

かうして一日／＼を有意義に過してゐるのであるが、その蔭には舎監の先生の御苦勞は言ふに及ばず、四年生も部屋長として重任を負つてゐる傍、二人乃至三人で色々な所を分擔してゐる。勉強時間係は、自習時間中の見廻りはもとより放課後の時間を浪費してゐる者があれば注意をし、又日曜日や祝祭日の暇を見て特別に自習時間を設けて勉強させる等々、自分自身の仕事を犠牲にしても懸命な努力をつゞけてゐる。

ラジオ體操は毎朝元氣な聲で號令をかけ、私達に親しまれてゐる。

あわてんぼや忘れんぼの生徒の落し物を拾ひ集めて、食後呼び出して丁寧に返して上げるのが落物係である。

お掃除係や整理整頓係がすみ／＼まで眼を光らしてゐるので、いつも清潔に保たれきちんと整頓されてゐる。

その他、はき物係、食堂係、風呂場係、洗面所係から修繕、或は風紀に至るまで活潑分野は廣い。しかしこゝに特筆すべきは、榮養係であらう。三四年生に専攻部生も加はつて、二人づゝ授業を

休んでお炊事を手傳ふので、何曜日になるか、誰と一緒にだらうか、非常に興味もたれる。朝は早くから日ねもす三角中にエプロンの姿も甲斐／＼しく、お勝手でおばさんと共に働くのである。おかずや御飯の盛りつけから洗ひ物、はては自轉車を飛ばしての買ひ出しにもゆく。とても愉快な仕事である。生徒が榮養係になつたのは、やつと先頃からの事であるが、今ではお炊事が非常に上達してきたが、それよりも喜ぶべき事は、豊富に材料を集めてお献立をお作りになる舎監の先生の御苦心、お勝手で働くおばあさんの御苦勞をしみ／＼と感ずる事ができ、一層感謝して箸を取る様になつた事である。

次に四季を通じての寄宿舎の楽しい催しについて述べやう。

花も盛の四月、可愛いオカツパの新入生を迎へて何や彼やと落ちつかぬうちにも、はや最初の土曜日の夕には歓迎會が行はれる。進級したばかりの四年生が、妹たちの入學を祝して喜びの詞を述べれば、嬉しさうに中の一人が立つて之に答へる。二部に移つて、一年生の自己紹介、自分の名前とお部屋を大勢の前で發表する。自己紹介も上級生になると流石に上手で、色々なことを言つては笑はせる。先生方も面白い事をおつしやつて親みを加へて下さる。其の後は愉快な劇やゲームが行はれ、初めて浸る和やかな楽しい雰圍氣に、一年生達は之から迎へる生活の上に大きな希望と喜悅を感ずる。やがて校長先生の共愛名物の安樂椅子にのせていたゞいて、讚美歌をうたひ祈禱をして閉會となる。

一學期は夢の如く過ぎて夏休みもま近くなると、各お部屋で知慧をしぼり劇の練習が始まる。そして靜かな夏の一夜、涼しい風の食堂に集ふてしばしの別れを惜み、サヨナラ會が催される。愛光

二番から始まり、分舎の信和寮、はては先生方の飛入り等面白い餘興に拍手爆笑が夜空に流れる。しかし別れの讚美歌をうたひ、會も閉ぢられてしまふと、何とも言へぬ程寂しくなつて來て各自のお部屋にかへり、今度はお部屋のサヨナラ會をするのが常である。

それから二三日すると、それ／＼家路に就く。秋風と共に再び元氣な姿を見せる。

仲秋の名月の夜は、芝生で思出深い宴を設ける。月見の會も無事にすませ、勉強に、運動に勵げんでゐるうち、秋も去り冬が訪れて、十二月に入ると先生方も手傳つて降誕祭の用意に忙しい。其の夜の楽しさは、しるすまでもない。からつ風の吹きすさぶ外面にひきかへ、何と暖かな空氣が室内に満ちてゐることであらう。サンタクロースのおちいさんが窓から入つて來て、贈物をどつさりおいて行く。後でそれをお部屋の人達と仲好くわけ、その時の氣持、まるで幼い子供の様にうれし。

新しい年の始もあわただしく過ぎて、一日々々と春めいてくる。三月の半頃いよ／＼喜びと悲しみうちに三年生の手によつて送別會が催される。お互ひ交される言葉にも感激が溢れ、之が最後と思へば心づくしのもてなしをする者の心も、受ける者の心も感慨無量である。けふばかりは「神ともにいましての最も熱い涙をそゝる。」(十七年十一月)

周校長と其の生活

家庭的であるといふことは、從來本校の特色とし誇とする所ではあつたが、それは時代の推移と共に大に工夫する所がなくてはならなかつた。學制に就て、校舎に就て、設備について、宿寮について、生徒等の風習について、改良すべき多くのことがあつた。が、多年の仕來りを急激に改革す

るといふことは容易な事でない、經費を必要とする事柄に關しては、尙更難事であつた。それは、歴代の常議員や理事や、扱は校長等が、いづれも拮据苦心したことであつた。が、力の及ばざるもがあつて、荏苒延引されてゐたのであつたと思はれる。偶々川合信水氏の如き經綸を有する人物が校長の椅子を占め、本校の爲に大に爲す所あらんと欲して焦慮されたが、時運に恵まれず遺憾乍ら思ふ所を成し得ずして退任するに至つた様な事もあつた。併し乍ら、時代は容赦なく進み、學校は否應なしに革新の關頭に立たされてゐた。而して、天は本校を幸して、必要なる時機に必要な人物を興へた、即ち經營の鬼才森川抱次氏が理事長として登臨し、森川氏の盡力に由つて俊逸周再賜氏が校長として迎へられた。此の兩者孰れも卓拔なる經綸と技倆とを有する人々である。殊に兩者の優れたる實行力に至つては、當時本校の要求に即應したものであつた。兩氏が、其の性格の一面に於て稍や相似たるものはありながらも、本校經營の事に於てはお互によく理解し合つて、協心戮力誠意を以て盡瘁し、改む可きを改め、整ふべきを整へ、定むべきを定め、着々として實效を奏し、本校をして年々擴張發展の巨歩を踏ましむること將に二十年に垂んとし、漸く縣下の女子教育界に押しも押されぬものとならしめられた。是れ全く天の配劑に由る理事長と校長との功績にして、此の絶好の連繫があつてこそ成されたものであると思ふ。編者は、斯の薄か獨斷に似たる言を爲すと雖も、素より歴代の常議員や校長等を無能無經綸であつたといふのではない。編者の近視眼を以てしても、歴代本校當事者等が何れもそれ／＼の特色ある奉仕を以て本校發展の爲に盡されたことは、之を認むるに決して吝さかではない。たゞ森川、周兩氏は、本校の一大回轉機に於て、其の要求に應じて、天が興へた人々であると信する旨を暢ぶるのみである。